
デスティニークエスト

☆あにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニークエスト

【Nコード】

N1641G

【作者名】

☆あにい

【あらすじ】

平和だったこの世界。しかし気づかない所で異変が起き始めていた。そして、とある一人の青年の運命もここから変わっていく・・・

◇キャラ紹介◇(前書き)

RPG系のストーリーで、その途中等でテイルズキャラも登場します。

◇キャラ紹介◇

●クロード・リユーガ
本作主人公。

代々伝わる宝具が原因でモンスターに村を襲撃され、宝具を守りながら旅に出る。

基本的に剣で戦うが、宝具が覚醒してからは魔法剣も使えるようになる。

●レオナ・リユーガ
クロードの妹。
村襲撃後行方不明となる。

●ヒルツ・リユーガ
クロードの兄。
剣の腕はクロードより上。

なのに何故か宝剣の持ち主には選ばれなかった。
レオナ同様に襲撃後行方不明となっている。

●レクサス
スフィアムの王子
特に決まり等に縛りつけられておらず、自由にやっている
剣の扱いもレイラ達に習ったのかそれなりに出来る
クロードを気にかけて色々助力していく

●レイラ
王子に仕える者の一人
剣だけでなく炎系魔法も扱える
常に王子と図書館上階を守っている

だが、レクサスの命により一時スフィアムを離れ裏で動きを見せる

●ビッグベア

スフィアムの洞窟最奥に住み着いていた。

普通のビッグベアより一回り以上大きく、何故そうなったかは不明。レクサス王子のから任務を受けたクロード、その任務の付添人レイラ、洞窟にやってきていた狩人ゲイルにより倒される

●ゲイル

世界中を旅していた弓使い。

疾風の狩人の別名を持つ。

弓の腕前はかなりのもので、放つスピードも正確さもピカ一。風のように放つ矢は誰にも止められない。

●ナイト

突如クロード達の前に現れた。

漆黒の装備をしていて、その実力はクロード以上名前以外詳しい情報はわかっていない

●リユート

ファイザードに住む魔法が得意な青年

雷の魔法を扱う

ファイザードでのイベントでクロードやウィズ達と組んで挑戦した。リーダーの資質あり

●ウィズ

ファイザードに住む魔法が得意な青年

水の魔法を扱う

魔法使い系ながら中々タフな身体を持っている

ファイザードのイベントでは戦いが苦手なチームメイトのララを常

に守っていた

● ララ

ファイアザードに住む魔法が得意な女の子

回復系の魔法を扱える

リユートやウィズと違い攻撃魔法が使えないため、戦いでは常に後衛に位置していた

クロード達と共にファイアザードのイベントに挑戦した

● ゴレム

ファイアザードのイベントの場所になっていた洞窟の奥にいたモンスター

かなり高い守備力を持ち、物理・魔法攻撃によく耐える

クロードのレイントウスとリユート達の魔法で上手くダメージを与え何とか逃げ切れたがまだ倒されてはいない

● マルス

ヴァイル城の王子

隣国のレクサス王子とは面識があるらしく、レクサスに仕えていたレイラも知っていた

冷静に物事を考え判断を下す

姫である妹の事になると性格が変わるらしい

宝具の一つ・フリーレイスを持つ

● ミリア

マルスの妹

水系の魔法を得意としている（ただしマルスから攻撃系の魔法はおぼえさせられてはいない）

外の世界にはあこがれていて、クロード達との出会いでその気持ちをマルスに告げ仲間に加わる

●ボスオーク

ゲイルが戦ったモンスター

オーク達のリーダー

特に戦略とかは考えず、その力だけで戦っている
しかし、あっさりとゲイルが見せた本気の力によって倒された

●クリアラ

クロード達が乗った船を襲った魔物

魔物と分類しているが、海底神殿を守護しているので魔物よりも格
は上のである

海底神殿を荒そうとする者には容赦なく制裁を与える
強力な水の力を扱える

●リアゲインの長老

ゲイルの故郷であるリアゲインをまとめている者で

ゲイルの祖父でもある

かつてはかなりの腕を持っていたらしい

今は静かにリアゲインと風の洞窟を守っている

●ルーティ・カトレット

【ティルズ・オブ・デステイニー】に登場するキャラ

水属性のソーディアン・アトワイトを持つ

世界を回りお宝などを集めているが、その目的は仲間の誰にも話し
ていない

姫であるミリアとは対照的に、どんどん進んでいくタイプである

●ホーク（風の洞窟）

本来は普通の魔物なのだが、風の洞窟にあった【風】の宝玉の力を
受けて巨大化し、力を得てしまった。

風属性の攻撃を得意とする

●ヴァイグ・ホーネスト

闘技場のある街・ツヴェルクに住む人物

いつの日か闘技場のチャンピオンになるのを夢見ている
彼の戦闘スタイルはクロード達とは違い格闘系である

●グレイツ・オーファン

ツヴェルクの闘技場のチャンピオン

格段力が強いわけではないが、魔法の扱いにはかなり長けている
特殊な能力として、魔法陣を空中に固定したりできる
また、彼の魔法は時間の経過と共に強力になっていく

レベル1：ごく平穏な村の青年

ここは争いを知らない、ごく普通の村。

このみ物語は、こんな平和な村から始まっていくのである。

いつものように朝をむかえる村。

「よし、今日もバッチリだな」

自室にて私服に着替えていた青年。

名はクロード・リユーガである。

「クロードお兄ちゃん。起きてる？朝ご飯だよ」

と、一階のキッチンから声が聞こえてきた。

「起きてるよレオナ。今行く」

そして、キッチンに向かうクロード。

「お父さんとお母さんは出掛けちゃったから」

「うん、わかってる・・・とヒルツ兄さんは・・・」

「ヒルツお兄ちゃんならいつもの・・・」

と、裏口から入ってきたクロードとレオナの兄・ヒルツ・リユーガ。

「兄さん、また特訓だね」

「ああ、剣の腕は鈍らせたくないからな」

そう告げるヒルツ。

「それじゃ朝ご飯にしましょ、お兄ちゃん」

そんな感じで、リユーガ家の朝は過ぎていくのだった。

だが、これがこの平和な村で最後の朝になるとは誰も思ってたなかったのだった。

「暇だな・・・」

現在時刻朝の11時。

今家にはクロードしかいなかった。

「ヒルツ兄さんもレオナも近くの山だしな・・・俺も兄さんみたいに稽古・・・してるんだけど・・・中々差が縮まらないんだよな」

そんな事を呟いていたクロード。

「父さん達も帰りは夕方だしな・・・よし、昼ご飯まで稽古やるか」

と、いうわけで庭に出て剣を奮うクロード。

「俺だって・・・いつか兄さんや・・・父さんだって・・・」

目標を持ち、ただひたすら剣を奮い稽古を続けるクロード。

しばらく稽古を続けていたクロード。

「そろそろお昼だな」

そう呟いた。

そして、山にいたレオナは山で採れる食物をバッグ一杯に詰めて帰っていた。

「あれ？」

と、レオナは遠くの空から近づいてくる何かを見つけていた。

「まだレオナ達は・・・」

家に入りながらそういっていると、突然クロード達の父が飛び込んできたのだった。

「と、父さん！？一体どうし・・・」

父に聞こうとする前に腕を掴まれたクロード。

「今すぐ避難するんだ！じゃないと・・・」

と、その時空から何かが飛んできて大地に着弾したのであった。

レベル2：モンスターの襲撃

「父さん・・・これって」

と、父はクロードの腕を掴んだまま何処かの扉を開いた。

すると、そこには地下への階段があったのだった。

「この家に地下室があったなんて・・・」

「こっちだクロード」

父はクロードを連れて地下へとおりていった。

と、父はいきなりクロードに自分が持っていた剣を渡したのだった。

「父さん・・・」

「いつの時代も若い者が道を切り開いていく・・・お前のようにな」

「父さん・・・この剣って・・・」

「我が家に代々守るように言われてきた宝剣・・・お前にもいずれ宝剣の意味を知る」

「父さん・・・」

「必ず守り抜け・・・」

と、上に戻ろうとする父。

「父さんは・・・」

「私はやるべき事がある・・・お前の命と宝剣を敵に渡す訳にはいかないからな」

「えっ、敵って」

驚くクロード。

と、外で戦いが繰り広げられているのか時折振動が伝わってきていた。

「お前は宝剣と共に生きろ・・・必ず出会う仲間と共に」

そして父は、上に出ると地下への扉を閉じたのであった。

しばらく地下にいたクロード。

幸い地下室にも電気があったので、特に問題はなかった。

一人地下にいてからどれくらいの時間が流れたのだろうか。

いつのまにか振動もおさまり、外も静かになっていた。

「・・・外で何があったんだ・・・」

クロードは自分の剣と父から受け取った宝剣を装備して地下の扉を開いた。

そしてクロードはその光景を見て唾然となるのだった。

「・・・!？」

そこに村の面影は何処にもなく、誰が見ても廃墟としかいいようがなかった。

「そうだ、父さんと母さんは・・・」

村中を探したが、探せば探すほど絶望を味わうだけだった。

よほど激しい攻撃だったのだろう、村中どこを見ても形が残っているものはなかった。

「そうだまだ・・・」

何かを思い出したクロードは、突然駆け出していったのだった。

走っているクロード。

目指していたのは村の近くにある山だった。

「山にいったレオナとヒルツ兄さんは・・・」

そして山の入口にやってきたクロード。

だが、そこで更に見つけてしまったのだった。

落ちていたバッグ。

それはクロードもよく知っているものだった。

「レオナがいつも山に食料を取りに行く時に持って行くバッグ・・・」

中を見てみるとレオナが採ってきた食料がどっさり入っていた。

クロードはそのバッグを持ったまま山の中を探して回った。

だが、村同様見つけることはできなかった。

「僕一人だけ生き残ったのか・・・」

と、宝剣を見ると何かが添えつけられていた。

「これは母さんが持っていた宝玉を使って作ったペンダント・・・」

中心に宝玉が埋め込まれているペンダント。

「・・・」

クロードはそのペンダントを首から下げた。

そしてレオナのバッグを背負うと立ち上がった。

「父さん・・・」

宝剣を見ながら呟いたクロード。

「この剣がどういいうものかわからないけど・・村を襲ったやつらは
きっとこれを狙ってた・・」

そしてゆっくりと歩み出していった。

「僕は生きる・・この剣と共に」

そしてここから青年・クロードの冒険の旅が始まっていくのだった。

レベル3..はじまりの町

「たーっ!!」

突如現れたモンスターとの戦闘になったクロード。

元々稽古で鍛えていただけあって、軽く撃破した。

「でも何でこの山にモンスターが・・・」

疑問に思いながらも先へと進むクロード。

しばらく進むと、山の出口が見え始めた。

「とりあえずは町でいろいろ整えないとな」

そういう訳でクロードは、山の出口から見える町へと向かうのであった。

他の町と比べると決して大きくはないのだが、それでも自分が住んでいた村よりは大きいのである。

「まずは宿かな・・・」

そんな訳で宿屋を探すクロード。

と、その時どこからか叫び声が聞こえたのだった。

「あっちか」

急いで向かうクロード。

と、女の子がモンスターに襲われていたのだった。

「させるか！」

背後から斬りかかりモンスターを倒したクロード。

「君・・・大丈夫？」

倒れていたので手を指しのべ起こしてあげたクロード。

「ありがとうございます・・・あの・・・御礼がしたいのでついてきてもらえますか」

特に断る理由もないので、女の子のあとをついていくクロード。

そして、たどりついたのはこの町の宿屋なのであった。

「まさか、こんな偶然が・・・」

驚いているクロード。

「入ってお兄さん」

宿屋の中へ案内する女の子。

そして、女の子はこの宿を経営している両親に事情を説明したのだった。

「娘を助けてくれたんだってね。よかったら泊まっていukai。もちろん料金はいらないよ」

「えっ・・・」

「そうしてよお兄さん」

「はい、お言葉に甘えさせてもらいます」

そう告げるクロードであった。

そして、夜。

「これいいの？」

女の子はクロードからバッグを受け取っていた。

「ずっと持ち歩いてても意味ないしね。今晚の夕食に使ってよ」

と、女の子は

「じゃあ私がお兄さんのために夕ご飯作ってあげるね」

そういうと厨房の方へ駆けていった女の子。

「とりあえず今日は何とかなったけど・・・これからどうしようか」

それを考えてしまうクロード。

と、その時女の子の声が聞こえてきた。

「お兄さん、夕ご飯出来ましたよ」

わざわざ知らせてくれた女の子。

とりあえずその問題は後回しにして、クロードは女の子の元へ向かうのであった。

そして、宿屋のメンバーと一緒に食事を取るクロード。

「山の向こうの村から？」

そう聞き返してきた女の子の母。

「はい・・・」

思い返すのは辛かったが、現実が変わるわけじゃないので全てを話していた。

「お兄さん可哀相・・・」

少し涙を浮かべていた。

「あっ・・・」

慌てるクロード。

「この子は感情表現が激しいからね・・・それより・・・これからどうするんだい・・・帰るところないんだろ」

「はい・・・でも僕にはやらないといけないことがあるので・・・旅をするって決めたんです」

そう告げたクロード。

「決意は固いのね・・・」

「はい・・・」

「出発は明日かい？」

「今のところは・・・」

そう答えるクロード。

「そういうことなら遠慮なくここを使いな。出発する時までね」

「ありがとうございます」

と、女の子が

「だったら私、お兄さんの為にお弁当作るね」

「ありがとう」

クロードは女の子にも笑顔を見せた。

「今日はゆっくり休みな・・・旅は大変だからね」

「はい！」

そしてクロードは、この宿屋でその疲れた身体を癒していくのであった。

翌朝。

昨日は今までになく大変だったクロードは、ぐっすり眠っていた。

「お兄さん」

「ん・・・もう朝か」

「おはようお兄さん」

「うん、おはよう」

そして、昨日と同じメンバーで朝食をいただいた。

「いよいよだね」

そう告げる女の子の母。

「はい、色々お世話になりました」

「御礼をいうのはこっちだよ、娘を助けてもらったんだしね」

「お兄さん本当にありがとう。あと、これ私が作ったお弁当・・・お昼に食べてね」

そういいながらお弁当をクロードに渡した女の子。

「ありがとう」

と、女の子の母が

「こんな事聞くのは野暮かもしれないけど・・・何の為に旅をしてるんだい」

「知る為にです・・・父さんから渡されたこの剣の事も知りたい」

そう告げるクロード。

「ならここから一番近い街・スフィアムにいくといいよ・・・あそこはこの辺りじゃ一番栄えているし図書館もある・・・知りたい情報があるかもね」

「わかりました、スフィアムの街ですね」

そして、出発の時間。

「頑張ってねお兄さん」

「全てが終わったら戻っておいで・・・その時はまた歓迎するよ」

「はい」

そしてクロードは宿屋の人達に見送られ、次の目的地・スフィアムの街へ向かうのであった。

レベル4…スフィアム城の王子

「あれがスフィアム……」

しばらく歩いたクロードは、少し離れた場所に次の目的地・スフィアムの街を見つけていた。

「確かに大きい街だ……それに城もある……あそこなら装備も整えられそうだ」

そんな訳でスフィアムの街目指して駆け出すクロードであった。

そして、スフィアムの街へと入ったクロード。

「まずは宿と……図書館を探そう」

さすがに広いので見逃さないように探していくクロード。

しばらく探していたクロードは、探していたものの一つ図書館を見つけた。

「宝剣のことがわかるかもしれないんだ」

そう思いながら館内に入るクロード。

「沢山の本があるな……手当たり次第に探してみるか」

クロードは隅から隅まで探してみた。

だが、目的の事が書かれた本は見つからなかったのだった。

「これだけ探しても・・・あれ？」

と、クロードは次の階に進む階段を見つけた。

「まだ上があったのか」

そして、階段を上ろうとしたとき突然呼び止められたのだった。

「えっ!？」

驚くクロード。

「ここから先は許可を得た者しか進めない。一般人は立ち去りなさい」

そう告げた人物は若い女の人だった。

「許可ですか？」

「そうよ・・・早々に立ち去りなさい」

仕方なくクロードは上の階にいくのを諦めるのであった。

「許可がないとみれないのか・・・」

と、時間的にお昼だったので適当な場所を見つけてご飯を食べるところにしたクロード。

「ごちそうさまでした」

女の子からもらったお弁当を食べ終えたクロードは宿屋を見つけるためにまた街内を探しまわろうと立ち上がった。

と、目の前の店の壁に貼紙がしてあるのを見つけ近づいてよく見てみた。

「何々……スフィアムの洞窟に住み着いたモンスター退治……か……」

隅々まで見た結果、これは城からだされた貼紙であった。

「モンスター退治する人を募集しているのか……長旅になるし今は少しでも資金は多い方がいいから……」

そう思いながらクロードは城へと足を進めていた。

さすがに近くで見ると大きな城に驚いているクロード。

と、城の外に青年が立っているのを見つけたので声をかけてみることにした。

「あのすみません、貼紙の件でしたんですけど……」

と、それを聞いた青年は

「丁度あと一人欲しかったんだ、ついてこい」

そんな訳で青年の案内で城内に入ったクロード。

中に入り少し広めの部屋に入ると、そこにはすでに何人かの人が見守っていた。

「これからモンスター退治の詳細を僕・スフィアムの王子であるレクサスからする」

「えっ王子って」

と、レクサスの言葉を聞いて驚くクロードであった。

そして説明を始めるレクサス。

「モンスターがいる場所はこのスフィアムの街から少し離れたスフィアムの洞窟だ。それほど内部は複雑ではないが外にいるモンスターよりも強いモンスターがいる・・・目的は一番奥に潜むモンスターの親玉の撃破だ」

説明を続けていくレクサス。

「この作戦の成功にはもちろん報酬はある。それから特別に図書館の上階の出入りの許可も出してやる・・・気になっている者もいるだろうしな」

そんなレクサスの言葉に反応していたクロード。

「これを成功させれば・・・」

「説明はこれで以上だ。あとは個人で準備して洞窟へ向かってくれ」

そう告げたレクサス。

そして、メンバーは解散した。

「しっかりと準備して出掛けよう」

そう決めて道具屋で準備するクロード。

そして城では・・・。

「レクサス王子・・・」

「レイラか・・・どうしたんだ？」

尋ねるレクサス。

「今回作戦に参加したメンバーの資料です」

と、レクサスに書類を手渡すレイラ。

「自ら名乗り出るやつらだからうちの兵士より実力はあるそうだがな」

書類を見ながらそう告げるレクサス。

「たしかにそうなのですが・・・私が図書館で出会った彼は・・・」

レクサスはクロードの資料を見た。

「・・・うちの情報担当は優秀だ・・・つまりこれは事実なのか」

そう呟きながらも一度資料を見るレクサスであった。

レベル5：スフィアムの洞窟での出会い（1）

「よし、準備オッケーだ」

洞窟へ向かう準備も終え、スフィアムの街を出るクロード。

渡された地図を頼りにしばらく進むと、スフィアムの洞窟が見えてきたのだった。

「洞窟に入るのは初めてだけど・・・」

そして、注意しながら内部に入っていくクロード。

「やっぱり洞窟内は薄暗いな・・・」

剣を構え戦闘に備えているクロード。

「そんなを調子では最奥にたどり着くのは困難だわね」

突然の声に驚き振り向くクロード。

と、そこにいたのはレクサスの側にいたレイラであった。

「あなたは・・・」

「図書館ではあなたを追いつくようなことをしてごめんなさい・・・」

「

「いえ、それが決まりだったら仕方ないですよ」

そういうクロード。

「素直な青年ね・・・中には無理矢理上階に行こうとする人もいるのにね」

「ところで・・・」

「自己紹介がまだだったわね・・・私はレイラ・・・レクサス王子に仕えているわ・・・図書館上階の警備も私たちの仕事よ」

そう説明したレイラ。

「それじゃ今回は・・・」

「一応貴方達の援護役を命じられたわ・・・まあ、私個人としては貴方の警護ね」

「僕？」

そんなレイラに対して、不思議そうな表情を見せるクロードなのであった。

「失礼ではあるけど今回の作戦に参加したメンバーの情報を調べさせてもらいました」

「情報を？」

「スフィアムの情報部隊は優秀ですから・・・と、その話は別の機会に・・・」

一呼吸入れるレイラ。

「貴方を除くメンバーはそれなりの実力者・・・でも貴方には何もなかった・・・だから私が付き添うのよ」

そういうワケでここからレイラと共に進むことになったクロード。

「・・・・・・・・」

「どうしたの？クロード君」

尋ねるレイラ。

「いや・・・女の人と一緒にこうやって歩くのレオナと以来だし・・・」

そう告げるクロード。

「・・・・・・・・そう・・・」

それから出てくるモンスターを倒しながら先へと進む二人。

「順調ですね」

「ええ・・・でもおかしいのよ・・・」

突然そういうレイラ。

「おかしいって・・・」

「確かに私達は順調・・・いえ、むしろペースは速い方よ」

確信があるのかそう告げるレイラ。

「それなのに・・・先に入った貴方以外の参加メンバーに追いつけないなんて」

そう考えていたレイラ。

『それは俺が彼等を別の出入口から逃がしたからさ』

「!？」

突然の声にレイラは表情を変え、剣を構えた。

「誰ですか！出てきなさい」

「勇ましいな・・・王族に仕えている者は・・・」

そこに現れたのは、クロードより年上の男であった。

「何者だと聞いています！まずはその手の武器を・・・」

レイラがそう言うと

「そいつは出来ないな・・・これは商売道具でね・・・」

「待ってレイラさん」

と、間に入るクロード。

「クロード君・・・」

「この人は悪い人じゃないよ・・・そんな気がする」

そう告げるクロード。

クロードに言われ剣を引いた。

「に、しても何故この洞窟に・・・」

男が聞くとレイラが

「それはこちらのセリフです！今この洞窟は・・・」

「モンスターの住家・・・そうだろう？」

「それを知っていながら・・・」

「じゃなきゃ狩人としてやっていけないからな・・・」

と、クロードが

「生きる為にあえて危険な所にいくなんて凄いですね」

笑顔でそう告げた。

「クロード君は純粹だから変な事教えないで」

「なるほど・・・と、まだ名乗っていなかったな。疾風の狩人・ゲイルだ」

「ゲイルさんですね。僕はクロード、こっちがレイラさんです」

「よろしく・・・と、君達の目的は最奥にいるモンスターの親玉・・・」

「はい・・・」

「その仕事・・・俺も協力してやるよ」

突然そう告げたゲイルなのであった。

「ゲイルといいましたか・・・貴方は・・・」

「別に報酬をわけろとかは言わないさ・・・俺は狩人だ・・・ただ獲物が同じというだけさ」

そう告げるゲイル。

「レイラさん・・・」

「私が拒否してもクロード君が賛成するでしょうしね・・・同行は構いませんが足手まといになるようでしたら置いていきますので」

キツイ口調のレイラ。

「足手まといにはならないつもりだぜ」

そういうゲイルであった。

そんな訳でクロード一人行動の洞窟突入からわずかの間に二人の間を得たのだった。

「ゲイル・・・」

「何だい？」

「他のメンバーは貴方が逃がした・・・そうでしたね」

「ああ、そうだ」

そう答えるゲイル。

「・・・では、最奥のモンスターに勝てなかった・・・と」

「俺はまだ最奥にはいつてないけどな・・・まあ、そう考えるのが普通だろう」

「私もここに来るのは初めてですから・・・最奥のモンスターも見たことは・・・」

とりあえず会話をしている二人を見ていたクロード。

「さて・・・おしゃべりはここまでだぜ」

突然そう告げるゲイル。

「この奥に・・・」

剣を握り締めるクロード。

「では、まいりましょう」

そして、クロード達三人は洞窟の最奥へと突入していったのであった。

レベル5：スフィアムの洞窟での出会い（2）

「!？」

スフィアムの洞窟。

最奥にまでやってきたクロード達。

「これはまた・・・」

「こんなのがこの洞窟に・・・」

三人とも思ったことはいろいろあれど、三人とも共通して最奥のモンスターを見て驚いていた。

「！」

と、モンスターはこちらに視線を向けた。

「モンスターファイル・・・奴の名はビッグベア・・・しかし俺が知る限り通常のビッグベアを越えてるね」

「僕はビッグベア自体初めてです・・・」

と、レイラが

「二人ともビッグベアについて話してる場合じゃないわ・・・敵はこちらを獲物と認識したようよ」

そう伝えた。

「まあ、俺からすればお前も獲物なんだけどな」

そして襲い掛かってくるビッグベア。

「二人とも散って！かたまっていたら・・・」

「はい！」

「了解」

ビッグベアを囲うように散ったクロード達。

「ターッ！！」

と、ビッグベアに斬りかかっていくクロード。

だが、結果はビッグベアの巨大な腕に弾き飛ばされただけであった。

「おいおい・・・デカイ相手に正面から・・・」

驚いているゲイル。

「クロード君！」

「さすがに力すごいな」

やられながらも敵を評価していたクロード。

「敵を褒めている場合じゃないです」

プンスカなレイラ。

「お二人さん・・・こういう敵の倒し方わかるかい？」

そう質問してきたゲイル。

「斬る」

単純に答えるクロード。

「やはりちゃんと相手を分析して・・・効果的な攻撃を・・・」

「まあ、見せてやるよ」

レイラの言葉の途中でそう告げたゲイル。

「・・・」

やはりプンスカなレイラ。

と、弓を構えるゲイル。

「一撃で目をやる・・・まずは片方の目だけだ・・・」

「目を・・・」

「その後多少狂暴になるが俺がもう片方の目を射る・・・そうすれば多少動きも攻撃も鈍る・・・そうしたらあとお二人さんの出番

だぜ」

「レイラさん……」

「……そうね……貴方の腕前を信用してあげるわ」

そういうレイラ。

「よし、二人はビッグベアの攻撃範囲内に入らないようにな」

「はい！」

「ええ」

と、ビッグベアはゲイルに向かって突進してきた。

「身体が大きくなろうが俺の弓矢は……」

無駄な力を込めず弓を引いていくゲイル。

「さあ、狩りの始まりだ」

そうビッグベアに言い放ったゲイルなのであった。

「……」

クロードもレイラもゲイルの行動をじっと見ていた。

「風によりて射る！疾風閃！！」

弓から放たれた一本の矢。

それはまるで瞬間移動したかのように、一瞬でビッグベアの片目を射抜いたのだった。

「ビッグベアが・・・」

ゲイルの予想通り暴れ始めるビッグベア。

そして、その攻撃の矛先はゲイルに向けられていた。

「ゲイルさん！」

「心配するな・・・こういう展開は何度もやってる・・・いくら予想外のでかさのビッグベアでも・・・」

だが、その時

「唸れ炎！バーニングボール！！」

レイラの放った燃え盛る火炎球は、ビッグベアの顔にヒットした。

当然だがビッグベアは狙いをゲイルからレイラに変更していた。

「おい、何を・・・」

「レイラさんって炎の魔法が使えるんですね」

「ええ、そうよクロード君・・・それとゲイル・・・貴方にとっては狩りかもしれないけど今私達はチームなのよ」

そう告げたレイラ。

「しかし・・・」

「せっかくのチャンス・貴方なら簡単でしょ」

「!？」

今ビッグベアはレイラに気を取られているためほかの二人の行動など気にしていなかった。

「今ですゲイルさん」

「ありがとよ、城のお嬢さん」

そして再び放たれた疾風閃。

仲間の想いが込められたその矢は、ずれることなくもう片方の目を射るのであった。

「よし、命中だ」

そう告げるゲイル。

「両目を失って動きが鈍りましたね」

「レイラさん」

「ええ・・・共に決めましょう」

と、魔法の詠唱を始めたレイラ。

そしてクロードは、ビッグベアに剣を向けていた。

「クロード君・・・私が魔法を放ったら最後の一撃を」

「はいっ」

意気込むクロード。

「炎よ・・・敵を焼き付くせ！フレアトルネード！！」

と、ビッグベアの足元から炎が出現しビッグベアを取り囲み焼き付くした。

そして、炎が消えるとクロードが飛び込んでいた。

「兄さんや父さんにはまだ届かないけど・・・これが！！」

それからしばらくして、ゲイルの案内で洞窟内の隠し通路から外に出たクロード達。

「これで任務完了ですねレイラさん」

「ええ」

「こっちも調達できたし礼を言うぜ」

「では街へ戻りましょうか」

スフィアムの洞窟にて、ビッグベアを倒したクロード達は、意気揚々とスフィアムの街へ戻っていくのだった。

レベル6：宝剣の秘密と一人目の仲間（1）

「ようやくスフィアムの街についた」

「疲れているでしょうけどクロード君・・・」

「はい、お城にですね」

「ええ、レクサス王子も報告を待っているはずですから」

「じゃあ、ゲイルさんも・・・」

「そういうゲイルの方を向くクロード。」

「俺はいい・・・二人だけでいきな。俺は宿屋にいるぜ」

「そういう一人行ってしまったゲイル。」

「本当に勝手ですね・・・狩人って人は・・・」

「そういうレイラ。」

「でもいい人ですよ。ゲイルさんがいなかったならあのビッグベアは倒せませんでしたし」

「・・・そうね」

クロードの言葉にそう返事したレイラ。

そして二人は、スフィアム城へと向かうのだった。

城に入るといきなり目の前にレクサスがいたのだった。

「レクサス王子!？」

「よく無事に戻ってきたな・・・」

そして、ゆっくり休める部屋にレクサスの案内で向かったクロード。

「しかし王子・・・」

「忘れたのかレイラ・・・スフィアムの情報部隊は優秀だぞ」

レクサスのその言葉で全て悟ったレイラ。

「スフィアムの洞窟を出たときから・・・」

「そういうことだ・・・さて・・・報告を聞こうか」

そしてレイラは、今回の任務の結果をレクサスに伝えるのであった。

「ご苦労だったなクロード・・・報酬の方は明日渡す・・・今日は疲れているだろうからなゆっくり休め」

クロードにそう告げるレクサス。

「はい、そうさせてもらいます」

そしてクロードは城をあとにし、ゲイルのいる宿屋へ向かうのだった。

た。

「しかし・・・」

「？」

「よかったのか？もう一人・・・」

レクサスがそういうと

「狩人のゲイルですね・・・あの人は自ら報酬はいらないと言っていましたから」

思い出しながら言うレイラ。

「まあ、俺はどっちでもいいけどな・・・さて、レイラも今日は休め」

「しかしレクサス王子が動かれているのに仕えている私が休むのは・・・」

「別に仕事があるわけじゃない・・・だから休め」

「ありがとうございますレクサス王子」

そしてレイラは城の中の自室に戻っていった。

そしてこちらは宿屋。

「ゲイルさん」

「よう、戻ってきたか」

どうやらゲイルがすでに部屋をとっていたらしく、部屋に案内された。

「ゲイルさん・・宿代は僕が・・・」

クロードがそういうと

「いいんだよ・・今回の件は俺が無理矢理入り込んだ・・・それに俺はお前より蓄えがあるからな。心配するな」

「わかりました、ありがとうございます」

「じゃ、さっさと休もうぜ」

そんな訳でクロード達は、宿屋で疲れた身体を休めるのであった。

翌日。

朝の陽射しでクロードは目を覚ました。

「朝か・・」

ベッドから出るクロード。

「よう、ようやくお目ざめかい」

「ゲイルさん!？」

既に起床していたゲイルは、朝食を頂いている最中だった。

「準備しておいたぜ、食べな」

「ありがとうございますゲイルさん」

お礼を言いながら席につくクロード。

「でも起きるの早いですね、ゲイルさん」

「狩りは早朝にもやったりするからな・・・まあ、慣れだよ」

そう答えるゲイル。

そして、朝食を終えるクロード達。

「そういや今日も城に行くんじゃないのか？」

そういうゲイル。

「あつ、そうだった。じゃ行ってきます」

そう告げると宿屋を飛び出していったのだった。

「やれやれ・・・」

そう呟くとゲイルは自分の弓矢の手入れを始めたのだった。

「すみませ〜ん」

そういいながら城の中に入るクロード。

「いらっしゃいクロード君♪」

「!?!」

いきなり横から声をかけられ驚くクロード。

「レイラさん・・・入口近くで隠れてないでください・・・」

そういうクロード。

「隠れてるつもりはなかったんですけど・・・と・・・上でレクサス王子がお待ちですから行きましょう」

あっさり話題を変え歩き出すレイラ。

仕方なくレイラについていくクロード。

「おはようクロード、ゆっくり休めたか？」

上の階で待っていたレクサス。

「さて・・・まずは報酬だな」

クロードに渡された袋。

「しばらくは金銭には困らない額は入れてある・・・それと・・・」

レクサスは一枚のカードをクロードに渡した。

「これは・・・」

「図書館用の特殊なIDカードだ。それをバッグでもポケットでも何処でもいい・・・もっていれば図書館上階のセキュリティを通過できる。説明補足すると他の都市にある図書館でも使えるが受付でその図書館のセキュリティナンバーをカードに登録する必要がある・・・」

「ありがとうございます」

「それでクロード君・・・いつここを出発するの？」

尋ねるレイラ。

「いつでもいいが出るときは声かけていけよ」

「はい、そうします」

「では、図書館に行こうか・・・クロード」

突然そう告げたレクサスであった。

レベル6：宝剣の秘密と一人目の仲間（2）

「レクサス王子も行くんですか？」

「まあな・・・レイラここを頼んだぞ」

「はい」

了承するレイラ。

そしてクロードとレクサスは、図書館へ向かうことになった。

「でもいいんですか？城を離れても」

そう聞いてみるクロード。

「問題ないよ・・・そこはレイラがうまくやってくれている・・・
・さて、この上が」

「いいんですよね・・・」

改めて聞くクロード。

「許可は出したんだ・・・入ることに誰も文句は言わないさ」

そしてゆつくりとその階へ向かうクロード。

「好きなだけ調べるといい・・・僕も本読んでるからさ」

そういう訳で、この階の本から目当ての本を探し始めるクロード。

だが、それなりに広いこの部屋から一冊の本を探すのは難しかった。

「クロード・・・」

「はい？」

「お前の探してる本は・・・こいつだろ」

と、クロードに本を投げ渡すレクサス。

そして、開かれていたページを見たクロード。

「宝剣・・・」

「お前が大事そうにもってるのも宝剣の一つ・・・みたいだな」

「レクサス王子・・・」

「僕は城に戻る・・・ゆっくり調べてろよ」

そういうと下へと降りていったレクサス。

そしてクロードは宝剣について書かれた本を読んでいくのだった。

「宝剣について色々書いてある」

クロードはその本を熱心に読んでいった。

同じ頃、城に戻っていたレクサスは何かを考えていた。

「どうなさったのですか？レクサス王子」

「少しな・・・」

そう呟いたレクサス。

「宝剣は全部で七本ありそれぞれに異なった力を宿している・・・か・・・別のページに宝剣の紹介が・・・」

更に読んでいくクロード。

「あった・・・父さんから受けとった宝剣・・・名前は・・・【レイントゥス】」

そのページの全てを読んでいくクロード。

「宝剣・レイントゥスは埋め込まれた魔力核に様々な属性を秘めた魔力核を吸収することでその属性を扱えるようになる・・・例えば火の魔力核を吸収すればレイントゥスは火の力を放てる。ただしその力を扱うには使用者にそれなりの力が必要か・・・」

そしてクロードは最後のページを見た。

「宝剣にはまだ秘密があるが・・・この先の文字・・・塗り潰されて読めない」

だがクロードは満足していた。

「この剣の名前レイントウス・能力もわかったし……これからだよな……父さん」

宝剣・レイントウスを見つめながらそう呟くクロードであった。

図書館からの帰り道、本の内容を思い出していた。

「宝剣だけでも七本あるのに世界には意思を持った剣もある……って書いてあったもんな……」

そして宿屋に戻ってきたクロード。

「ずいぶんと嬉しそうだな。その分だと目的は達成できたのか？」

そう聞いてきたゲイル。

「まあね……あとはこれからの旅で……自分で見つける」

そう決めたクロード。

「それなんだが……お前の旅……俺も付き添うぜ」

「ゲイルさんが？」

驚くクロード。

「おう、お前と一緒になら面白い旅になりそうだからな」

「そういうことなら……僕もゲイルさんがいてくれると心強いです」

そういうクロード。

「なら、出発だな」

「えっ、もうですか」

驚くクロード。

「今から出れば夜までに次の町に到着できる・・・」

ゲイルの言葉に考えるクロード。

「どうする？」

「わかりました。じゃあ僕レクサス王子とレイラさんに挨拶します」

そういうと宿屋を出て、城へと駆けていった。

そしてクロードは、城に入るとレクサス達を探した。

「いた、中庭だ」

「レクサス王子・・・クロード君が・・・」

気付くレイラ。

「どうしたんだ・・・慌てて」

「レクサス王子・・・実は・・・」

そしてクロードは、すぐにスフィアムを出発することを伝えたのであった。

「そうか・・・もう出るのか」

「はい、いきなりですみません」

謝るクロード。

「謝ることはない・・・お前の旅だ・・・俺達じゃ止められないよ」

そういうレクサス。

「近くまで来た時は顔を出してくださいね」

レイラがそういうと

「必ず顔出します」

「では、またな・・・クロード」

「レクサス王子とレイラさんもお元気で」

そう告げるとクロードは城を出て、宿屋に戻るのだった。

「レイラ、一つ頼みがある・・・国外の仕事になるが・・・」

「隣国の城にですか・・・」

「ああ・・・調べものだけだから危険はないはずだ」

「わかりました・・・全力でその任務こなします」

と、了承するレイラだった。

そしてクロードとゲイルは街の入口にいた。

「名残惜しいか？」

ゲイルが尋ねると

「確かに別れるのはつらいですけどまた会えますから」

「そうか・・・じゃ、行くぜ」

そしてクロードは新たな仲間・ゲイルを加え旅を再開するのであった。

果たしてこれから先のクロードの旅は・・・。

レベル7…現れた宿敵

スフィアムの街を出発したクロードとゲイル。

「ゲイルさん次の目的地って何処なんですか？」

尋ねるクロード。

「国境にある町・フィアザード・・・何でも魔法で栄えてきた町らしいな・・・まあ、都会に比べれば全然だが」

そう告げるゲイル。

「魔法か・・・レオナが得意だったな・・・」

思い出してしまうクロード。

「家族か？」

「妹です・・・剣とかは苦手でしたけど魔法に才能があったみたいで・・・でも師匠とか先生がいたわけじゃなかったから魔法は使えてなくて」

「仲が良かったんだな・・・」

そういうゲイルだが

「でも村は襲撃されて・・・父さんや母さんは・・・それにレオナやヒルツ兄さんは行方不明だし・・・父さんや母さんと同じように」

「俺に家族はいない・・・だからってお前を励まされる訳じゃない・
・だが妹と兄は死んでない可能性だってある・・・希望は捨てるな
よ」

「ゲイルさん・・・ありがとうございます」

そして二人は、ファイザードの町への歩みを再開するのであった。

「景色がいいですね」

まるで旅行のように景色を楽しんでいるクロード。

「まあ、この辺りは平和だからな・・・今のうちに堪能しておけよ」

クロードにそう伝えるゲイル。

「ゲイルさんって・・・色々旅してきたんですよ・・・だったら・・・」

「見てきてるぜ・・・争いが起きている地域をな・・・さすがに俺も
係わり合いになりたくないから立ち去ってるけどな」

そう語るゲイル。

「争いか・・・」

そんなことを考えながら歩いていたクロード。

『平和が染み付いた考えだな・・・貴様は・・・』

突然声がして振り向くクロード。

と、そこには黒の鎧をまとった男が立っていたのだった。

「あんた・・・何者だ？」

尋ねるゲイル。

「漆黒の大剣士・ナイトとでも名乗っておこうか」

そう告げたナイト。

と、ナイトは背中に装備していた大剣を取り出し構えた。

「俺の目的はただ一つ・・・宝剣を渡してもらおうか」

ナイトはクロードにそう告げたのであった。

「宝剣を渡せて・・・そんな事出来るわけじゃないか・・・これは父さんからもらった大事な剣だ」

そういうクロード。

「大事な剣か・・・だが、使いこなしていなければ宝剣もただの飾りだ」

そう告げるナイト。

「ぐっ・・・」

何も言い返せないクロード。

「渡さないと言うなら力づくで手に入れるだけだ」

大剣を構え攻撃を仕掛けてきたナイト。

「僕だって・・・ずっと稽古してきたんだ」

自分の剣を抜き応戦するクロード。

ぶつかり合う剣の刃と刃。

だが、力で勝っていたのはナイトだった。

クロードを弾き飛ばしたナイト。

「今楽にしてやるよ」

クロードの元に駆け出そうとしたナイトだったが、すぐに後ろに跳び退いた。

よくみるとナイトのいた場所に矢が数本刺さっていたのだった。

「邪魔をするか・・・」

「俺はクロードの仲間だからな・・・疾風閃」

高速の矢を放つゲイル。

だがナイトはギリギリ剣で弾いたのだった。

「厄介だな」

「今なら間に合うぜ・・・ここから立ち去れ」

そう告げるゲイル。

「まあいい・・・貴様が宝剣を持ってもいつでも奪える・・・今は仲間に感謝するんだな」

そういうと何処かへと去っていったのだった。

そして、ただ力の差を見せ付けられたクロードは・・・。

レベル8：魔法の町・ファイザード

ナイトと名乗った人物に力で敗れたクロード。

ゲイルのおかげで何とかその場は逃れることができたが、クロードの心は落ち込んだままであった。

そんな状態でクロードとゲイルは次の町ファイザードに到着したのだった。

「まだ引きずってるのか・・・ナイトとかいったか・・・」

「僕は・・・どうしてレイントウスの持ち主になったんだろう・・・僕より強い兄さんじゃなく」

「ずいぶん弱くなったな・・・モンスター退治の時に嘘みたいだぜ」

そう告げるゲイル。

と、そんな二人の前にとある一行が現れたのだった。

「君達・・・少し時間いいかな」

話し掛けてきたのは若い青年二人と女の人が一人だった。

「何用だ？」

尋ねるゲイル。

「いきなり話し掛けてごめんなさい」

と、女の人が詫びた。

「立ち話も何だし宿屋で食事をしながら話そう・・・もちろんおごるよ」

と、いうことで宿屋にて話を聞くことになったクロードとゲイル。

だが、あまりクロードは乗り気ではなかったが・・・。

「まずはこれを見てほしい」

青年は一枚の紙をゲイルに渡した。

「こいつは・・・この町の行事か？」

「単純な内容です・・・とある洞窟に隠してある珠を三つ集めればいいんです」

「確かに単純だな」

紙を見てそう感じたゲイル。

「それで・・・」

「メンバーは一チーム四人・・・基本的にはこの町の人だけで組むのだが・・・」

青年がそう言うと

「ここは魔法を使う人間が多い・・・もしものための戦力として前衛タイプの人間が欲しいという訳か」

そう告げるゲイル。

「・・・・・・・・」

そんな話を無言で聞いていたクロード。

「そういえばまだ自己紹介がまだでしたね・・・僕は雷の魔法を得意としているリユートだ・・・こちらが水の魔法を得意としているウイズ・・・彼女が治癒系等を得意としているララだ」

そして、ゲイルとクロードも自己紹介をやり再び話は戻された。

「四人って事は俺かクロードのどちらかってことだな」

「ああ、僕たちとしては二人とも腕利きに見えるから五人で行きたいんだけどね・・・」

「ゲイル・・・僕は・・・」

クロードが何かいう前に、ゲイルがリユート達に伝えた。

「クロードをつかせる・・・剣の腕は俺より上だからな」

そんなゲイルの発言に、驚きを隠せないクロードであった。

「ゲイルさん・・・僕は・・・」

戸惑っているクロード。

「よろしく、クロード君」

そういうリユートが手を出してきたので、握手するしかないクロードであった。

そして、夜。

宿屋にてゲイルと話すクロード。

「ゲイルさん・・・どうして僕を・・・」

尋ねるクロード。

「お前が適任だったからだ・・・」

そう答えるゲイル。

「でも、ゲイルさんは僕より強いのに・・・」

クロードがそういうと

「チームの相性だ・・・リユート達のチームは全員が魔法系だ・・・すなわち後衛・・・そして俺の弓も一応は後衛にあたる」

「でもゲイルさんは前衛でも戦えて・・・」

「確かに・・・だが仲間を守れる可能性はお前より低い」

「えっ・・・」

驚くクロード。

「剣と違って相手の物理攻撃を防御できないからな・・・弓は」

そう説明するゲイル。

「・・・」

「これはお前にとって試練だ・・・ナイトに負けたまま終わるか・・・強くなってリベンジするか・・・」

「ゲイルさん・・・」

「俺といっても強くなるきっかけは掴めない・・・こればかりはお前自身が見つけるしかない・・・それを明日・・・見つけてこい」

「強くなるきっかけ・・・」

その言葉を呟くクロード。

「じゃ、俺は寝るぜ」

そういうとベッドに横になったゲイル。

そしてクロードも、明日のために眠りにつくのだった。

理想の自分を思い描きながら・・・。

翌朝。

クロードは早く起きて剣の手入れをしていた。

「早いな・・クロード」

と、やってきたゲイル。

「どこまでフォローできるかわからないけど・・・僕だって変わりたいから」

そう告げたクロード。

「いい顔だな・・それなら大丈夫そうだが魔法主体のチーム編成だ・・モンスター退治の時とは違うからな・・気を引き締めていけ」

「アドバイスありがとうございます、ゲイルさん」

そして、手入れの終わった剣を鞘に戻した。

「さて、朝食終わったらあいつらと合流だな」

そう告げるゲイルであった。

朝食後。

クロードとゲイルはリユート達と待ち合わせ場所にて合流した。

「共に頑張ろうクロード君」

「はい」

「俺は宿屋にいるからな・・・待ってるぜ」

そういうと宿屋の方に戻っていった。

「そういえばリュートさん、目的の場所ってどの辺にあるんですか？」

尋ねるクロード。

「ここファイザードから少し離れた山の中に洞窟がある・・・毎回そこで行われる・・・もちろん行き帰りも油断してはいけないよ」

そう説明するリュート。

「わかりました」

「じゃあ出発しましょ」

そう言うララ。

そしてクロード達四人は、その山目指してファイザードを出るのであった。

レベル9：宝珠を探し出せ（1）

ファイザードを出てまずは山を目指すクロード達。

「そういえばリュートさん」

「何だい、クロード君」

「特殊な珠を探すんですけどどうやって見つけ出すんですか？」

そう尋ねたクロード。

「魔法珠・・・宝珠ともいうけどそれは特殊な魔力を放っているんだ・・・微量だけどね」

そう説明したリュート。

「俺達ファイザードの人間はそんな微量の魔力でも感じ取ることが出来るんだ」

ウィズが付け加えて説明した。

「だから基本的にファイザードの人しか参加しないのよ」

最後にそう告げたウラ。

「そうなのか・・・」

「全く参加しないわけじゃないけどね・・・僕達より探すのが難しい

っただけだよ」

特に山までの道でモンスターが出ることもなく、難無く山のふもとにたどりついた。

「ここからは多少モンスターも出てくるぜ」

そう伝えるウィズ。

「わかりました」

注意しながら途中にある洞窟を目指す四人。

確かにモンスターは出現したものの、殆ど前衛に位置していたクロードが倒していた。

そして、あまり力を消耗することなく洞窟の入口にたどり着くことが出来たのであった。

「ここが・・・」

「この中には宝珠がいくつも隠されている・・・先に三つ集めて戻れば勝ちだ」

そう説明するリユート。

「洞窟内ではクロードとリユートが前を頼む、俺が後ろ間にララだ」
そう指示するウィズ。

「リユートさんも前衛やるんですか？」

尋ねるクロード。

「僕の雷魔法は放ってからのスピードが早いんだ」

「後ろは俺が守るからよ」

そう告げるウィズ。

「それじゃ進もう」

そして洞窟内に入る四人。

クロードは常に自分の剣を構えていた。

「そういえば最初会ったときから気になってたけど・・・クロード君は二本の剣を持っているんだね」

「はい・・・でもこっちの剣は父さんからもらった大事な剣なんです・・・」

「何か・・・事情があるみたいね」

そう言うララ。

「僕たちは余計な詮索はしないよ・・・今は仲間だしね」

そう言うリユート。

と、その時上からモンスターが襲い掛かってきたのだった。

「クロード君！」

「はい！」

モンスターに斬りかかるクロード。

その間に呪文を詠唱するリユート。

ウィズはララを守っていた。

「離れるんだクロード君」

「はい」

「我が電撃、サンダースラッシュ」

リユートの手のひらから雷の刃が放たれ、モンスターを切り裂いたのだった。

「ナイスですリユートさん」

「よし、先へ進もう」

そう告げるリユートであった。

モンスターを撃破し、奥へと進むクロード達。

「大分奥にきたからな・・・そろそろ探してみるか・・・ララ」

「任せて」

そう答えるララ。

「ララさんが探すんですか？」

「彼女は魔力の扱いにかけては僕たちより上だからね」

そう言うリユート。

「近くから感じるよ・・・あっちの・・・岩の辺り」

指し示すララ。

「俺が見てくるぜ」

そういいその場所に向かっていったウィズ。

それからしばらくして、宝珠を手にとって戻ってきたのだった。

「見つけたぜ」

「まずは一つだな」

「よかったですね」

喜ぶクロード。

「ララ、ここから一番近い宝珠の場所わかるかい？」

ララに尋ねるリユート。

「わからないけど調べてみる」

目を閉じ神経を集中させるララ。

その様子を見守るクロード達。

「この感じ・・・宝珠かどうかわからないけど・・・次の分かれ道を右に・・・突き当たりにそれを感じたの」

そう告げるララ。

「ララの言葉を信じて進もう」

ということに決まり、四人は先に進んでいくのであった。

クロード達はララが感じたものが宝珠であると信じ、その場所へ向かった。

そして、何とか二個目の宝珠を入手することが出来たのだった。

「順調ですね」

「そうだね、前衛にクロード君がいてくれるだけで全然違うよ」

そう告げるリユート。

「リユート・・・あとは少し奥にいかないとなみたい」

そう伝えるララ。

「最後の一個を探しに行く前に休憩にしよう」

ちゃんとペース等を考えてそう決めたリユート。

「ふう・・・」

クロードもゆっくり休みことにした。

「でも魔法っていいですね・・・回復させたり・・・遠距離からも攻撃できるし」

そう言うクロード。

「確かに武器で戦うより魔法は補助や治癒がある分いろいろ戦えるな」

そう告げるウィズ。

「でも武器による戦いと同じで全てに有利じゃないからね・・・だからこそ仲間は大事なんだよ・・・」

リユートがそう言う

「そうですね」

納得して言うクロードだった。

「では進もう・・・奥の方が進むのは困難になるだろうから今まで以上
に注意を払っていこう」

そしてクロード達四人は、洞窟の奥へと進んでいくのである。

現れるモンスターを撃破しつつ、一行は奥へ進んでいた。

「ララ、どうだ？」

尋ねるリユート。

「まだ遠いみたい・・・」

そう答えるララ。

と、その時クロードは胸元で何か光が放たれているのに気がついた。

「どうした？クロード」

「何かが光って・・・」

そういいながら取り出すクロード。

「これって母さんの・・・」

取り出されたのは母のペンダントだった。

「その光・・・ペンダントの中心にある珠から出てるわね」

そう告げるララ。

「何か不思議な力があるのかもしれないね・・・」

リユートがそういうと

「もし本当に不思議な力があるなら・・・」

クロードはペンダントを洞窟の奥に向けた。

するとわずかに光が強くなったように感じた。

「リユートさん」

「わかった・・・クロード君とララの力に任せよう」

そういう訳でララと協力して宝珠を探すクロード。

「近いみたいですよ・・・ペンダントの反応が」

「私も感じてます・・・あの奥の壁・・・あの下辺りに」

そう伝えるララ。

「最後の一つも頂きだな」

勝利の笑みを浮かべるウィズ。

だが、次の瞬間激しい振動が辺りに起こったのであった。

レベル9：宝珠を探し出せ（2）

「なっ・・・」

突然の振動に驚く四人。

「一体何が・・・」

と、その時地面が爆発し中からモンスターが姿を現したのだった。

「こいつは・・・岩のモンスター？」

驚くクロード。

「そいつはゴーレムだ・・・かなり頑丈な身体を持つモンスターだ」

そう伝えるリユート。

「もう少しで三つ目が手に入るんだ・・・こんなモンスター」

ゴーレムに戦いを挑むクロード。

剣で斬りかかったのだが、その岩の身体には傷一つついていなかった。

「こいつ本当に岩そのものだな・・・」

「ウィズはララを守って・・・クロード君、連携でいこう」

「はい」

ゴーレムから離れて、リユートの隣に移動したクロード。

「リユートさん・・・あいつの動きを止めるには目を狙えば・・・」

そう伝えるクロード。

かつて戦ったビッグベアの時と同じ戦い方でいこうと考えたのだった。

「よしそれでいこう・・・」

すぐさま詠唱に入るリユート。

「この戦法ならやれる」

そう思っていたクロード。

「いくよ、サンダースラッシュ」

ゴーレムに向けて放たれた雷の魔法。

そして、それと同時にクロードは剣を構えゴーレムに向かっていったのだった。

「リユートさんの魔法が直撃して動きが止まったら一撃を入れる」
クロードの中では、すでに行動のシュミレーションが出来ていた。

だが、リユートのサンダーラッシュがゴーレムに命中した瞬間、雷の刃は碎け散ったのだった。

「えっ・・・」

驚くクロード。

完全に予定とは違う状況に、戦いの経験が浅いクロードが対処できるはずもなかった。

ゴーレムが地面を叩きつけ発生した衝撃波に吹き飛ばされたクロードは、そのまま前衛にいたリユートにぶつかったのだった。

「大丈夫か、リユート！クロード！」

かけよるウィズ。

「ウィズはララを守れ・・・僕たちが傷ついたら後衛に戻るから大丈夫だ」

そう告げるリユート。

と、ゴーレムは腕を構えた。

すると、後方に向けて岩の弾丸が放たれたのだった。

「しまっ・・・」

後ろを振り返るクロード。

「俺が！」

迫る岩の弾丸を気にしながら、詠唱するウィズ。

「ウィズさん！」

「いくぜ・・・アクアウォール！」

ウィズとララの前に出現した水の壁。

そして、ぶつかりあう岩の弾丸と水の壁。

「よし・・・このまま押し流して・・・」

だが次の瞬間、岩の弾丸はその場で爆発を起こしたのであった。

「な・・・につ」

爆発の影響で弾き飛ばされたウィズとララ。

だがララは、ウィズがかばったおかげでダメージは少なかった。

「二人とも大丈夫か！」

そう叫ぶリユート。

「心配するな・・・俺は魔法しか使えない男だけどな・・・身体は丈夫だぜ」

そう告げるウィズ。

「私が戦えないから」

自分を責めるララ。

「ララさん・・・」

しかしその間にもゴーレムは近づいてきていた。

「ウィズ・・・連携いけるか？」

「何とか・・・」

と、その時勢いよく立ち上がったララ。

「ララ？」

「今私はこれしかできないから・・・」

と、詠唱を始めたララ。

「ララ、何を」

「癒しの光を・・・シャイニングヒール」

ララが魔法を発動させると辺りに光が広がっていった。

するとその光を受けたクロード達のダメージが回復していったのだ
った。

「ララ、その魔法は・・・」

驚いているリユート。

「リユートさん・・・ララさんは・・・」

クロードが聞くと

「シャイニングヒールは彼女にとって大技なんだ・・・今の彼女の魔法力じゃ一回が限度なんだ」

そう告げたリユートであった。

「リユート・・・ここは一度引き返した方がいいんじゃないか・・・あの弾丸に気をつければ逃げ切れるはずだ」

そう告げるウィズ。

「そうだね・・・ララもこれ以上の回復魔法は使えないはずだ・・・逃げるチャンスは今しか・・・」

だが、ゴーレムもこちらの動きを悟ったのか後方に向けて岩の弾丸を数発放った。

「!？」

すると、来た道が岩で塞がれたのだった。

「やってくれるな・・・あのモンスター・・・」

「クロード君・・・」

完全に追い詰められたクロード達。

「まだ・・・戦います」

そう告げたクロード。

「戦うって・・・無理だよ」

そういうララ。

「何だかわからないけどやれる気がするんです」

「クロード君・・・君は・・・」

「父さん・・・母さん・・・」

クロードは母が持っていたペンダントをにぎりしめた。

そして自分の剣を鞘に戻した。

「あいつ何で剣を・・・」

驚くウィズ。

「使いこなせないかもしれないけど・・・今リユートさん達を守れるのは僕だけだから」

と、クロードは宝剣・レイントゥスを鞘から抜いたのだった。

「仲間は僕が守るから・・・」

強い気持ちでレイントゥスを構えていたクロード。

「クロード君、僕も加勢する・・・君を誘ったのは僕たちだからね・・・君だけを戦わせたりはしないよ」

「リユートさん・・・」

と、クロード達に迫ってきたゴーレム。

「リユートさん援護を」

「ああ、サンダースラッシュ」

ゴーレムの注意を引き付けるため、魔法を放つリユート。

「これでどうだ!」

宝剣・レイントゥスで攻撃するクロード。

しかし、レイントゥスによる攻撃もそれほど高いダメージを与えることはできなかった。

そして、クロードを振り払うゴーレム。

「まともにやっても勝ち目ないぜ・・・防御力が高すぎるぜ」

そう告げるウィズ。

「でも・・・来た道はすぐには戻れないし・・・」

そういうララ。

「だから僕が戦います・・・一番体力ありますから・・・それに・・・今は父さんと母さんが近くにいます」

そう告げたクロード。

と、その時母のペンダントに埋め込まれていた珠が輝き始めたのだった。

レベル10：レイントウス・烈火の覚醒（1）

「母さんのペンダントが・・・」

「何だ・・・何が起きるんだ・・・」

その眩しい輝きに、ゴーレムも怯んでいた。

「強い力を感じるよ・・・普通とは違う力・・・」

そう呟いたララ。

「レイントウスも・・・反応している・・・のか・・・」

と、その時ゴーレムが突っ込んできたのだった。

「この光で怯んでいたんじゃない・・・」

クロードに放たれるゴーレムの拳。

だが、次の瞬間母のペンダントがクロードの前に飛び出し不思議な力でゴーレムの拳を止めたのだった。

「母さんが・・・僕を・・・」

しかし、ペンダントの珠以外の部分が砕け散り宙に珠だけが残った。

「何が起きるかわからないけど・・・これが導きなら・・・奇跡を起こせる力なら・・・僕は・・・」

クロードは宙に浮いている珠を手には握った。

すると、珠から放たれていた光が赤色に変化した。

「手のひらに感じる・・・熱い力・・・」

と、その珠に浮かび上がった【火】の文字。

「リユート・・・」

「クロード君が何かを目覚めさせた・・・そんな感じだな・・・」

そう告げるリユート。

クロードの手の中にあつた珠は、そこから離れレイントウスのコアの中に入っていった。

「レイントウスに・・・」

と、クロードはレイントウスから何かを伝えられた気がした。

「レイントウスの新たな力・・・あの本に書いてあつたように・・・」

光もやみ、ゴーレムも怯むことなく今度は全力で攻撃してきた。

「!?!」

それを何とかかわすクロード。

「僕はレイントウスを信じて戦う・・・」

と、レイントウスのコアが光を放つ。

「レイントウス！モード・火」
ファイヤー

クロードの言葉と共に、コアに【火】の文字が表れ、レイントウスはその刃を赤く変化させたのであった。

「レイントウスの刃が赤く・・・コアに浮かび上がった火の意味は・・・」

「クロード君！ゴーレムが来る！」

そう叫んだリユート。

ゴーレムの攻撃をかわしながら、勝つための作戦を考えるクロード。

「リユートさんもウィズさんもまだ魔法は使えますか？」

そう尋ねたクロード。

「ああ、僕もウィズもまだ戦えるが・・・」

そういうリユート。

「なら・・・最後の攻撃に出ましょう」

そう告げたクロード。

「最後の・・・」

「この紅く染まったレイントゥスがどれくらいの力があるかわからないですけど・・・追撃をお願いしたいんです・・・少しでもゴーレムの動きが止まればここから逃げることも・・・」

「・・・わかった・・・君を信じるよ・・・」

「こっちは最大に魔法力高めておくからよ」

そう告げるウィズ。

そして改めてゴーレムと向かい合うクロード。

「いくよ・・・レイントゥス」

赤い刃のレイントゥスを構えるクロード。

そして、最後の攻撃のためゴーレムに向かっていくのだった。

「三人とも・・・頑張って」

魔力が残り少なく力になれないララがそう呟いた。

クロードはゴーレムに向かいながら、攻撃地点を探っていた。

「今まで攻撃はほとんど効いていなかったけどダメージは蓄積されているはず・・・それにこれだけの重さを支えているんだ・・・そこを叩けば・・・必ず倒せる」

と、レイントウスを後ろに構えた。

「火のレイントウス・・・一撃で・・・」

繰り出されるゴーレムの拳。

「烈火斬!!」

紅き剣から放たれた、一閃の斬攻撃。

そして、ゴーレムの攻撃よりもクロードの攻撃が早かった。

ゴーレムの足にヒットした烈火斬。

ゴーレムの足を砕くことはできなかったものの、次の攻撃への目印にはなっていた。

「リ्यूトさん、ウィズさん」

「サンダーブラスター!」

「アクアスプラッシュ!」

放たれた雷と水の魔法は、途中で一つとなりゴーレムの足に直撃したのだった。

レベル10：レイントウス・烈火の覚醒（2）

魔法の命中と共に起きた爆発。

それによって舞い上がった土煙が、辺りを包んでいった。

「今です！逃げましょう」

そうリユート達に伝えるクロード。

「わかった、ウィズ！」

「おう、ララの方は任せておけ」

そして四人は来た道から戻ろうとした。

だが、ゴーレムの岩の弾丸によってそこは封鎖されていたのだった。

「クロード君」

「はい、もう一度力を貸してくれレイントウス！」

素晴らしいレイントウスを構えたクロード。

「いくぞ、烈火斬！！」

燃え盛る剣技で、瓦礫を砕いたクロード。

「土煙が消えるわ・・・急ぎましょう」

ララにそういわれ、クロード達は急いで来た道を引き返していくのだった。

そして・・・。

洞窟を抜け、何とかフィアザードの町に戻ってこれたクロード達。

「まずは宿屋で休んだ方がいいね・・・」

そう告げるリユート。

そういうわけで宿屋で休むことにした四人。

「でも僕たち宝珠を三つ集めること出来ませんでしたね・・・」

「ああ、それにあのゴーレムも倒していないしな」

そういうウィズ。

「でもやっぱりクロード君がいてくれてよかった」

そう告げるリユート。

「そんなことは・・・レイントウスの新しい力が発動したのどこだつて偶然かもしれないし」

クロードがそんな風に言う

「それはお前の成長の証じゃないのか？クロード」

そう告げ姿を現したゲイル。

「ゲイルさん」

「とりあえずは無事に帰ってきたな」

と、クロードが

「ゲイルさん……さっきの話……」

「ああ……偶然力が発動した……俺としてはそれはお前の成長だ
と思う……それに……宝剣と魔力コアそれがそばにあったのも偶
然じゃないはずだぜ……非常事態のために宝剣のそばにコアをお
いておく必要があったわけだ」

そんな話をするゲイル。

「……」

無言のクロード。

「今日はゆっくり休めよ。旅の出発はいつでもいいからな」

そういうわけで、今日は宿屋でゆっくり一日を過ごすのであった。

翌日。

「疲れはとれたかい？クロード君」

「おはようございますリユートさん」

そして、ゲイル・ウィズ・ララも加えて朝食をいただいたクロード達。

「で、もう出ちまうのか」

そういうウィズ。

「まあな・・・とりあえずは隣の国に渡らないとな」

そういうゲイル。

「今回の事ありがとう」

お礼を言うララ。

「いえ、そんな事は・・・」

「君達の旅の無事を祈っているよ」

「はい」

朝食後、出発の準備をするクロードとゲイル。

「いよいよ隣国にですね」

「この国みたいに甘くはないと思ってろよ」

そういうゲイル。

「ゲイルさん・・・もし僕の村を襲ったやつらがレイントウスを狙ったのなら・・・ほかの・・・」

「だろうな・・・まあ、封印されたりしていればそう簡単に奪えないだろうがな」

そういうゲイル。

「クロード君、隣国の詳しい地図だ。活用してほしい」

「ありがとうございます」

「じゃ行くぜ」

「またいつか・・・」

「はい」

そして、フィアザードの町を出たクロードとゲイルは隣国へ向けて歩き出していくのであった。

レベル11：新たな国新たな目的（1）

「ゲイルさん・・・ここが」

「国境にある関所だな」

そう答えるゲイル。

「いよいよ隣国ですね・・・」

少々緊張している感じのクロード。

「別に緊張するほどでもないだろ・・・まだこの辺の国は安全だからな・・・だけどな・・・」

と、真剣な表情になるゲイル。

「前にもいったが国によっては戦いが起きている所もある・・・その関所を通るのは難しいからな・・・覚えておけよ」

そうクロードに伝えるゲイル。

「まあ、今回は簡単に通れるけどな」

ゲイルのいうとおり、何事もなく関所を通過したのだった。

「特に景色が変わった訳じゃないが感想はあるか？クロード」

尋ねるゲイル。

「まだよくわからないですね・・・でもこの国にも城はあるんですよ」

「ああ、大抵の国にはあるぜ・・・とはいってもここからじゃ城はまだ遠い・・・途中で町によらないとな」

地図を見てそう告げるゲイル。

「それじゃ町まで急ぎましょう」

と、クロードはそのまま歩きだしたのだった。

「目的がある奴の方が生きるのに力がある感じがするな」

そんなことを呟いたゲイルなのであった。

関所を抜けのんびりと進んでいたクロードとゲイル。

出現モンスターも、とくに多い訳でなく楽に倒していた。

「見えてきたな・・・あの町で一休みするぜ」

そう告げるゲイル。

町に入りすぐに宿の確保をしたゲイル。

「調達物があるならやってこいよ」

「うん、わかった」

宿屋から出て町の中心部に向かうクロード。

その頃・・・この町から離れた場所にある城のある街では・・・。

「・・・何とか王子からの用件を伝えてこちらの図書館上階に入れたけど・・・」

そう呟いたのはレイラだった。

「王子からの命・・・クロード君達のサポートができるように先に調べておかないと・・・」

そういう調査を開始するレイラ。

そして、クロードはというと消耗品等を調達して宿屋に戻っていた。

「明日の朝に出発するからな」

「はい・・・城にいけばレイントウスや他の事も・・・新しいことがわかるかもしれないんだ」

そういう意気込んでいるクロード。

そして、クロード達はこの町でゆっくりと過ごしていくのだった。

再び場面はレイラのいる図書館へ・・・。

「一人でこの量を探すのは大変ね・・・」

「当たり前のことだ」

突然声が聞こえて驚くレイラ。

「マルス王子・・・いらしてたのなら・・・」

レイラがそう言うと

「滞在するのはいいが・・・厄介事をヴァイルの街に持ち込まないでくれ・・・もちろんヴァイル城にもな」

そう告げるマルス。

「大丈夫です・・・と、自信をもっては言えませんが」

「わかっている・・・レクサスの奴がこっちに使いを出すくらいだ・・・
・何かが動き出しているんだろ？もっとも俺は関わりたくはないが
な」

「中々厳しいですねマルス王子も」

そういうレイラ。

「余計な感情を持ってここを危機に巻き込みたくないからな・・・」
と、そのまま図書館から去っていったマルス。

「クロード君達が来るまでに見つかるかしら・・・」

少し不安に思いながらも、レイラは目的の情報を得るために図書館

内を探していくのだった。

「あと半分・・・何だけどマルス王子に大体の場所聞いておけばよかったかしら・・・」

と、後悔しつつも調べ続けるレイラであった。

そしてこちらはクロード達。

「明日に備えて寝ろよ」

「はい」

そんなわけで早めに就寝したクロード。

「いつかこいつも・・・俺より強くなるんだろうな」

そう思いながらゲイルも就寝するのだった。

再びヴァイルの街。

夜になっても調べもの続けていたレイラ。

「あった・・・これだわ」

ようやく目的の本を見つけたレイラ。

「スフィアムにあった本より古い感じがするわね」

そして、読み始めようとしたとき

「まだやっていたのか・・・」

再び図書館に姿を見せたマルス。

「マルス王子・・・」

「いくら仕えている者からの命でもやりすぎは身体に悪い・・・」

「目的の本は見つかりましたから大丈夫です」

そういうレイラ。

「城の空き部屋を貸してやる・・・今夜はそこで休め」

「わかりました・・・王様とミリア姫にも挨拶しておきますね」

「それは構わないがこの階の本は持ちだし禁止だ。俺が受付に頼んで保管してもらう」

「それではお願いしますマルス王子」

そんなわけでマルスに本を渡したレイラは、そのまま城へと向かった。

「宝具・・・関係の本か・・・」

マルスはその本を読みながら、下へと降りていくのだった。

レベル11：新たな国新たな目的（2）

翌朝・・・。

天気は快晴だった。

「よし・・・」

早起きしたクロードは、出発のための準備をしていた。

「気合は充分だな」

そういうゲイル。

「僕はまだ何も知らないから・・・だからもっと世界を見てみたいんです」

そう告げたクロード。

「それだけの思いがあればどんな困難でも乗り越えられそうだな」

「はい」

笑顔で返事するクロードであった。

そしてヴァイルの街でも朝をむかえていた。

「お目ざめはどうですか？ レイラさん」

「あつ、ミリア姫」

思わず飛び起きたレイラ。

「すみませんミリア姫が起きていらっしやるのに・・・私が・・・」

レイラがそう言うと

「ずっと調べものをしていたので疲れていたと思うので仕方ないですよ」

そう告げたミリア。

「ミリア・・・ここにいたのか」

と、部屋に入ってきたマルス。

「おはようございますマルス王子」

「ああ・・・ミリアもレイラも朝食の時間だ・・・」

それだけ伝えると退室していったマルス。

「お兄様も相変わらずなのでお気になさらないで下さいね」

微笑みながらそう告げたミリアであった。

「出発の準備は出来たか？クロード」

尋ねるゲイル。

「はい」

「じゃあ、いくぜ」

そんなわけでクロードとゲイルは、次の目的地ヴァイルの街目指して出発するのであった。

時を同じくして、こちらはヴァイル城のミリアの自室。

朝食後レイラはミリアとの会話を楽しんでいた。

と、その時

「ここにいたのかレイラ」

部屋に入ってきたのはマルスだった。

「マルス王子・・・」

「レイラ、少し話がある」

そういうことで、ミリアを部屋に残し開いている部屋に移動した二人。

「今回の件・・・宝具が関わっているとはな・・・」

そう呟くマルス。

それから昨日見つけたあの本をレイラに渡した。

「父に頼み城内なら持ちだし可能になった」

そう告げたマルス。

「・・・マルス王子・・・本を読んだんですか？」

「少し気になってな」

複雑そうな表情のマルス。

「もしそれに書かれてあることが本当なら・・・まずいかもしれない」

そんな考えを告げたマルス。

そしてレイラもその本を読んでいくのであった。

「マルス王子・・・これって」

本を読んでいったレイラは驚いていた。

「事実と考えていた方がいい・・・宝具の意味・・・遥か昔に世界を闇に染めた邪悪な存在を封印するために存在した」

そう告げたマルス。

「・・・クロード君・・・」

「レイラ・・・そのクロードとかいう奴が宝具の一つを持っているのか？」

尋ねたマルス。

「ええ・・・」

「そいつが宝具の持ち主に相応しいかどうか知らないが・・・それは俺が判断してやる・・・」

「では王子・・・私は・・・」

「わかった・・・レクサスの奴によろしく伝えてくれ・・・あとちゃんと鍛えておけともな」

「はい、では失礼します」

と、城から出ていったレイラ。

それからしばらくして、クロードとゲイルがヴァイルの街に入ったのであった。

「無事にヴァイルの街についたな」

そう告げるゲイル。

「確かに大きい・・・ゲイルさん・・・」

「街の大きさ比べはあとにするとして・・・一般的な事も覚えておいた方がいいと思ってな」

「一般的な事？」

「スフィアムには王様と王子がいた・・・だが、このヴァイルにはお姫様も存在するということだ」

そういうゲイル。

「お姫様か・・・」

「スフィアムのレクサス王子みたいに気軽に話せる人ばかりじゃないことも覚えておけ・・・特に王族は色々あるからな・・・」

真面目な表情でクロードに話すゲイル。

「わかりました、ありがとうございます」

「ああ・・・じゃあ宿にいくか・・・調べものは明日でも大丈夫だろう？クロード」

ゲイルが尋ねると

「はい、そうします」

そういうわけで、クロードとゲイルは宿にて疲れを取っていくのだった。

レベル11：新たな国新たな目的（3）

翌朝。

「よし、今日も頑張ろう」

朝早くから意気込んでいるクロード。

「朝から図書館か？クロード」

そう聞いてきたゲイル。

「その前にお城の方に行って許可貰ってきます。ここも警護が厳しいでしょうから」

と、ゲイルが

「わざわざ許可貰わなくても図書館の受付で登録してもらえばいいんじゃないのか？」

そう告げた。

「どちらにしても王様達には挨拶しておきたいですから」

そう言うクロード。

「俺は王族には興味ないからな・・・まあ、のんびりやってこい」

「はい」

宿屋を出たクロードはそのまま城へと向かった。

「庭が広いな。中までは少し歩かないとな」

そんな訳で気楽に進んでいたクロード。

だがその直後、突然誰かの叫び声が聞こえてきたのだった。

「!?!」

とっさに身体が動いていたクロードは、その声のした場所へと駆け出した。

そしてクロードが見たのは、飛行型のモンスターに襲われている女の子の姿であった。

「助けなきゃ!」

自分の剣を抜き、女の子の前に立つクロード。

「・・・貴方は・・・」

突然のクロードの出現に驚いている女の子だが、表情はほっとしている感じだった。

と、飛行型のモンスターは高く飛び上がった。

そして、クロードと女の子の頭上を旋回していた。

と、突然火弾をを放ってきたモンスター。

「くっ・・・」

女の子を守るため火弾を剣で弾いたクロード。

「相手が空中じゃ剣は届かないし・・・」

と、座り込んでいた女の子が立とうとしたが足を痛めたのか立てずにいた。

「無理しないで・・・」

「でも私の魔法なら・・・」

そういう女の子。

「魔法・・・」

と、自分の剣を鞘に戻すと宝剣・レイントゥスを構えた。

「火の力・・・ゴーレムと戦ったときはそのまま炎を纏わせて斬ったけど・・・魔法みたいに火のエネルギーを放てれば・・・」

クロードは旋回しているモンスターを見上げた。

「やるしかない・・・この子は僕が守る・・・力を貸してくれレイントゥス」

と、コアが輝きコアに火の文字が浮かび上がったのだった。

「力よレイントゥスに！火の力を」

と、紅く変わるレイントゥスの刃。

「あとはイメージ通りにやれば・・・」

紅きレイントゥスを構えるクロード。

飛び回るモンスターをじっと見ているクロード。

その後ろで女の子が心配そうに見ていた。

「飛び切り裂け烈火のレイントゥス！飛空烈火斬」

レイントゥスから放たれた烈火の刃が宙を待った。

「そのまま切り裂け！！」

と、見事にモンスターの翼を切り裂きモンスターは遠くへと逃げていった。

「これで大丈夫」

そう告げたクロード。

と、その時

「ミリアー！！」

城の中からマルスが飛び出してきた。

「あの人は・・・」

「お前ミリアに何をした」

「何をつて・・・僕はただ・・・」

突然の状況にかなり慌てているクロード。

「こいつを捕らえて牢に」

「ええっ!？」

驚いている間に兵士に捕らえられるクロード。

「お兄様・・・私は」

「ミリアは何も心配しなくていい」

そう告げるマルス。

そして特に悪いことはしていないクロードであったが、牢に閉じ込められることになったのであった。

レベル12：ヴァイルの街と二人目（1）

モンスターに襲われていた女の子を助けたクロード。

しかし現在、クロードは牢の中にいた。

「いてて・・・ちょっと暴れたらやられちゃった・・・とはいえ・・・
どうしよう」

完全に困っているクロード。

「女の子助けただけだったのにな・・・」

そう呟くクロード。

「ゲイルさんも僕がここにいるなんてわからないだろうしな・・・」

と、クロードは足音が徐々に近づいているのに気付いた。

じっとその方向をみるクロード。

そして姿を現した足音の主は、さきほどクロードが助けた女の子であった。

「君は・・・」

「あの・・・さっきはお兄様が手荒な事をしてしまってますみません」
謝る女の子。

「僕は大丈夫だけど・・・君の足は」

「私も大丈夫です。今鍵をあけますね」

「鍵をとって・・・どうして君が・・・」

「自己紹介してませんでしたね・・・私はミリア・・・この城の・・・」

ミリアがそこまでいうと

「それじゃ君がゲイルさんがいつていた・・・ヴァイルのお姫様・・・」

自分が助けた女の子がお姫様だと知り、驚くクロードなのであった。

「どうもありがとうミリア姫」

クロードがそういうと

「ミリアで構いませんよ」

そう告げたミリア。

「呼び捨てには出来ません・・・でも・・・」

「大丈夫です。お兄様には私から伝えておきますから」

そう言ったミリア。

だが、その時

「その必要はないよ、ミリア」

そこにやってきたミリアの兄・マルス。

「お兄様!？」

驚くミリア。

「・・・」

無言のクロード。

「事情はわかっている・・・外の件はすまなかったな・・・」

「えっ・・・」

「ミリア・・・彼を俺の部屋へ案内してくれ・・・俺は先に向かう」

そう告げるとすぐに地下牢から去ったマルス。

「あの人がこの城の王子で・・・ミリア姫の・・・」

「お兄様ですよ。では、お兄様の部屋にいきましょう」

そんなわけで、色々変わる状況に何とかついていきながらミリアと共にマルスの部屋に向かうクロードなのであった。

「ここがお兄様の自室です」

ミリアと共に部屋に入るクロード。

「適当に座っている・・・」

と、いきなりそういわれたクロード。

とりあえずいわれたとおり椅子に座るクロード。

そして隣の椅子にミリアが座った。

「お前がクロードか？」

そう聞いてきたマルス。

「はい・・・」

素直に答えるクロード。

「そうか・・・お前のことはレクサスの使いから聞いている」

「レクサス王子から・・・」

「ああ・・・それと受け取れ」

と、マルスが一冊の本を投げてきてクロードは慌ててキャッチした。

「これは・・・マルス王子」

「お前がレクサスの所で読んだものより正確な宝具に関する書物だ・

・レクサスの使いが探しておいたということだ」

そう説明したマルス。

「ありがとうございますマルス王子」

お礼を言うクロード。

「そいつは持ち出し厳禁だ・・わかつているとは思うが」

「はい」

と、その場でその本を開き読み始めたクロード。

ミリアもちらちらと横から眺めていた。

「七つの宝具って全部剣じゃないんだ・・・」

「全て真実が書いてある訳じゃないという事だ・・・」

じつくりと読んでいくクロード。

「!？」

ある所で読むのを止めたクロード。

「マルス王子・・」

「レクサスの使いも同じ表情をしていた・・・だが、事実だ・・」

真剣な表情で告げるマルス。

「じゃあ・・・このレイントウスも・・・」

厳しい表情のクロード。

「その本にも書いてあるが宝具個々の力も強いが七つ集まれば凄まじい力が生まれる・・・だからこそ今まで全てバラバラに保管されていたわけだ」

そう説明するマルス。

「・・・」

後ろでみていたミリアは無言になっていた。

「本ありがとうございますございました」

マルスに本を返したクロード。

「で、これからどうするつもりだ？」

そう聞いたマルス。

「ゲイルさんとの旅を続けますよ」

そう答えたクロード。

「宝具の真の意味を知ってもなお・・・か？」

もう一度聞くマルス。

「僕はまだレイントウスの持ち主には相応しくないかもしれない……でも、父さんから託されたこの剣は……僕にとって大切な剣……悪い奴らには渡さない」

そう告げるクロード。

「悪いが俺はわざわざ争いに巻き込まれに行くのはごめんだ」

「わかってる……宝具の真の意味をしれただけでもここに来てよかった」

純粹にそう感じていたクロード。

「とりあえず話はその本の件だけだ……あとは勝手にするといい」

そう言い部屋から出ていったマルス。

「クロードさんごめんなさい。私には優しいんだけど……最近モンスターも増えて危なくなってきたてお兄さまもこの街のために……」

そう言うミリア。

「うん……気持ちは分かるよ……とりあえず宿屋に戻るよ」

「わかりました。では、また……」

そして、城を出たクロード。

窓からそんなクロードを眺めていたミリアは、何かを考えているようであった。

そしてこちらは退室したマルス。

「そんなに冷たくしなくてもいいんじゃないですか？」

と、マルスの前に現れたレイラ。

「レクサスの元に帰ったんじゃないのか？」

「私やレクサス王子はクロード君達に関わっていくつもりですから」

そう答えたレイラ。

「もし・・・本当に邪悪なる存在の目覚めが今の騒動に関わっているなら・・・ただではすまないぞ」

そう言うマルス。

「覚悟がありますよ・・・私もレクサス王子も」

真剣な表情でそう告げるレイラなのであった。

レベル12：ヴァイルの街と二人目（2）

そしてクロードは、ゲイルのいる宿屋に戻ってきていた。

「なるほど・七つの宝具か・しかし・大変な運命を背負うことになったものだなクロード」

そう言うゲイル。

「僕はまだまだ未熟ですけど・負けないって気持ちには誰より強く持っているつもりです」

そう強く言うクロード。

「まあ、お前と一緒に旅をしている俺も同じなんだけどな」

そう呟いたゲイルであった。

そしてこちらはお城の王の間。

自分の父親である王様の元にやってきていたミリア。

「うむ・」

なにやら真剣な表情をして考えている王。

「お願いしますお父様・」

そう告げるミリア。

「ミリアの気持ちはよくわかった・・・私としてもそれでミリアが成長できれば問題はない・・・しかし・・・」

「お兄様には私から話します。私の決心はあの時から決まっていたから」

そう話すミリアの瞳は強い決意の輝きを放っていた。

そしてマルスとレイラはというと・・・。

「クロードがいるまですっとこの街に滞在するのか？」

「そんなつもりはありませんよ。レクスス王子からの命も果たしましたし・・・」

「そうか・・・ならいい、あまり外の厄介ごとを持ってこられても困るからな」

そう言うマルス。

と、そこに兄・マルスを探していたミリアがやってきたのだった。

「ミリア、どうしたんだ？」

いつもとは違う何かを感じたマルス。

「お話があります・・・お兄様・・・」

真剣な表情でそう告げたミリア。

「私は席を外した方がいいかしら、ミリア姫・・・」

レイラがそう言う

「この場にいて構いませんよ。クロードさんのお知り合いですから」

「ミリア・・・話はあいつ絡みなのか？」

マルスの問いに頷いたミリア。

「わかった・・・話を聞こうか・・・」

そう告げたマルス。

「簡潔にお話します・・・私、クロードさん達の力になりたいです」

このミリアの発言には、レイラも驚いていた。

「そんな話か・・・」

そう呟いたマルス。

「私は本気です・・・お兄様・・・」

「・・・」

無言で状況を見守っているレイラ。

「そんな勝手は許されない・・・例え俺の妹であっても」

そう言ったマルス。

「でも私は・・・」

「ミリア・・・外の世界に憧れているのは俺も知っている・・・だが、今の外の世界は・・・」

そこまでマルスが言うと

「わかっています・・・でも、私だってただ外の世界に憧れているだけじゃありません・・・私の力をみんなのために使いたいです」

マルスに自分の気持ちを伝えるミリア。

「そこまで気持ちが決まっているのか・・・だが、この城の掟・・・忘れてはいないだろう・・・ミリア」

「それも含めての決意です」

そう告げたミリア。

「なら・・・」

「王家の人間が所持する指輪・・・」

その指輪を外しマルスに渡すミリア。

「レイラ・・・」

と、その指輪をそのままレイラに渡したマルス。

「お兄様？」

「旅が終わればレクサスの所にも寄るだろう・・・」

「仕方ありませんね・・・大事に預からせてもらいますミリア姫」

そう告げたレイラ。

「それでは私は支度をして・・・それで・・・」

「別れの挨拶はいらないからな・・・」

そう呟くとこの場から去っていったマルスなのであった。

「ミリア姫・・・マルス王子も本心では・・・」

レイラがそう言うと

「いいんですよレイラさん。お兄様の気持ちはわかっていますから・・・」

「ミリア姫・・・クロード君は優しいですから大丈夫ですよ」

そう告げるレイラ。

「わかっています・・・私を助けてくれた時に・・・」

そしてミリアは最後レイラに挨拶をすると、準備のため自室に戻っ

ていった。

「さて・・・マルス王子・・・」

突然そう告げたレイラ。

すると、この場から去ったはずのマルスが姿を見せたのだった。

「素直ではないですねマルス王子」

笑顔で言うレイラ。

「俺としてもこれが正しい判断かはわからない・・・ただ、どちらにしても関わることになるのなら・・・ミリアの望む方に行かせた・・・それだけだ・・・」

そう話すマルス。

そしてマルスは、持っていた鞆から剣を抜いた。

「レイラ・・・レクサスから宝具の事を聞いて今回の件で調べたんだ・・・これもわかるだろう？」

レイラに見せるマルス。

「七つの宝具の一つ・・・クロード君の持つレイントゥスの同じ剣型・・・細剣の宝具・・・名をフリーレイス・・・」

「そうだ・・・この城に残ってもミリアは宝具の争いに巻き込まれるだろうから・・・」

と、フリーレースを鞘に戻したマルス。

そして・・・。

「貴方は一人で戦うつもりなの？」

尋ねるレイラ。

「一人じゃないさ・・・戦うときは最強の戦士達とともに戦う・・・この街は落とさせないよ」

そういうとマルスは今度こそこの場から立ち去ったのだった。

「さてと私も一度レクサス王子の元に戻りましょうか」

そう呟いたレイラであった。

そしてこちらは宿屋。

「僕の準備はいいよ、ゲイルさん」

「そうか・・・さて、じゃあ次の目的地は・・・」

地図を見て調べるゲイル。

と、その時

「待ってください」

城の方から声と共に、ミリアが駆けてきたのだった。

「ミリア姫!？」

驚くクロード。

「彼女がお姫様か・・・」

そう呟くゲイル。

「よかった間に合って・・・」

息を切らしながら告げるミリア。

クロードが驚いているのは、ただ単にミリアがやってきたただけだからではなかった。

ミリアの服が私服だったからでもあった。

「ミリア姫・・・その格好は・・・」

「驚くのはわかってたけど・・・」

事情を説明するミリア。

「また大変な決断をしたものだ・・・」

そう告げたゲイル。

「でも王様やマルス王子が・・・」

「許可はもらいました・・・そのかわり今の私は姫でも何でもありませんから」

そういうミリア。

「ゲイルさん・・・」

どうしたらいいかわからないクロード。

「王家の資格を捨ててまでか・・・大したお姫様だな」

感心するゲイル。

「お願いします・・・私も連れて行って下さい・・・私・・・気持ちは変わりませんから」

強い意思を見せるミリア。

「こりやしょうがないな・・・資格を失っているとはいえお姫様だからな・・・しっかり守らないとな」

そういうゲイル。

「私・・・足手まといにはなりませんから・・・クロードさん」

ミリアの強い押しに負け了承したクロード。

新たな仲間を加えることになったクロード達。

果たして、これからの旅はどうなっていくのであろうか。

レベル13：港街・ポルトリーネ（1）

新たにミリアを仲間に加えたクロード達。

「さて、次の目的地だが・・・」

ゲイルがそう言う

「それでしたらお兄様が・・・」

「マルス王子が？」

不思議そうな顔をするクロード。

と、ゲイルが広げた地図を見てある地点を示したミリア。

「この港街から次の大陸に行くといいつて・・・」

そう告げたミリア。

「次の大陸・・・」

「港街・・・ポルトリーネか・・・船で移動だな」

そう言うゲイル。

「僕は初めてです・・・船に乗るの・・・」

と、もう一度地図を見るゲイル。

「しかし少し距離があるな・・・山を進めば短い時間で到着できるが・・・ミリア姫にはきついだろうな・・・」

「大丈夫です。頑張りますよ」

そう意気込むミリア。

「ゲイルさん、やっぱり平地から進みましょう・・・山はモンスターも出やすいと思うし・・・」

そう提案するクロード。

「ミリア姫はどうか？」

尋ねるゲイル。

「私は山道でも大丈夫・・・だと思いますけど・・・お二人がそう言うのならそうします」

笑顔を見せて言うミリア。

「じゃ、行くか」

目的地までの行く道も決まり、港街・ポルトリーネ目指して進んでいくクロード達なのであった。

見晴らしのよい道を進んでいくクロード達。

天気がいいからなのか、旅に出れることがうれしいからなのかミリア

アは楽しそうにしていた。

「ミリア姫・・・何だか楽しそうですね」

クロードがそう言うと

「そうですか？」

笑顔でそう答えるミリア。

「クロード・・・気は抜くなよ・・・ちらほらモンスターが現れるかな」

そう言うゲイル。

「わかってます・・・僕たちでミリア姫を守らないといけないですね」

そう言うクロード。

（クロードさんもゲイルさんも・・・私を呼ぶとき【姫】ってつけなくてもいいのに・・・）

心の中でそう思っていたミリア。

そんなこんなでポルトリーネを目指す三人。

だが、道的に遠い道を選んだため今日一日でポルトリーネに到着するのは難しくなっていた。

「今日はこの辺りで休んだ方がいいな・・・暗くなつてからの行動は危険だから」

そう提案するゲイル。

「でも野宿は・・・ミリア姫が・・・」

「あの、私だったら大丈夫ですから・・・」

そう言うミリア。

と、その時ゲイルが離れた場所にある小屋を発見したのだった。

「とりあえず行ってみよう・・・野宿するよりましだろう」

そんなわけで、そこまで頑張つて行くことになった三人。

「暗くなる前でよかったですね」

そう言うクロード。

中に入り色々見てみるクロード達。

「贅沢は言えないからな・・・今夜はここで乗り切ろう」

そう決めたゲイル。

そして・・・。

時は経ち深夜。

ぐっすり休んでいるクロード達。

だが、クロード達が休んでいる小屋に近付く影があった。

小屋の周りに集まったのは、モンスター・オークの群だった。

獲物に群がるように小屋の周りにやってきていた。

そして、小屋の中にオーク達が突入しようとしたとき、一本の矢がオークの一体に突き刺さったのだった。

その矢を受け倒れるオーク。

それにより騒ぎ始めるオーク達。

「あまり騒いでくれるなよ・・・中で姫様が休んでいるんだからな」

と、屋根の上から声がして見上げるオーク達。

「・・・・・・・・」

屋根の上にいたのは弓を構えていたゲイルであった。

「今まで動いてなかったからな・・・その分弓の手入れはずっとやってきたからな・・・少し本気でやらせてもらおうぜ」

そう告げたゲイル。

と、辺りに流れ始める風。

その風をまといゲイルは地上に降り立った。

その瞬間にゲイルに襲いかかるオーク達。

「俺は普段この力は使っていない・・・」

と、風をまとう弓矢。

「風よ鋭き刃矢となりて敵を切り裂け・・・」

そんなゲイルに飛びかかるオーク達。

「旋風影刃」

ゲイルの弓から放たれた、風の刃矢。

その矢は、オークを捕らえ風が切り裂いていった。

「風で生み出された矢は何にも縛られない・・・」

一瞬で放たれた風の矢により、一瞬で数体のオークが倒されていたのだった。

「さて・・・こいつ等を統率させているボスを倒さないとな・・・」

と、残っているオークを後ろに下げ少しごついオークがゲイルの前に現れたのだった。

「またごついオークだな・・・」

そう呟くゲイル。

と、いきなりその腕を振り上げ襲いかかってきたボスオーク。

「おっと・・・」

軽やかに攻撃をかわすゲイル。

だが、かわされ地面に直撃したボスオークの攻撃で地面がえぐれていた。

「さすがボスだけあって凄いパワーだな・・・まともに受ければ一撃で終わりだな」

そう分析するゲイル。

と、再びゲイルに襲いかかるボスオーク。

「さて・・・あまり戦いが長引くとミリア姫が起きてしまうから・・・そろそろ」

風を巧みに操りボスオークの攻撃を受け流していくゲイル。

そして出来た隙に風の矢を放っていった。

しかし、風の矢はボスオークに刺さりはするもののダメージは少ないようだった。

「少し強力なのがいいみたいだな」

そう告げるゲイル。

と、弓に今まで以上の風を集めるゲイル。

「どんな力も圧縮させればかなりの力になる」

するとボスオークはその力に気付いたのか、全力を込めて攻撃を仕掛けてきた。

「それでも遅いよ・・・」

しっかり狙いを定めるゲイル。

「風牙螺旋弓！！」

圧縮され回転しながらボスオークに向かっていく風の矢。

そしてその矢は見事ボスオークを貫いていったのであった。

「とりあえず片づいたか・・・」

ゲイルの弓技により、貫かれたボスオークはその場に倒れた。

その直後、生き残っていたオークは競うように逃げていったのだった。

と、小屋の中から飛び出した人物がいた。

「よう、クロード。姫様は寝てるか？」

そう聞くゲイル。

「ミリア姫は寝てるけど・・・って、それよりも・・・」

外の状態を見て驚いているクロード。

「問題はない・・・明日も早いからかな・・・俺は休ませてもらうぜ・・・」

そう言うゲイルは小屋の中に戻っていったのだった。

「一体どんな戦いが・・・」

そう疑問に思ってしまうクロードなのであった。

翌日。

夜中のことを何も知らないミリアは、気持ちの良い朝にご機嫌であった。

「お城のベッドの上で起きるのは違って、いつもより気持ちいい」

そしてゲイルも起きて朝食を準備していた。

そんなクロードは、じっと窓から外を眺めていたのだった。

「クロードさん♪朝食の準備できましたよ」

そんなクロードを呼ぶミリア。

それから簡単な食事を済ませ、再びポルトリーネを目指すために出発する三人。

「あの、ゲイルさん・・・」

「夜中のことなら後で話してやる・・・ミリア姫の前で話すのもないだからな」

そう告げたゲイル。

「二人で何の話をしてるんですか。私を仲間外れにしないでほしいですよ」

そういいながら二人の後ろから歩いているミリアなのであった。

レベル13：港街・ポルトリーネ（2）

オーク達との一件は、ミリアには知らせないことに決定した。

それでも少々ミリアは気になっていたようではあったが・・・。

それからしばらく進むと、突然走り出しクロードやゲイルより前に出た。

「ミ、ミリア姫・・・」

驚くクロード。

「今までと違う香りがするよ」

そう告げたミリア。

「潮の香りか・・・海が近い証拠だな」

そう言うゲイル。

「もうすぐポルトリーネですね」

そう告げたクロード。

「早く行きましょう。私海見てみたいし」

かなりワクワク気分なミリア。

「クロードも海は初めてだったか・・・」

「はい・・・」

そう答えるクロード。

「じゃあ急ぐか・・・姫様も待ちきれないみたいだしな」

そんなわけで港街のポルトリーネへ急ぐことにした三人。

「次の大陸・・・どんな所なんでしょうね」

いろいろ考えるクロード。

「対して変わらないさ・・・ただ国によっていろいろあるがな」

そう告げたゲイル。

そんな話をしていると、クロード達はその目でポルトリーネが見えるところまでやってきたのだった。

「あれが・・・」

「ポルトリーネですね」

かなり笑顔なミリア。

飛び出していきそうなミリアを止めつつ、クロード達はポルトリーネへと入っていくのであった。

「ポルトリーネにつきましたね」

そういうミリア。

「ゲイルさん・・・まずはどうしたら・・・」

尋ねるクロード。

「とりあえず宿の確保をしたほうがいいだろうな・・・すぐに船が出るわけでもないだろうがな」

そういうゲイル。

「それじゃ宿屋に向かいましょう」

そういうわけで宿屋に向かう三人。

手短に手続きを終わらせたゲイル。

「俺は少し情報収集してくる・・・クロードとミリア姫は街を見て
いるといい」

そう伝えると宿を出たゲイル。

「ミリア姫・・・」

「うん、街見て回ろう」

すでにうきうきなミリア。

「では行きましょうか」

ミリアと共に街を回るクロード。

クロードたちが街を見て回っている間、ゲイルはこの街のことや最近の状況、船の行き先について情報を集めていた。

「やっぱりあっち方面行きの船もあるのか・・・」

少し考えているゲイル。

「しかし、もしかしたらあそこにクロードが必要としている力があるかもしれないから・・・」

そう呟くゲイルだった。

そしてこちらはクロード達。

海の近くまでやってきて初めて見る海を眺めていた。

「どこまでも続いていますね」

広い海を眺めているミリア。

「これからこの広い海を船で進んでいくんだね」

同じように海を見ながらそう告げるクロード。

「楽しみです」

笑顔でそう告げるミリアであった。

「ゲイルさんは情報収集とか船の手続きとかやってくれてるから、消耗品の調達は僕達がやろうか、ミリア姫」

そういうクロード。

「うん♪でも、色んな所も見て回ろうね」

至って普通の女の子のような様子を見せているミリア。

そのころゲイルは港にいた。

そこで更に情報を集め、行き先などの情報も詳しく手に入れていたのだった。

「これくらいでいいか・・・後はクロードに話をして次に向かう大陸を決めないとな・・・」

そう考えたゲイルは港を出るのであった。

「これだけ買えば大丈夫かな・・・ミリア姫？」

「そういえば私・・・ヴァイルの街から出たことないから・・・他のお店とかも知らなくて・・・やっぱり違う街だとお店も違うんだね・・・」

「ミリア姫・・・」

そして、夕方宿屋にて合流した三人。

「えっ、行き先を僕が決めるんですか・・・」

驚いているクロード。

「俺もほぼ決めているんだけどな・・・ただ、クロードにも関係ある場所を俺が知っている」

と、地図を広げたゲイル。

「ポルトリーネからは北、西、東の方面に船が出ているんだ」

そう説明するゲイル。

「・・・」

地図を見ているクロードとミリア。

「俺が知っているのは西の地方・・・」

「そこに何があるんですか？」

尋ねるミリア。

「クロードが持つ宝具・レイントゥスに力を与える宝玉がある・・・まだ可能性の段階だがな」

そう告げるゲイル。

「レイントゥスの・・・それってあのときの【火】と同じようなのが・

・・」

「ああ、そうだ・・・行ってみる価値はあると思うのだが・・・決断はお前に任せる・・・クロード」

「クロードさん・・・」

考えているクロードを見ているミア。

「わかりました、そこにいきましょう。レイントウスがパワーアップできるなら・・・」

そう決めたクロード。

「了解だ、港に行きそう伝えてくる」

そういうと急いで港に向かうゲイルなのであった。

そして、この日の夜。

ようやく明日船に乗り、次の大陸にむかえるクロード達。

「ミア姫・・・ずっとうきうき気分ですね」

そういうクロード。

「よっぽど気になっているんだろうな」

そう呟くゲイル。

ミリアは今日一日ずっと笑顔でいた。

「それはいいが・・・ちゃんと休まないと明日が辛いぞ」

そうミリアに言うゲイル。

「そうだね。じゃあ今日はもうお休みするね」

と、隣の部屋に向かったミリア。

「ゲイルさん・・・僕達は・・・」

クロードがそういうと

「休んだ方がいいだろう・・・これから先何が起きるかわからないからな」

ゲイルがそうだったので、クロードも今日は早めに身体を休めるのであった。

翌日。

天気は快晴だった。

「支度は終わったか？」
尋ねるゲイル。

「はい」

元気よく返事するミリア。

「僕も大丈夫です」

準備を終えた三人は、すぐに港に向かった。

「この船で行くんですね」

そういうクロード。

「券は買ってある行くぞ」

券を見せ船に乗り込んだ三人。

中に入ってからミリアは目を輝かせて辺りを見ていた。

「まあ、しばらくは船の中にいるからな・・・ゆっくりしてればいい・・・」

「クロードさん。船の中見て回りましょう」

ミリアの勢いに断ることは出来ず、付き合うことにしたクロード。

そして、船はゆっくりとポルトリーネの街から離れていくのであった。

レベル14：船旅と海の悪魔（1）

ポルトリーネを出航した船。

クロード・ゲイル・ミリアを乗せた船は西へと向かっていた。

クロードはミリアと共に風に当たりながら景色を眺めていた。

「何事もなければ後一時間ぐらいで着くか・・・」

そう考えていたゲイル。

「海って凄いですね♪」

ニコニコ顔のミリア。

「僕も覚悟を決めないといけないな」

クロードがそう言うと

「覚悟ですか？」

首を傾げるミリア。

「次の地に七宝具の一つ・レイントゥスをパワーアップさせる力がある・・・でもそのためには僕も強くならないといけないから・・・」

そう告げるクロード。

「それなら私も仲間としてサポートしますよ。攻撃の魔法は使えないですけど頑張ります」

そう言うミリアだった。

「ありがとうミリア姫」

「あの・・・クロードさん・・・私のことは・・・」

ミリアがそう言いかけたとき、突如海が荒れだし船が揺れるのであった。

「な、何だ」

驚くクロード。

ミリアは倒れないようにクロードにしがみついていた。

「急に海が・・・でもどうして・・・」

不思議に思うクロード。

と、船内にいたゲイルが表に飛び出してきたのだった。

「一体何事だ！」

そう言うゲイル。

「それが僕たちにも何がなんだか・・・急に海が・・・」

そう告げるクロード。

と、ゲイルと一緒に出てきた男が

「もしかしたら・・・」

「何か知っているんですか？」

その男に尋ねるクロード。

「これは噂話なんですけど・・・この辺りの海域の海底には神殿があるとかないとか・・・」

そう話していく男。

「海底神殿だと・・・」

「そんなものが・・・でも、それと今のって関係あるんですか？」
尋ねるクロード。

「何だか怖い感じがします・・・」

そう呟いたミリア。

「クロード・・・ミリア姫・・・気を抜くな」

静かにそう告げたゲイル。

「えっ・・・」

驚くクロードとミリア。

「何か来る」

ゲイルがそう言った瞬間、荒れた海から竜巻のように空へ海水が渦となつて上がった。

「何だ・・・」

その光景を眺めているクロードたち。

そして、渦が消えるとそこには魔物の姿があつたのだつた。

「モンスターか・・・」

睨みつけるゲイル。

「でも人間みたいな形だ・・・」

そう呟くクロード。

「・・・また荒らしにきたのか・・・人間・・・」

そう告げたそのモンスター。

「喋つた・・・」

「知識あるモンスターか・・・」

そういうゲイル。

「あの、私たちはただ向こうの大陸に行きたいだけなんです」

そう伝えるミリア。

「信用できないな・・幾度も人間達が深き海に眠りし神殿に入ろうとしていた・・おまえ達も同じであろう・・」

モンスターがそう告げると

「絶対にそんなことはしない、僕たちは・・」

クロードがそういうが

「もはや聞く耳はもたない・・ここに沈めてやろう」

と、モンスターの手に出現した三つ叉の槍。

それを天にかざすと海から天に向かって水が飛び上がったのだった。

「クロード！」

「わかってます・・何とかして誤解を解いてもらわないと・・」

そういうながら宝具・レイントウスを抜いたクロード。

「ミリア姫は下がっていてください・・ここは僕たちが」

そう告げたクロード。

と、ミリアは素直に後方に下がった。

船内にいる人たちは何ともいえない不安を持ち始めていた。

「僕に力をレイントウス!!」

そしてレイントウスのコアに浮かび上がる【火】の文字。

そしてレイントウスの刃部分が、赤くなり火をまとうのであった。

レベル14：船旅と海の悪魔（2）

「いこうレイントウス！」

レイントウスを振り上げたクロード。

「飛空烈火斬！！」

レイントウスから放たれた炎の刃。

「その程度の攻撃・・・」

と、魔物は海の水を使い炎の刃を防いだ。

「炎の刃が・・・」

驚くクロード。

「やはりな・・・相手は海の魔物・・・水属性だ・・・いくらレイントウスが宝具で強い力を持っているといっても相性が悪すぎる」

そう言うゲイル。

「だったら直接攻撃すれば・・・それなら攻撃力も高いし」

そう言うクロードだったが

「どちらにしても炎属性は消される・・・ただの斬攻撃じゃあいつには通じないだろうな」

魔物を見ながらそう告げるゲイル。

「あきらめて海に沈むがいい・・・」

そう言う魔物は海の水をクロード達に放った。

「吹き荒れろ！我が矢に風を！」

思い切り風をまとった矢を放つゲイル。

それにより、魔物が放った海の水を全て弾き飛ばしたのだった。

「攻撃は全て防いだようだがお前達の攻撃はこちらには通らない・・・しかしこちらの武器はこの辺りの海全てだ」

そう告げた魔物。

「このままじゃ本当に船が沈められてしまう・・・ゲイルさん・・・」

どうすればいいかわからないクロード。

「では深き海に沈むがいい」

と、大きく動き始める海。

「さすがに俺の風でも全ては吹き飛ばせないぜ・・・」

そう言うゲイル。

だが、まだ誰も気付いていなかった。

一人の少女がひそかに行動を起こしていたことに・・・。

「終わりです・・・」

そう告げて魔物は大量の海の水を放つのであった。

「出来る限り俺の風で防ぐ！クロードは下がっているんだ」

そう告げたゲイル。

「でも・・・」

「無駄だ・・・私の力の前では人間の力は無いに等しい」

そう言う魔物。

「それでもやるしかないんでな」

そう言いはなったゲイル。

さらに迫ってくる水。

だがその時、辺りに冷たい空気が流れてきたのだった。

「何だ・・・急に寒く・・・」

「む・・・この魔力属性は・・・」

「私の大切な仲間は・・・傷つけさせません」

この冷気を放っていたのは、後ろに下がっていたミリアであった。

「ミリア姫!？」

「私はお兄さまから攻撃系の魔法は教えられていないけど・・・」

と、冷気が解き放たれ魔物が放った水を包み込んだ。

「これは・・・」

そして、凍結していく水。

「それ以外なら負けませんよ」

と、冷気はそのまま魔物の両の手足も凍らせていった。

「急激な凍結魔法・・・ここまでの術者がいたのか・・・」

「今です!クロードさん!」

ミリアが叫ぶのと同時に飛び出していたクロード。

「ありがとうミリア姫・・・いくぞレイントウス!!」

再び火を灯したレイントウス。

「ぬっ・・・」

「受けてみる！これが僕とレイントウスの【烈火斬】だ！！」

全力で放たれた攻撃は、魔物の右腕を切り裂いたのであった。

「ぐうつ！」

クロードの攻撃で魔物の動きを封じていた氷は砕け、魔物は傷ついた腕に手を当てた。

「ゲイルさん、あいつに一撃与えたよ」

そう言うクロード。

「ああ、お前とミリア姫の活躍でな・・・だが、向こうはまだ余裕みたいだぜ」

ゲイルはそう言うと言った。

「今の一撃は・・・」

魔物は腕の傷を見た。

「ゲイルさん！ミリア姫！」

名前を呼ばれ二人はクロードの方を見た。

「まだ負けた訳じゃない・・・三人の力を合わせて戦えば勝てる可能性はあるんだ」

そう告げたクロード。

「そうだな・・・」

「私も頑張ります」

それぞれクロードの言葉に答えるゲイルとミリア。

「・・・私に傷を付けた人間・・・クロードと呼ばれていたな」

そう言う魔物。

「そうだけど・・・」

「お前ほど純粋な瞳を持った人間は初めてだ・・・」

そう告げた魔物。

「お前達は悪者ではないようだな・・・」

「わかってくれたみたいですね」

そう言うミリア。

「クリアラ・・・」

「えっ？」

不思議な表情をするクロード。

「私の名だ・・・クロード・・・君はここに導かれた存在なのかし

れない」

「導かれた・・・」

呟くクロード。

「君の持つ剣・・・受けてみてわかった・・・私が守護している海底神殿の中にあるあれと同じ波動を感じた」

魔物がそう言う

「それって・・・レイントゥスに力を与える宝玉・・・」

「クリアラだったな・・・それは本当なのか？」

尋ねるゲイル。

「私も実物を見たわけではない・・・感じたものが同じだった」

そう答えるクリアラ。

「そっか・・・教えてくれてありがとうクリアラ」

そう言うクロード。

「もしそれが必要なら再びここを訪れてくれ・・・私が神殿まで案内しよう」

そう告げたクリアラ。

「わかった。必ず」

クリアラと約束したクロード。

そして、海上での魔物騒動は終わりをむかえたのであった。

レベル15：風が吹き抜ける町（1）

ゆっくりと進んでいた船は、目的の大陸に到着した。

「いろいろあったが何とか来れたな・・・」

そう呟くゲイル。

「いい風ですね」

そういうミリア。

「そんなに遠くない場所に町がある・・・そこは別名風の町と呼ばれているからな」

そう語るゲイル。

「風の町か・・・」

そう呟くクロード。

「それじゃ行こうか」

船を降りた三人は、そのまま港を出た。

「ゲイルさんはこの大陸については詳しいんですか？」

尋ねるミリア。

「他よりは詳しいかな・・・まあ、理由もあるが・・・」

そう告げるゲイル。

「ゲイルさん・・・風の町ってあれですか？」

指し示したクロード。

「そうだ、見えてきたみたいだな」

そういうゲイル。

「本当に風の町ですね。いい風の香りです」

そう言い微笑むミリア。

「・・・」

いつのまにか無言で歩いていったゲイル。

そして一行は風の町の近くまで歩いていくのであった。

「ここが風の吹く町、リアゲインだ」

そう説明するゲイル。

「色々旅をしているから詳しいんですね」

笑みを浮かべ感心しているミリア。

「いや、ここは・・・」

ゲイルが何か言おうとしたとき、町の奥から一人の老人がやってきたのだった。

「誰かと思うたらお前じゃったか」

ゲイルを見てそう言う老人。

「ゲイルさん・・・知り合いですか？」

尋ねるクロード。

「・・・この人はこの町で一番偉い、長老と呼ばれていて・・・俺の祖父だよ」

ゲイルの発言に驚くクロードとミリア。

「それじゃ・・・ここって」

「俺の故郷だ」

そう言うゲイルなのであった。

立ち話もあれだと言うことで、一行は長老の家にやってきた。

「まあ、適当に座って下され・・・」

そう言う長老。

「失礼します」

ゆっくりと座る二人。

「しかしゲイルよ・・・長い間ここを出ていたお前が何用で戻ってきたのじゃ？」

ゲイルに尋ねる長老。

「あの地へ・・・な・・・」

そう呟いたゲイル。

「!?!?・・・」

と、長老はクロードとミリアを交互に見た。

「彼の方だ、長老」

そう告げるゲイル。

「・・・・・・・・最近この町周辺でもモンスターの数が増えていたが・・・事態は動いているのか・・・」

そう言う長老。

「?」

あまりよくわからないクロードとミリア。

「詳しい話は夜にしてやるよ、クロード、ミリア姫もゆっくりして
いってくれ」

そう告げると部屋を出ていったゲイルなのであった。

そして夜。

夕食時に話を聞くことにしたクロードとミリア。

「ゲイルはこの町で結構な腕前じゃった・・・」

そう語り始める長老。

「それで一度は城で働いていたこともあった」

「ゲイルさんがですか」

驚くミリア。

「昔の話だよ・・・」

呟くように言うゲイル。

「しかし元々一人を好む性格じゃったゲイルは1ヶ月後ぐらいじゃ
ったか・・・この町に戻ってきた」

そう語っていく長老。

「ゲイルさん・・・」

「結局ワシにも城でのことを話さなかったがな」

「過ぎたことだからな・・・」

「・・・・・・・・」

ミリアにはゲイルが悲しそうな表情をしているように見えていた。

「クロード、レイントゥスの件は明日の朝に話す・・・それでいいか？」

「うん、それでいいよ」

そう答えるクロード。

と、早くに夕食を済ませたゲイルは部屋に戻っていったのだった。

「おそらく城で何かあったのじゃろう・・・いくら一人を好むと言ってもゲイルは責任感を持ち合わせておる・・・」

そういう長老。

それぞれが心に何かを抱えたまま、時だけが過ぎていくのであった。

そして夜も遅い時間。

すでにミリアや長老は就寝していた。

「さてと、僕も寝ようかな」

部屋にいたクロードはそう呟いた。

と、その時クロードの部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。

「はい・・・」

「俺だ・・・」

と、部屋に入ってきたゲイル。

「ゲイルさん、どうしたんですか」

「・・・夕食の時はミリア姫がいたからな・・・」

「？」

首を傾げるクロード。

「ミリア姫がって・・・」

「お前にだけは話しておきたいと思ったただけ・・・俺の過去を・・・」

「ゲイルさんの・・・過去って・・・長老さんが言っていた・・・」

クロードがそう言うと

「ああ、俺にとっては過去だけだな・・・だが・・・俺は一度もあの時のことを忘れたことはなかった」

そう言うゲイル。

「ゲイルさん・・・過去にいったい何が・・・」

「長老が言っていたが俺はかつて城で働いていた・・・王族を守る仕事だ」

そう話していくゲイル。

「いたって平和な国だった・・・争いもなく豊かな・・・だが」

と、真剣な表情になるゲイル。

「あの一件で・・・全て変わってしまったんだ」

そう告げたゲイルであった。

レベル15：風が吹き抜ける町（2）

「王族を守る戦士は俺以外にもいた・・・今のクロード達みたいな仲間という奴だな・・・一人を好んでいた俺だったがそいつらとは仲良くやれたよ」

そう語っていくゲイル。

その表情はいつもは見せないような、笑みがあつた。

「だがある時・・・突然その街にモンスターが襲撃してきた・・・襲ってきたのは低級のモンスターの群だった・・・」

と、ここでクロードか

「でもそのレベルだったらゲイルさんなら・・・それに他の戦士だって強いんでしょう」

そうゲイルに告げた。

「ああ、あの時油断しちゃいけなかったんだ・・・俺たちは王族を守る戦士・・・なのに・・・」

俯くゲイル。

「おそらくモンスターを操っていた者だろう・・・そいつが城に乗り込んでいたんだ・・・時間差でな」

「・・・・・・・・」

無言でそして真剣な表情でゲイルの話を聞いているクロード。

「城からあがった煙で俺たちは城に急いだ・・・くい止めようとするモンスターをなぎ倒し王の間にたどり着いた・・・そこには王と姫・・・そして敵もいた。俺たちは王達を助けるべく突入した・・・俺たちは戦った。負傷しながらも王達を守るため戦った・・・そして敵を退けた・・・だが敵はこちらの一瞬の隙に攻撃を放った・・・」

「それで・・・」

そう呟くクロード。

「疲労していたみんなは誰も対処できなかった・・・その中で俺だけ飛び出していた。俺だってあの時は負傷もしていたが、それよりも役目を果たすという思いが身体を動かしていた・・・」

夜の時間が過ぎていく中、ゲイルの話は続くのであった。

「それで・・・」

静かに呟くクロード。

「あの時は自分自身を盾にしてでも守ろうとした・・・だが、わずかに間に合わなかった・・・敵の攻撃は姫に直撃してしまったんだ・・・」

「・・・」

クロードも真剣な表情で話を聞いていた。

「敵は去りすぐに姫の治療は行われた・・・一度は何とかなると思われたが・・・」

その先は聞かなくてもクロードにはわかっていた。

「夕食時に話さなかったのはミリア姫がいたから？」

そう尋ねてみたクロード。

「ああ、それもあるがクロード・・・お前だけに伝えたかった・・・」

そう告げたゲイル。

「僕だけに・・・」

不思議そうにいうクロード。

「ミリア姫を同じ目に合わせてはいけない・・・あんな辛い思いをするのは俺だけで十分だ・・・」

そういうゲイル。

「ゲイルさんはその一件でその仕事を・・・」

「守れなかったからな・・・命にかえても守らなければならなかった・・・それを果たせなかった以上・・・そこにいるわけにはいい・・・」

そう告げるゲイル。

「ゲイルさん・・・」

「まあ、俺が言いたいのは大切なものを守るようになれって事だ・クロード」

「はい、必ず・・・」

そう誓うクロード。

「じゃあもう寝るか・・・明日が大変だからな」

「はい」

そして部屋に戻っていったゲイル。

この夜、クロードは新たに強い思いを胸に抱いたのであった。

大切なものを守るように強くなる・・・と・・・。

そして・・・。

翌日。

クロードは早くから起きて外を眺めていた。

「話を・・・聞けたようじゃな」

クロードの横に立つ長老。

「おはようございます」

「気持ちはどうじゃ？」

「・・・絶対とは言えませんが・・・誰にも負けずに強くなります」

そう告げたクロード。

そして、全員が起きてきたところで朝食タイムとなった。

「さて、クロード」

名前を呼ぶゲイル。

「はい・・・」

「風の洞窟はモンスターも多い、しっかりミリア姫を守れよ。守れるのはお前一人なんだからな」

ゲイルの言葉に首を傾げるクロードとミリア。

「ゲイルさん・・・」

「言っておらんかったな・・・この町の者は風の洞窟には入れない決まりなのじゃ・・・」

そういう長老。

「すまないな・・・本当なら手伝ってやりたいんだけどな・・・」

心配そうな表情で言うゲイル。

「なら、僕一人で行くよ。元々僕とレイントウスの試練みたいなものなんだし」

クロードがそう言う

「私もついて行きます！クロードさんが怪我をしたとき治せるのは私だけですから」

そう言いになったミリア。

「ミリア姫・・・」

「そちらのお嬢さんは中々元気があるようじゃな・・・それならば何とかなるかもしれぬな」

そう告げる長老。

「クロード・・・お前の心・・・ここで見せてもらうぜ」

「ゲイルさん・・・わかりました。必ず・・・」

そんな訳で風の洞窟へはクロードとミリアの二人で行くことになったのであった。

レベル16：風の洞窟とハンターな女の子（1）

ゲイルから風の洞窟までの道を教えてもらい、やってきたクロードとミリア。

「洞窟の中から風が吹いてますね」

そう言うミリア。

「だから風の洞窟っていうのかな・・・まあ、それはさておきここにレイントウスを強化できる宝玉があるんだ・・・」

「はい・・・」

少しの間辺りは風の吹く音だけが流れていた。

「行こう・・・」

クロードの言葉で、二人は風の洞窟の中に入ってしまったのだった。

「中はひんやりですね・・・」

そう言うミリア。

「あっ、そうだ」

いきなり立ち止まってそう告げたクロード。

「どうしたんですか？」

尋ねるミリア。

「船で助けてくれた事・・・お礼言っ てなかったね」

そう言うクロード。

「あれは当然のことですよ。仲間として」

そう言うミリアだが

「それでもミリア姫がいなかったら・・・だから何かあったら何でも言っ てほしいんだ。僕に出来ることだったら何でもやるから」

そうミリアに告げたクロード。

「別に私は・・・」

と、言葉を止めたミリア。

「ミリア姫？」

不思議に思うクロード。

「それなら一ついいかな・・・」

「えっ・・・」

「クロードさん・・・これから私を呼ぶ時は『姫』をつけないこと・・・出来るでしょ♪」

そう言うミリア。

「でも、ミリア姫は姫だから・・・」

と、不機嫌な表情になるミリア。

「クロードさん・・・」

じっと見つめられどうしたらいいかわからないクロード。

「ミリアでいいですよ♪」

「えっと・・・ミリア・・・」

「はい、それじゃ先に進みましょう」

そう言い歩き出すミリア。

そしてクロードも多少戸惑いの表情を見せながら、ミリアの後を追うクロードであった。

「ミリアひ・・・」

そこまで言い掛けたとき、ただならぬミリアの気迫を感じて言葉を止めた。

「ミ、ミリア・・・」

「何ですか。クロードさん」

一転して変わるミリア。

「えっと、先頭は僕が行くよ、何が出てくるかわからないし・・・それに道なら多分わかるし」

「わかるんですか？」

驚いているミリア。

「うん・・・ゲイルさんが気付いて教えてくれたんだ」

そう告げるクロード。

と、クロードはレイントウスを鞘におさめたまま構えた。

（風に乗って・・・風の力を持つ宝玉の魔力を感じ取って・・・レイントウス）

そう心で強く思うクロード。

するとレイントウスのコアが淡く輝き始めたのだった。

「レイントウスが反応してる・・・ここにやっぱりあるんだ」

そう確信したクロード。

「後は僕自身が道を間違えないようにレイントウスを感じていかな」と

そう言うクロード。

そしてそんなクロードを見て感心していたミリア。

「凄いですね、クロードさんは」

笑顔でそう言うミリア。

「僕はまだまだだよ・・・ゲイルさんの方が・・・」

「そんなことないと思いますよ・・・きっとまだ気付いていないだけで誰よりも優れている所があるはずです」

そうクロードに言うミリア。

「・・・ありがとうミリア・・・それじゃ急ごう」

「はい♪」

そんなこんなでクロードとミリアは風の洞窟の奥へと進んでいくのだった。

「クロードさん・・・」

「ん？」

後ろを振り返るクロード。

「何だか奥に進むにつれて風が強くなってますね・・・」

そう言うミリア。

「宝玉がこの風を起こしているのなら近付いている証拠だから喜ばない」と

そう告げるクロード。

「そうなんですよね……でも……」

ちょっと辛そうなミリア。

「進みづらいなら僕の真後ろにいいよ、少しは風が遮られるから」

「……はい……」

そう言われたミリアは、素直にクロードのすぐ後ろについて歩き出した。

クロードはそれを見て少し安心した表情になると、先へと急ぐのであった。

しばらく進むとクロードはふと足を止めた。

「どうしたんですか？」

尋ねるミリア。

「レイントウスが示す道の方に誰かの気配を感じる……」

そう告げるクロード。

「モンスターですか？」

「わからない・・・けど・・・向こうもこっちに気付いてるかもしれない・・・」

「クロードさん・・・」

「ミリア、ここは僕が行く。ミリアはここに」

そう言うクロードだが

「私も手伝います・・・クロードさんが相手に出会った瞬間に私の氷の魔法で動きを封じます・・・それでいいでしょ？クロードさん」

ミリアの意見を聞いて考えるクロード。

「気配も近付いているみたいだし考えている時間もない・・・やってみよう」

「はい♪すぐに詠唱やりますね」

すぐさま魔法発動の準備をするミリア。

そしてクロードは、鞘に入ったままのレイントウスを構えて少しずつ前進していった。

「準備オツケーです、クロードさん」

「よし・・・」

クロードは相手も近付いてきているのを気配で確認しつつ、飛び出していったのだった。

クロードが飛び出してきたことに相手は驚き、一瞬動きを止めていた。

「ミリア！」

クロードが叫ぶと同時にミリアは魔法を発動させた。

「氷檻の陣」

と、相手の足下から細い氷の柱が多数出現し、相手の動きを封じた。

「ちょっと・何するのよ」

その声を聞いたクロードは驚いていた。

「お、女の子・・・」

ミリアの氷の魔法によって動きを封じられていたのは、見た感じ普通の女の子なのであった。

「君は・・・」

クロードが何か言おうとすると

「話をするのはいいけどこれ消しなさいよ！」

かなりプンスカなその女の子。

「ミ、ミリア・・・」

「はい」

ミリアも相手が人間だと知りすぐに魔法を解除した。

「まったく・・・」

解放されたその女の子はそう呟いた。

「ごめん、てっきりモンスターとばかり」

謝るクロード。

「せっかくお宝がありそうな感じがしたから乗り込んだのに、モンスターじゃなくて人間に捕まるなんてね」

「だからごめん・・・」

そんな二人のやりとりを見ていたミリア。

『もうそれくらいにしてあげたら、ルーティ』

どこからか聞こえてきた声。

「でも、私の怒りは・・・」

誰かと話している感じのルーティと呼ばれた女の子。

「?」

だが、ミリアには聞こえていないようだった。

しかし……。

「あれ?」

「何よ……」

「今、声が聞こえたような」

そのクロードの発言に驚くルーティ。

『彼は私の声が……』

「また……」

「……ちょっときなさい!」

クロードの腕を引っ張りミリアから離れたところに連れてきたルーティ。

「あんた、何でアトワイトの声が聞こえるのよ……まさかあんたもソーディアンを……」

そう言うルーティ。

「アトワイトって……ソーディアンって何……」

ルーティの言葉に対して、そう答えるクロードなのであった。

「あんた・・・本当に何も知らないの？」

そう聞いたルーティ。

「何がなんだか・・・」

『でも彼には私の声が聞こえている・・・ソーディアンを持つ資質があるのかしら』

そう言うアトワイト。

「えっと、ルーティさん・・・でしたっけ」

「何で私の名前・・・って、さっきアトワイトが私の名前呼んでたわね・・・で、何？」

「さっきから聞こえてる声って何処からかって・・・」

疑問に思い聞いてみたクロード。

「アトワイトのことね・・・アトワイトはこの剣なのよ」

クロードの前でアトワイトを構えたルーティ。

『挨拶はしておくわね・・・私がアトワイト・・・事情は話せないけど簡単に言うという意味を持った剣よ』

そう説明したアトワイト。

アトワイトを見て不思議な感じを覚えていたクロード。

と、おもむろにクロードはレイントウスを取り出し構えた。

「それって、ソーディアン!?」

ルーティがそう言うと

『違うわ・・・でも、普通の剣じゃないみたいね』

そう告げたアトワイト。

「レイントウスがアトワイトに反応してる・・・アトワイトも力を
持った剣・・・」

クロードがそういうと

「だからアトワイトはソーディアンっていう特別な剣なの・・・それ
よりあんたのそれはソーディアンじゃないなら何なのよ」

ルーティがそう聞いた。

「七つあるって言う宝具の一つなんだ」

「ってことは価値のある物ね」

『ルーティ・・・まさか・・・』

「クロードだったわね、その剣私に譲ってくれない？」

いきなりそう言ってきたルーティ。

「それは出来ないよ」

「ただとは言わないからさ、ねっ」

『ルーティ・・・』

何やら呆れている様子のアトワイト。

「これは父さんの形見でもあるから」

「えっ・・・」

その言葉に驚くルーティ。

『ルーティ？』

「クロード・・・差し支えなかったらその剣の事とその剣を手に入れた経緯を話してもらえる？」

「・・・」

しばらく考えていたクロードだったが、静かにルーティにその話をしていくのであった。

レベル16：風の洞窟とハンターな女の子（2）

「・・・・・・・・」

『・・・・』

クロードの話を黙ったまま聞いていたルーティとアトワイト。

『そんな事が・・・』

そう呟いたアトワイト。

「悪かったわね・・・珍しそうな剣だったから欲しいって言っちゃって・・・」

「別に謝らなくてもいいですよ・・・」

そう言うクロード。

「あんたにとっては大切なのね・・・」

『ルーティ・・・・』

と、ここで話は今現在の出来事に戻る。

「で、ここにその宝具をパワーアップさせる物があるって訳ね」

とりあえず状況を理解したルーティ。

「うん、そういう訳なんだ」

「クロード・もしかしてその物ってまだ幾つかあって世界中に散らばってるわけ？」

尋ねるルーティ。

「幾つあるかは僕も知らないけど・・・色んな所にあると思う」

そう答えたクロード。

すると、何かを思いついたような表情になるルーティ。

『止めても無駄みたいね・・・』

そう悟ったアトワイト。

「クロード、取り引きしましょ♪」

「取り引き？」

「もちろんその宝具の事じゃないから・・・私があんたに力を貸してあげるって言ってるの」

「ルーティさんが・・・」

驚くクロード。

「世界中行くならこっちも都合がいいのよ・・・でね、そのパワーアップアイテムはクロードにあげるからそれ以外のは私に頂戴♪」

そう言ってきたルーティ。

「僕は構わないけどミリアとかは・・・」

クロードがそう言う

「じゃあ余り物のお宝とかでいいわ・・・それで決めない？」

「わかった。それじゃこれからは仲間だね」

そう言ったクロードは手を差し出した。

「しばらくはね・・・まあ、頑張っていきましょう」

ルーティはそう答えるとクロードと握手をかわすのであった。

「あの・・・」

と、離れた場所でじっと見ていたミリア。

「あつ、ごめんミリア」

クロードはルーティと共にミリアの元に戻っていった。

「クロードさん・・・その人は・・・」

ルーティを見てそう言ったミリア。

「私はルーティ、これから一緒に行くことになったからよろしくね」

簡単にミリアに挨拶したルーティ。

「よろしくお願いします」

そう言い頭を下げるミリア。

と、ここでクロードが

「ルーティさんは先にここに入ってたんだよね・・・一番奥までは行かなかったの？」

そう尋ねた。

「もちろんお宝のたてに行こうとしたんだけどね・・・アトワイトが強い何かの気配を感じたって・・・だから奥までは行っていないのよね」

そう答えたルーティ。

「何かいるのか・・・宝玉を守る何か・・・」

そう呟いたクロード。

「とにかく三人いれば何とかかなるでしょ」

そう考えるルーティ。

「私も頑張りますよ」

意気込むミリア。

すると、突然奥から吹く風が強くなり始めた。

『あの時感じた気配よ、ルーティ』

そう告げるアトワイト。

「とにかく進むしかない、気をつけていこう」

そう言うときクロードは歩き始めた。

そして、ミリアとルーティもその後が続くのであった。

風が強くなる中で奥へと進むクロード、ミリア、ルーティの三人。

奥から吹く風は、まるで侵入者をこれ以上先に行かせないといった意思表示のようにも感じられていた。

「二人とも大丈夫？」

先頭で歩いていたクロードは、二人に尋ねた。

「私は大丈夫です」

多少辛そうな表情をしながら答えるミリア。

「これくらい何てことはないわよ」

まるで何ともない感じで答えるルーティ。

「アトワイトはまだ何か感じているの？」

小声でルーティに聞いたクロード。

『強い気配・近付いているわ・・・確実にね』

そう答えるアトワイト。

「わかった・・気をつけていこう」

より気合いを入れて進み始めるクロード。

しばらく進むと、今まで強かった風が弱くなり全く風が吹いてこなくなっただった。

「これってどういうことなのでしょうか・・・」

疑問に思うミリア。

「アトワイト・・もしかして・・・」

ルーティが呟くと

『向こうもこちらに気づいたみたいね・・戦闘態勢を整えてルーティ』

そう告げるアトワイト。

「ミリア・・・ルーティ・・」

そう呟くクロード。

「私は援護にまわりますね・・・」

そう言うミリア。

「わかった・・・」

一度深呼吸をするクロード。

「よし、突入しよう!!」

そう決めてクロード達は、洞窟の最奥へと突入していったのであった。

洞窟の最奥へと突入していったクロード達。

そして、中でクロード達を待ち受けるようにしていたモンスターを見つけたのであった。

「あれって・・・」

クロードがそう呟くと

「確かあれはホークっていうモンスターですよ、お兄様からモンスター図鑑で教えられました」

「何でミリアにモンスターの勉強を・・・」

「戦いになったときどんなモンスターが相手でも適切な戦い方が出来るようにって」

そう言うミリア。

と、ルーティが

「モンスター雑談はそれくらいにして・・・ホークって普通の鳥みたいなモンスターでしょ？でも・・・」

ルーティは宙を飛んでいるホークを見た。

ここにいたホークは、普通のサイズの数倍大きかったのである。

「・・・レイントウスが・・・」

クロードはレイントウスのコアが今までより強い光を放っているのに気付いた。

『ルーティ、クロード・・・あそこみたいよ』

二人にそう告げるアトワイト。

「あれが・・・宝玉」

岩の上に置かれていた緑色の宝玉。

「でも何か・・・」

魔法を使う者だからなのか、何か違和感みたいなのを感じていたミ

リア。

『魔力が流れているみたいよ・・・』

「魔力がって・・・何処に・・・」

そう言いながらある考えが出たルーティ。

「まさか・・・あのモンスター」

「確かに宝玉からホークに緑色の魔力が流れているみたいです」

そう言うミリア。

『だとすればその流れを止めればホークも元のサイズに戻るわけね』

そう告げるアトワイト。

「それはそうだけどね・・・素直にあいつが従えばね・・・」

そう言いながらホークを見上げるルーティなのであった。

広い洞窟の最奥。

そこで宙を飛んでいるホークは、いつでも襲いかかれるようにじつとクロード達を見ていた。

「確実に宝玉を取るにはホークを足止めしないといけないんだけど・・・」

そう言うルーティ。

「でも向こうが近づいてこないと簡単には武器攻撃も魔法も当たりませんよ」

そう告げるミリア。

「だったら・・・」

と、クロードはレイントウスの力を発動させた。

「火の力を・・・飛空烈火斬！！」

ホークに向かっていく火の飛ぶ斬撃。

しかし、ホークは翼を羽ばたかせると強力な風を巻き起こした。

「物凄い風・・・」

そしてその風によって火の斬撃は消滅してしまった。

「消された・・・」

「遠距離攻撃は威力が弱いとあの風でかき消されるって訳ね・・・」

そう言うルーティ。

「私の魔法なら・・・当たれば動きを止められますけど・・・」

そう呟いたミリア。

『ルーティ・・・どうするの？』

尋ねるアトワイト。

「クロード！私達であいつを攻めるわよ、ミリアはいけると思ったらどんどん魔法を撃ちなさい」

そう指示していくルーティ。

「わかった、ミリアは敵の攻撃に巻き込まれないように離れた場所にいてくれ」

ミリアにそう言うクロード。

「はい、わかりました」

と、作戦が決まったところでクロード達めがけてホークが急降下してきたのであった。

レベル16：風の洞窟とハンターな女の子（3）

「行くぞ！」

クロードの言葉で行動を開始したメンバー。

ミリアは後方に下がり、クロードとルーティはホークの攻撃をかわし左右に分かれた。

「烈火斬！！」

今度は直接攻撃を仕掛けたクロード。

だが、ホークはすぐに翼を羽ばたかせ宙へと飛んでいった。

「ううっ・・・」

その羽ばたきにより巻き起こった風で、クロードは後退させられていた。

「ちょっとしっかりしなさいよ」

クロードにそう言うルーティ。

『ルーティ！今度はこっちにくるわ』

そう告げるアトワイト。

ホークは翼を羽ばたかせ、風の刃を雨のようにルーティに放った。

「もう、厄介なんだから」

走りながらそう言うルーティ。

『ルーティ、晶術で反撃を・・・』

そうルーティに伝えたアトワイト。

「仕方ないわね・・・」

と、ソーディアンであるアトワイトを構えたルーティ。

「これでもくらって落ちなさい！ヒートレイン！！」

水属性の晶術を発動させたルーティ。

熱をもった雨がホークの上から降り注いだ。

「効いてる・・・」

そう感じたクロード。

だが、攻撃を受けたホークは空中で暴れ始めたのであった。

その様子を後方でじっと観察していたミリア。

と、ホークは空中で翼を大きく広げ全方位へ強力な風を放ったのであった。

「なっ・・・」

驚くルーティ。

ホークが放った風の中には、大量の風の刃も含まれていた。

「こんなの防ぎようが・・・」

そう思っていたクロード。

と、その時

「クロードさん！ルーティさん！」

そう叫んだミリア。

呼ばれた二人がミリアの方を見ると、ミリアは魔法発動の準備を終えていたのだった。

「ミリア！」

「二人とも下がってください」

そう伝えるミリア。

それと同時に後退するクロードとルーティ。

その間にも迫ってくるホークの放った風。

「間に合って・・・【氷の檻】」

魔法を発動させるミリア。

と、ミリアのいる場所から後退してきているクロード達まで氷の壁に覆われたのだった。

「凄いミリア・・・これだけの範囲を・・・」

感心しているクロード。

そしてミリアの氷の檻にホークの風が激突した。

その振動は中にいたクロード達にも伝わっていた。

「負けるな、ミリア」

応援するクロード。

と、ここで

『やっぱり・・・』

アトワイトがそう呟いた。

「アトワイト？」

不思議そうにアトワイトを見るルーティ。

『彼女・・・かなり辛い状況だと思うの』

そう告げたアトワイト。

ルーティはミリアの方をもう一度見た。

離れているためちゃんと表情が見えるわけではないが、確かに何やら辛そうに見えていた。

「ルーティさん、どうしたんですか？」

尋ねるクロード。

『今は彼女の力を信じるしかないわね』

そう告げたアトワイトであった。

「ミリア・・・」

心配そうな表情を見せるクロード。

「ちょっとクロード！」

「えっ・・・」

名前を呼ばれてルーティの方を向いたクロード。

「ぼーっとしてる暇はないわよ！あの子が頑張って防いでる間にあいつを倒す作戦を考えるわよ」

そう言うルーティ。

『でも実際効果的な攻撃方法がないわ・・・ヒートレインもダメージは与えられはしたけど致命傷にはなっていない・・・』

そう告げるアトワイト。

「あの子の氷魔法なら効果ありそうなんだけど、攻撃魔法は使えないらしいし」

そう言うルーティ。

と、頑張っているミリアを見ながら何かを考えていたクロード。

「どうしたのよ？」

尋ねるルーティ。

「ルーティさん、あいつは多分あの大きさのままじゃ倒せないと思うんです」

そう告げたクロード。

『でも、倒さないと目的は・・・』

「あんた、まさか・・・」

クロードの考えに気付いたルーティ。

「うん、あの宝玉を手に入れる。そうすればレイントウスもパワーアップするし、ホークも元の大きさに戻るはずなんだ」

そう説明したクロード。

『確かにそうかもしれないわ・・・でも・・・』

「あのモンスターだって宝玉から力を得ている事に気付いているはず、それで宝玉を手に入れようとしたらあんたに襲いかかってくるわよ」

そう言うルーティ。

「だからルーティさんとミリア・・・二人で動きを止めてほしいんだ」

そうルーティに言うクロードなのであった。

「私達であいつを止めろっていうの？かなり無茶よ」

そう言うルーティ。

「大丈夫、ルーティさんとミリアなら・・・僕に出来ない事が二人には出来るから」

そう告げたクロード。

「ルーティさん、私も頑張ります」

ルーティにそう言うミリア。

『ルーティ、クロードの考え・・・大体わかってきたわ・・・チャンスは今よ』

そう伝えるアトワイト。

「わかったわよ、ミリアの氷の防御も限界みたいだしね、すぐに行動開始よ!!」

そう決断したルーティ。

「気をつけてください、クロードさん」

魔法を発動させたまま、そういうミリア。

「ああ」

そして、ルーティ達から離れるクロード。

「ミリア、合図したらその魔法解除して」

「はいっ」

ルーティの指示を了承したミリア。

「・・・・・・」

僅かに流れた静かな時間。

「今よ!!」

クロードがスタンバイしたのを確認して、ルーティがミリアに合図を出し激しい時間がスタートするのであった。

レベル16：風の洞窟とハンターな女の子（4）

ルーティの合図と共に、魔法を解除したミリア。

「行くわよアトワイト!!」

『ええ、ルーティ』

アトワイトを構えたルーティ。

「ウォータースパイラル!!」

と、ルーティ達の前に出現した水の渦が壁のように出現し、ホークが放っていた風を食い止めたのだった。

「ルーティさん、この後は・・・」

ミリアが尋ねると

「ミリアは私の指示した場所に出来るだけ強い冷気を出して・・・やる？」

ルーティがそう言った。

「強い冷気・・・三回ぐらいならまともに放てると思います」

そう答えたミリア。

「わかったわ、なるべく二回であいつを止めれるよう作戦組み立て

るわよ」

「えっ、二回？」

「最後の一回は予備・もしもの時は私とアトワイトも全力の晶術でやらないといけないから」

そう話すルーティ。

そんな中、物陰に隠れて様子を伺っているクロード。

『ルーティ、来るわ』

と、宙にいたホークがルーティ達の方に急降下していった。

「合図するまでミリアは待機、アトワイト・耐えきるわよ」

『もちろんよルーティ』

そして、迫るホークに立ち向かう構えを見せるルーティなのであった。

大きく翼を羽ばたかせてルーティに迫るホーク。

「・・・」

ギリギリまで引きつけ瞬間的に横にかわしたルーティ。

『上昇を始めたわ、そして風の魔力が上がってる・・・また風の攻撃が来るわ』

そう伝えたアトワイト。

「ミリア！あいつの上空に冷氣をお願い！！」

そう叫んだルーティ。

「はいっ！」

すぐに準備を始めるミリア。

と、空中にあがったホークは途中で止まり風の魔力を高め始めた。

「急いでミリア！」

「準備・・・完了です、行きます！！」

そう叫ぶと手を天にかざした。

「渦巻け冷氣・・・ブリザード！！」

すると、ホークの頭上に大量の冷氣が出現した。

「次は私たちよ、アトワイト」

『ええ』

アトワイトをかざすルーティ。

「ヒートレイン！！」

再びホークの頭上から降り注ぐ熱を含んだ雨。

だが、ミリアによって出現している冷氣によりその雨は急激に冷やされた。

「これこそ、アイスレイン」

氷になったことで相手に与えるダメージは多くなっていた。

「凄いです・・・」

感心しながら見上げているミリア。

「もう一回・・・冷氣の準備よ！次であいつを止める」

そう告げたルーティ。

「アトワイト、結構エネルギー使うわよ」

『それはお互い様よ、ルーティ』

決意を込めアトワイトをかざすルーティ。

「大地より大気より・・・存在する水の力よ、全てを飲み込むものとなれ、ハーブントルネード」

と、辺りから出現した水分が一カ所に集まり渦を巻き始めた。

そしてそれはホークを巻き込み大きなトルネードとなった。

「さあ・・・ミリア！」

術を維持しつつそう叫んだルーティ。

「はい、私の全力を・・・ブリザード！！！！」

ハーブントルネードを取り巻くようにブリザードの冷気が放たれた。

そして、それによりホークは渦ごと氷に包まれたのであった。

「ホークが氷付けに・・・」

感心していたクロード。

「クロード！見てないで行きなさいよ・・・私もミリアも長くは魔法力維持・・・出来ないんだから・・・」

そう告げるルーティ。

「わ、わかった」

慌てつつ風の宝玉がある場所に向かうクロード。

と、それに気づいたのか氷の中に閉じこめられながらも風の魔力を放出し始めたホーク。

「暴れ・・・るんじゃないわよ・・・」

少し辛そうなルーティ。

そして宝玉のある所にたどり着いたクロードは、上を見た。

台の上に乗せられていた宝玉。

それは、高い岩場の上にあった。

「こんなの登ってる時間はない・・・なら」

と、レイントウスを構えたクロード。

そしてレイントウスのコアに浮かび上がる【火】の文字。

「飛空烈火斬!!」

クロードが放った火の斬撃は、台の下の岩に命中し切り崩した。

それにより落下してきた風の宝玉。

「レイントウスに新たな力を!!」

落ちてきている風の宝玉に向けてレイントウスを掲げたクロード。

そして、それと同時にホークはルーティ達の魔法を打ち破り復活したのであった。

「術が・・・」

「クロードさん!」

叫ぶミリア。

と、クロードが掲げたレイントウスのコアに風の宝玉が吸収されていった。

そして、風の魔力の影響を受けていたホークはその力を失い急速に魔力が衰え始めた。

『ルーティ・・ホークが』

アトワイトがそう言う上を見たルーティ。

「これで何とか終わったわね・・」

安心するルーティ。

しかし、元のサイズに戻ったホークはクロードめがけて急降下してきたのだった。

「まだ終わってないですよ」

慌てながらそう言うミリア。

「なら、風の力を試してみる」

レイントウスを構えるクロード。

そして、レイントウスのコアには【風】の文字が浮かんでいた。

「飛空疾風斬」

レイントウスから放たれた攻撃は、一瞬でホークを通過していった。

「どうなったのよ・・・」

だが次の瞬間、ホークはそのまま地面に落下したのだった。

「あれ？倒したんですか？」

不思議そうな表情をしているミリア。

「風の力・・・火よりパワーはないけど技のスピードはあるみたいだ」

使ってみてそう感じていたクロード。

「まあ、とにかく無事目的は果たしたんだし早く出ましょ」

そんな訳でクロード達は、急ぐように風の洞窟から出るのであった。

レベル17：ゲイルの決断

ゲイルの故郷であるリアゲイン。

ここの長はゲイルの祖父であった。

そして、風の洞窟に向かったクロード達が帰ってくるのを待っていた二人。

しかし、ゲイルの表情は少し暗かったのだった。

「本当によかったのか？ゲイル・・・」

そう告げた長。

「ああ、少し心残りはあるが・・・今まで自分勝手に生きてここを放っていたからな・・・」

そう言うゲイル。

そんな中、風の洞窟から出たクロード達三人。

「よし、ゲイルさん達の所に戻ろう」

クロードがそう言うと、ルーティは背中を向けた。

「ルーティさん？」

不思議に思ったミリア。

「私はこの辺りで待ってるわ」

「えっ、どうして・・・」

驚くクロード。

「私はお宝ハンターだし・・・勝手に風の洞窟に入り込んだわけだし・・・この人に顔を見せるわけにはいかないでしょ」

そう語ったルーティ。

「わかった」

「約束だから、あんたの手伝いはするわよ・・・ここで待ってるから」

そう言うわけで、クロード達は長のいる家に向かうのであった。

「どうやら戻ってきたみたいだな」

そう言いながら外へ出たゲイル。

「あっ、ゲイルさん」

「その様子だと上手く手に入ったみたいだな」

そう告げたゲイル。

「はい♪何とか成功しました」

そう言うミリア。

「まあ、俺からも話があるし中に入ろうか」

「?..?」

いつもとは違うゲイルの様子を不思議に思うクロードとミリア。

「風の洞窟から無事戻ってきたようじゃな」

二人を見てそう言った長。

「はい、何とかですけど」

そう言うクロード。

「確かに結構疲れてるみたいだしな・・・よっぽど強かったのか？
宝玉の影響を受けたモンスターは」

「えっ・・・」

ゲイルの言葉に驚くクロード。

「洞窟内がどういう状況かは前からわかっておった・・・だから余計に誰も入れないようにしていたという訳じゃ」

そう説明した長。

「そうだったんですか・・・」

「だから本当は加勢してやりたかったけどな・・・掟だからな・・・まあ、何にせよ無事でよかったよ」

とりあえず喜んでいる様子のゲイル。

「そうだ、ゲイルさんも話があるって言ってましたよね。何なんですか？」

尋ねるクロード。

ゲイルは少し間をあけると自分が決断したことをクロードに話すのであった。

「えっ、リアゲインに残る!？」

驚きを隠せないクロード。

「ああ・・・」

「どうしてなんですか？」

尋ねるミリア。

「それは・・・」

ゲイルが事情を説明しようとする

「それはワシから説明しよう」

そう言ってきた長。

「今世界全体でモンスター達が動き始めておる・・・当然このリアゲイン周辺にもな」

「はい・・・」

静かに長の話を聞いているクロードとミリア。

「ワシ達もリアゲインを守るため動いたが・・・情けない話だがゲイルやお前さん達のように強い力は持っていないからな・・・増え続けるモンスターにこちらが追いつめられ始めたのじゃ」

長がそう言う

「だから俺が残ることにした。ここを守るため・・・ずっと放っていたからな・・・たまには故郷のためにな・・・」

そうクロードとミリアに言ったゲイル。

「・・・わかりましたゲイルさん、ゲイルさんがそう決めたのなら」

「すまないなクロード・・・だが約束する・・・事が落ち着いたら必ず合流する・・・その頃にはクロード達もモンスターが急に増えだした原因を見つけてるかもしれないしな」

「ゲイルさん・・・」

そう言うわけでクロードは、少し惜しみながらもゲイルとここで一時的に別れることを受け入れるのであった。

そして・・・。

長の家の前で向かい合うクロードとゲイル。

「ゲイルさん、また何処かで会いましょう」

「ああ、必ず合流する」

そう告げたゲイル。

「はい、また会いましょう」

笑顔でそう言ったミリア。

「それじゃ・・・」

そして、リアゲインを出たクロードとミリア。

「ルーティさん待ってるから急ごうミリア」

「うん」

二人は急いで風の洞窟前に向かった。

「もういいわけ？」

クロード達の姿を見てそう言ったルーティ。

「うん、それに必ず合流するって約束したし」

そう告げたクロード。

「そう、それじゃ出発・・・」

「まあ、大体わかってたけどな」

突然声がして振り返った三人。

そこにいたのはさつき別れたばかりのゲイルだった。

「ゲイル・・・さん」

驚いているクロード。

「彼女が新しい仲間か」

「・・・」

無言のルーティ。

「長には何も言わない・・・実際彼女がいなければ風の洞窟はクリアできなかったんだろ？」

「それは・・・」

と、ここでルーティが

「私はハンター、この洞窟のお宝を頂きに来ただけよ」

そう告げた。

「お前も不思議な力を持ってるみたいだしな、クロード達を頼むぜ」

「ゲイルさん……」

「またな……」

そしてゲイルは、リアゲインに戻っていったのだった。

「ゲイルさん、わかっていたんですね……」

そう言うミリア。

「何なのよあいつ、クールに決めちゃって」

何やらゲイルに対して不機嫌なルーティ。

「それじゃ行こう、次の目的地に」

そしてクロード達は、リアゲインをあとにして次の場所に向かうのであった。

レベル18：頂点を目指す男（1）

リアゲインを出て旅を続けるクロード達。

「で、町を出たのはいいんだけど・・・」

そう呟くルーティ。

「ルーティさん？」

不思議そうな顔でルーティを見るミリア。

「探してるのはその剣をパワーアップさせる宝玉・・・でも、手ばかりも何もないんでしょ」

そう言うルーティ。

と、クロードが

「全く無いわけじゃないんだけど」

そう告げた。

「手がかりあるならそこに行きましょう」

そう決めようとしたルーティ。

「でもダメなんだ今の僕達じゃ」

「どういう事よ！」

クロードに迫るルーティ。

「実は・・・」

前にあった出来事をルーティに説明したクロード。

「海底神殿ね・・・お宝たくさんありそうね」

そう呟くルーティ。

「でも、ゲイルさんは仲間が増えてから向かった方がいいって言うてましたよね」

そう言うミリア。

「だから新しい仲間が増えるかゲイルさんが戻ってくるまで海底神殿にはいけない」

そう告げたクロード。

「お宝があるのに通り過ぎるのは気がかりだけど、いつかくるならその時でいいわ」

そう決めたルーティ。

「それで私達は次に何処に向かうんですか？」

尋ねるミリア。

「地図によると少し行ったところに大きめの街があるんだ、そこに行ってこれからの事を考えよう」

そう決めクロード達はその街を目指していくのであった。

しばらく歩き続けたクロード達。

すると、遠くに街らしきものが見え始めていた。

「あれみたいね」

そう告げるルーティ。

「よし、もう少しだし頑張っていこう」

ルーティとミリアにそう言うクロード。

街に近づくにつれ、辺りに人も増えていた。

「街の外でも賑やかですね」

ミリアがそう言う

「でも、少し今までの所と賑やかさが違う感じがするけど・・・」

そう思ったクロード。

「多分あれが原因ね」

ルーティは円形状の建物を示していった。

「あれって何なんですか？」

尋ねるミリア。

「闘技場ね・・・」

「闘技場？」

クロードもミリアもそれが何なのか全く知らなかった。

「口で説明するより見た方が早いわ、街に向かいましょう」

ってな感じで闘技場がどういうものか知るために急いで街へと向かうクロード達なのであった。

そんな訳で街の入り口までやってきたクロード達。

「街自体も大きいですね」

そう言うミリア。

「闘技場がある街・・・ツヴェルクよ」

そう告げたルーティ。

「ツヴェルク・・・」

街の名を呟いたクロード。

「闘技場はこっちよ」

と、また移動していくルーティ。

そして今度は闘技場の前で立ち止まったルーティ。

「はい、到着」

そして、クロードとミリアは闘技場を見上げた。

「あのルーティさん、ここでは何をするんですか？」

尋ねるミリア。

「これまた見た方が早いわよ。丁度歓声も聞こえてるから今やってみたいね。終わらないうちに行きましょう」

と、闘技場の中に駆け込むルーティ。

「僕たちも行こう」

ルーティの後を追い闘技場の中に入っていくクロードとミリア。

そして、奥の扉を開けた瞬間中から大きな歓声が飛び込んできた。

「ここって・・・」

驚いているミリア。

「ここが闘技場・・・」

「真ん中の所見てみなさい・・・」

指し示すルーティ。

そこでは知らない人たちが戦っていたのだった。

「闘技場はああやって戦いをするところ。勝てば賞金やらアイテムを手に入れられるってわけ」

ルーティの説明をしっかりと聞いている二人。

「まあ、今回は情報収集で立ち寄ったわけだし・・・参加はしないわよ・・・賞金とかはほしいけど・・・」

最後の言葉だけ小声になっていたルーティなのであった。

レベル18：頂点を目指す男（2）

「それじゃ情報収集に向かおうか」

クロードがそう言ったので、ルーティもミリアも闘技場の外に出ようとした。

だがそんな時、一人の男がクロード達の前に現れたのだった。

「えっ・・・」

突然のことで驚くミリア。

「ちょっとそんなところにいたら邪魔よ」

怒りながら言うルーティ。

「いや、すまない。だが、君たちは見た感じ強そうだと思ったからな」

そう言った男。

「私たちが強いから何だって言うのよ」

強気で言い放つルーティ。

「ここにいるって事は少なからず闘技場に興味があるって事なんだろう？まあ、つまりだな・・・俺とチーム戦に出て欲しいってわけだ」

男の目的を聞いて驚くクロード達。

「ちょっとそれ勝手すぎるお願いなんじゃない！」

そう告げるルーティ。

「そいつはわかってるんだけどな・・・今この街にいる中ではお前達が良いと感じたんだ」

「でも・・・えっと」

「ああ、名乗ってなかったな。俺はヴァイグ。ヴァイグ・ホーネストだ」

そう自己紹介したヴァイグなのであった。

「ヴァイグ・・・さん」

「おう」

「で、闘技場に出たいのはわかったけど・・・理由を聞かせなさいよ」

そう言ったルーティ。

「そうだな・・・お、丁度いい・・・次の試合を見てくれ」

そう言ったヴァイグ。

「試合ですか・・・」

そう呟きながら試合を見るミリア。

「試合なんか見せてどうするつもりよ・・・」

そう言いながら試合を見ているルーティ。

「あの左側の人・・・強い」

試合を見ていたクロードは、ふと呟いた。

「あいつがこの闘技場のチャンピオン・・・グレイツ・オーファ
ンだ」

そう説明したヴァイグ。

「あっ、勝ちましたよ」

そう言うミリア。

「あいつは・・・グレイツはここ何度もチャンピオンの座を守っている・・・その秘密はグレイツ自身が強いのもあるけどな・・・毎回チームのメンバーを変えて挑んでいるんだ」

ヴァイグがそう言う

「残り二人の対策がたてづらいつてわけね」

一応納得するルーティ。

「俺も何度か挑んだけどな・・・あいつには勝てなかった・・・」

「ルーティさん、ミリア・・・」

「ちょっとクロード！！あんたまさか・・・」

「ごめんルーティさん、でもヴァイグさんも困ってる・・・力になってあげたいんだ」

そう言うクロード。

「あんたね・・・」

呆れるルーティ。

「もしあいつのチームに勝てたら賞金も商品もお前達にやるよ」

そのヴァイグの発言に少なからず反応したルーティ。

「仕方ないわね・・・もしかしたら情報を得られるかもしれないしね」

「ありがとうルーティさん」

「サンキューな」

仲間を得たヴァイグはクロード達にお礼を言うのであった。

闘技場への参加を決めたクロード達。

参加受付をしてきたヴァイグによると、試合は明日の朝にと決定した。

そんな訳でクロード達は、宿屋にやってきていた。

「とりあえずは明日に備えての作戦会議だな」

そう言ったヴァイグ。

「作戦って言ったってね・・・チャンピオンは毎回チームメイト変えてて対策なんて立てられないわよ」

そう言うルーティ。

「でもチャンピオンのグレイツさんに対しては対策を立てられますよね、ヴァイグさん」

クロードがそう言う

「立てられるけどな・・・グレイツは計算して倒せるような相手じゃない・・・」

「グレイツさんってどんな攻撃をしてくるんですか？」

尋ねるミリア。

「グレイツは・・・魔法主体のスタイルだ」

そう答えたヴァイグ。

「魔法主体って・・・闘技場そんなスタイルで勝ち続けてるわけ」

驚いているルーティ。

「あいつの戦いは普通の魔法主体で戦う奴らとは違うって言うことだ」

「ルーティさん・闘技場のルールだとチーム戦は二勝したら勝負が決まる」

クロードがそう告げると

「わかってるわよ・・・私達が負ければ三試合目は無いって事でしょ」

そう言うルーティ。

「うん、ヴァイグさんがグレイツさんと戦えるように頑張ろう」

そう言い意気込むクロードなのであった。

レベル19：闘技場バトル・スタート

翌朝。

クロード、ミリア、ルーティは出発の準備をして宿屋の前に集まった。

「準備万端みたいだな」

そう言いながら現れたヴァイグ。

「おはようございますヴァイグさん」

挨拶するクロード。

「おう、今日は頼むぜ」

そう告げるヴァイグ。

「私は参加しませんがクロードさんもルーティさんも頑張ってください」

二人にそう言うミリア。

「うん、ありがとうミリア」

そう言うクロード。

「グレイツのチームに勝つことが出来たら約束守りなさいよね」

ヴァイグに向かってそう言うルーティ。

「わかってるさ、勝って得た賞金とかは全部やるよ・・・俺は興味ないからな」

そう告げたヴァイグ。

「それじゃ闘技場の方に行きましょう」

そんな訳でクロード達四人は闘技場へと向かうのであった。

そんなこんなで、闘技場までやってきたクロード達。

「二度目ですけど近くまでくるとやっぱり凄いですね」

そう言うミリア。

「すぐ試合始まるんですか？」

クロードが尋ねると

「両方のチームメンバーが揃ったのを確認した後試合が始まる・・・とりあえずは出場者の控え室に行こうぜ」

そう言うヴァイグ。

「そうだ、ミリアは・・・」

クロードがあることに気付いた。

「一人ぐらいなら問題ないぜ、一緒に来てもオッケーだ」

そう告げたヴァイグ。

「よかったです」

笑顔を見せるミリア。

ヴァイグの案内で、闘技場の控え室に向かったクロード達。

「ねえ、試合前に相手の情報得られないのかしら？」

そう考えたルーティ。

「それは難しいだろうな・・・ヴァイグの奴はチームメイトにはフ
ードをかぶせさせているから戦う直前まで正体は分からないんだ」

そう説明したヴァイグ。

「ややこしいわね・・・まあいいけど・・・」

そう言うルーティ。

「ここが俺たちの控え室だ。呼ばれるまではここで待機だな」

「よし、絶対に負けないように頑張ろう」

そう意気込むクロードであった。

しばらく部屋で待機していたクロード達。

「お待たせいたしました、チャンピオンチームの準備が整いましたのでバトルフィールドの方へお越しく下さい」

そうやってきた係員の男。

「よし、いよいよだぜ」

そう言うヴァイグ。

「うん」

「まあ、格好悪い試合にはしないようにするわよ」

そう告げたルーティ。

「それじゃバトルフィールドに行こうぜ」

そして、ヴァイグ達はバトルフィールドへと向かっていった。

「ここが・・・」

中央のバトルフィールドを囲むように、周りに観客席がありいつの間にかお客がたくさん入っていた。

「随分と賑やかね・・・」

そう呟くルーティ。

「頑張ってくださいね」

クロード達の後ろで応援するミリア。

「グレイツさんと・仲間の二人」

グレイツ達をみるクロード。

「本当にフードかぶってて誰かわからないわね」

そう言うルーティ。

「ではこれより、チャンピオンの座をかけたバトルを行います」

司会の言葉でこのバトルが始まっていくのであった。

レベル20：闘技場バトル（ルーティ編）（1）

両チームの選手たちは、無言でバトルフィールドをはさんで向かい合っていた。

「では、両チーム一試合目の選手前へ」

そう告げた司会。

「で、どっちからいくんだ？」

そう聞くヴァイグ。

「なら、僕が・・・」

クロードが前に出ようとした時、ルーティがアトワイトを構えた。

「ルーティさん・・・」

「最初は私からいくわ・・・パパッと終わらせてくるわよ」

そう言うルーティはバトルフィールドに上がっていった。

「俺の相手は女か・・・勝ちもらったな」

そう言うフードをかぶった男。

「何でもいいから早く上がってきなさい」

フードの男にそう言うルーティ。

「ああ、すぐに終わらせてやるぜ」

バトルフィールドに上がる男。

「では、一試合目始めて下さい」

司会の合図で最初の試合が開始されるのであった。

「アトワイト、勝つわよ」

自分の持つ剣・アトワイトにそう告げたルーティ。

『ええ、でも気をつけて』

そう言ったアトワイト。

「じゃあ俺も本気で行くぜ」

と、フードを取り投げ捨てた男。

「随分と細いお兄さんね」

そう言ったルーティ。

「甘くみない方がいいぜ・・・」

と、男は短剣を取り出し構えた。

「あれがあいつの武器ね・・・」

と、フィールドの外から

「まあ、気楽になロンド」

男をそう呼んだグレイツ。

「あんたロンドっていうのね」

「それがどうしたって言うんだ、女」

そう言ったロンド。

「格好良い名前じゃないわね」

「余計なお世話だ！」

と、短剣を構えルーティに向かっていったロンド。

「行くわよアトワイト」

そう告げ迎え撃つルーティなのであった。

「一気に行くぜ」

次々と短剣で切りつけてくるロンド。

だが、単純な攻撃であったため簡単にかわしていったルーティ。

「何よ、そんな攻撃で私に勝とうっていうの？」

そう言うルーティ。

「これが俺の実力だと思ったら間違いだぜ、女」

そう言った Rond。

「なら、負ける前に実力出したら？」

そう Rond に告げたルーティ。

「そうだな・・・勝たなきゃ賞品も手に入らないしな」

と、短剣を構えなおした Rond。

『気をつけてルーティ、感じが変わったわ』

そうアドバイスする アトワイト。

「ええ・・・」

Rond の動きをじっと見ているルーティ。

と、Rond はその場でフットワークを見せ始めた。

「何・・・」

「クロードさん、あの動きって」

不思議に思うミリア。

「わからないけど・・・」

クロードがそう言う

「格闘を主体とする奴の動きに近いな・・・」

そう呟いたヴァイグ。

「それじゃ第二ラウンド、始めるぜ」

そう言い放つとロンドは駆けだしていったのだった。

「動きが・・・速い・・・」

先ほどとは違う動きで攻めてきたロンド。

「負けるわけにはいかないわよ、アトワイト！」

『ええ』

アトワイトで応戦していくルーティ。

先ほどまでとは違い、攻撃に緩急が加えられルーティは中々反撃に
でれないでいた。

「接近戦じゃ分が悪いわね・・・一度離れて晶術で・・・」

そう考えロンドから離れようとするルーティ。

しかし、今のロンドから逃げ切ることは不可能だった。

「ルーティさん・・・」

心配そうな表情を見せるミリア。

「俺の攻撃に手も足も出ないか・・・なら、この一撃で決めてやるよ」
と、短剣を強く握りしめ渾身の一撃を放ってきたロンドなのであった。

レベル20：闘技場バトル（ルーティ編）（2）

「私を女だからってなめないでよね」

と、アトワイトを上手く使いロンドの攻撃を受け流したルーティ。

「なっ・・・」

受け流されバランスを崩したロンド。

「いただきよ！！」

すぐに攻撃に転じようとしたルーティ。

しかし、ロンドは特に慌てた様子を見せてはいなかった。

「勝つのは俺だぜ」

「えっ・・・」

ロンドは片足を上手く軸にして身体を立て直すと、懷から何かを取り出し右手で構えた。

『離れて！ルーティ！！』

アトワイトの声と同時にその場から飛び退いたルーティ。

「・・・っ・・・」

ルーティから漏れる小さな言葉。

「よくかすり程度ですませられましたね・・・」

そういうロンド。

「何なのよ・・・あんたのその武器・・・」

ロンドの右手が握りしめている武器を見ながら言ったルーティ。

取りだした時は刃がなかった剣だが、今は紫色のエネルギー状の刃が存在していたのだった。

『あの剣・・・』

何かに気づいたアトワイト。

「武器を隠し持っていたなんてね・・・」

そう言うルーティ。

「まあな・・・こいつは特殊でな刃はエネルギーで作られている」

そう告げるロンド。

「見たこと・・・ないわね・・・そんな武器・・・」

そう言うルーティだったが、何やら様子がおかしいようだった。

「クロードさん・・・何だかルーティさんの様子が・・・」

それに気付いたミリア。

「えっ・・・」

「・・・あんだ・・・」

ロンドをにらみつけるルーティ。

「自分の状況・・・理解したみたいだね」

そう言うロンド。

『ルーティ・・・まさか・・・』

「わかっていると思うけど・・・この刃には毒が付加していてね・・・人にもよるけど・・・10分で限界かな」

そう告げたロンド。

「毒って・・・」

驚いているクロード達。

「まずい状況だな・・・早めに治療しないと危険だぜ」

そう言うヴァイグ。

「ルーティさん、すぐに・・・」

クロードがそう言う

「私やめないわよ・・・あいつに勝つんだから」

「強がっても毒は消えないぜ・・・そんな状況で勝てるわけないだろう」

そう告げたロンド。

『ルーティ、すぐに治療の晶術を』

アトワイトが心配してそう言うが

「私に任せてアトワイト・・・絶対勝ってみせるから」

そう言うどふらつきながらもアトワイトを構えて立つルーティなのであった。

「大人しくしていたら可愛いのに・・・」

そう告げたロンド。

「うるさいわね・・・こっちは時間がないのよ・・・行かせてもらわ」

ロンドへ攻撃を仕掛けるルーティ。

しかし、毒の影響で鈍った動きの攻撃はロンドに軽々とかわされていた。

「全然さっきまでと違うね・・・それに君は毒で弱っていく・・・こっちは攻撃しなくても防御に徹していれば勝てるってわけだ」

ルーティの攻撃をかわしながら言ったロンド。

『ルーティ・・・』

心配そうに呟くアトワイト。

「アトワイト・・・」

何かを伝えたルーティ。

「残り五分って所か・・・」

そう告げたヴァイグ。

「ルーティさん・・・このままじゃ・・・」

そう呟くクロード。

と、しばらく攻め続けていたルーティであったが限界がきたのかその場に倒れてしまった。

「まあ、そろそろだったしな」

そう言うロンド。

「私はまだ・・・」

立ち上がろうとするルーティ。

「諦めが悪いな・・・仕方ない・・・君を気絶させて試合を終わらせてやるよ」

ゆっくりとルーティに近づいていくロンド。

だが、次の瞬間水がルーティの周りに出現し始めたのであった。

「何だ・・・この水は・・・」

驚いているロンド。

「終わりはあんだよ、水撃衝弾」

と、周りに出現した水がルーティの前に集まり一つとなると砲撃のようにロンドに放たれた。

「なっ・・・」

いきなりの反撃で対応しきれなかったロンドは、攻撃を受け大きく弾き飛ばされた。

「グウツ・・・おまえ・・・何処に技を使う力を・・・」

ロンドがそう言うスツと立ち上がったルーティ。

「勝利を確信して最後まで私の状態を見ていなかったあんたの負けよ」

そう言いになったルーティ。

「毒はどうなっている・・・もう限界の・・・」

「あれなら治したわよ・・・気付かれないようにね」

アトワイトを見ながらそう言ったルーティ。

「どういう事なんでしょうか」

不思議に思うミリア。

「何でさっきまで私が単純な攻撃しかなかったと思う？簡単な事よ・・・解毒の晶術をあんたに気付かれないように少しずつ自分に発動していたわけ」

「何だと・・・そんなこと・・・」

「まあ、少し前から解毒は完了してたから演技してあんたに隙を作らせたわけ」

「バカな・・・」

と、アトワイトを構えるルーティ。

「あの毒の一撃は本当に危なかったわ・・・だからこれがお礼よ」
集まっていく水の力。

「私とアトワイトの力、晶剣技・アクアスラッシャー」

アトワイトから放たれた水の一撃。

「この俺が・・・」

そしてロンドはルーティの攻撃を受け倒れたのであった。

レベル21：闘技場バトル（クロード編）（1）

『勝者、ルーティ』

その声が闘技場内に響いていった。

「ルーティさん」

戦いを終え戻ってきたルーティを出迎えるクロードとミリア。

「本当に毒は大丈夫なんですか？」

そう尋ねるミリア。

「問題ないわよ・・・まあ、少し体力・・・ないけどね」

そう答えるルーティ。

「中々の戦いだったな」

そう告げるヴァイグ。

「でも、ルーティさんって解毒の技持ってたんですね」

クロードがそう言うと

「私がって言うよりはアトワイトなんだけどね」

そう言ってアトワイトを見るルーティ。

『次は貴方の番よクロード、頑張って』

そうクロードに告げたアトワイト。

「はいっ」

元氣良く返事をしてバトルフィールドに入っていたクロード。

「あれが僕の対戦相手・・・」

同じようにフィールドに入ってきた二人目のフードの男。

『では、二試合目始めてください』

その言葉と共にクロードの戦いが始まっていくのであった。

「よし・・・」

少し気合いを入れ、レイントゥスを構えたクロード。

しかし、フィールドに立ったフードの男はただじっとクロードを見ているだけだった。

「なぜ構えないんだ？」

そう尋ねるクロード。

「お前があまりに弱いからな」

「何だと・・・」

クロードはフードの男を睨みつけた。

「僕はヴァイグさんのために勝つ・・・それより戦うならフードをとつたらどうなんだ」

そう告げたクロード。

「フードを取る必要はないだろう・・・お前は俺より弱い・・・」

そう言いになったフードの男。

「・・・」

「クロードさん大丈夫でしょうか・・・」

ちょっと心配なミリア。

「確かにあいつなんかやばそうなよね」

そう言うルーティ。

「ならお前の実力でフードをとってみせろ」

「お前が何者かは知らないけど・・・絶対に負けない！」

と、クロードはレイントウスのコアに【火】の文字を灯らせてフードの男に向かっていったのだった。

火の力を得たレイントウスで攻撃を仕掛けるクロード。

「ふっ・・・」

と、フードの男は背中に装備していた大剣を鞘から抜くとクロードの攻撃を受け止めた。

「ぐっ・・・」

「パワー不足だな・・・」

フードの男は大剣でクロードを払い飛ばした。

「あいつパワーあるわね」

そう告げるルーティ。

「大剣はパワータイプの武器だから・・・それにしても今回はあいつも強い奴見つけてきたものだな」

ヴァイグはフィールドをはさんだ向こう側にいるグライツを見ながら言った。

「頑張ってください、クロードさん」

試合には参加してないため、応援を頑張るミリア。

「だったら・・・飛空火炎斬!!」

レイントウスにまとわせた火の力を斬撃と共に飛ばしたクロード。

「何も変わってないな」

そう告げるとフードの男は大剣を突き刺して斬撃を破壊した。

「俺にこの程度の攻撃は通じない・・・」

と、大剣を構え向かってきたフードの男。

「クロード！もう一つの力よ！」

そう伝えたルーティ。

「わかった」

と、レイントゥスのコアに映し出されていた文字が【火】から【風】へと変化した。

「何かが変わったか・・・だが、このパワーには無意味！」

力を込め大剣を振り下ろすフードの男。

「やっぱりこの力を使うと身体が軽い」

クロードはいつの間にかフードの男から離れた場所にいた。

「・・・新たな力を手に入れていたか・・・宝具・・・レイントゥス」

クロードを見ながらそう呟いたフードの男なのであった。

レベル21：闘技場バトル（クロード編）（2）

「・・・風の属性に変えたのはいいけど・・・風は火に比べてパワーはない・・・スピードであいつの攻撃をかわすことは出来るけど・・・勝つのは難しいか・・・」

クロードがあれこれ考えていると

「来ないならこちらからいかせてもらおうぞ」

と、大剣を構え駆けてきたフードの男。

「上手くやれるかわからないけど・・・」

作戦を決めたのか応戦するクロード。

「受けて立つつもりか・・・無駄だ！」

思い切り大剣を振り下ろすフードの男。

と、それを右にかわしたクロード。

「甘いな」

フードの男は振り下ろした大剣を真横に降った。

「クロードさん!？」

驚くミリア。

だが、大剣が降られた場所にはクロードはいなかった。

「上か！」

フードの男は上を見た。

クロードは風の力で軽くなった身体を上手く使い、上空に跳んでいった。

「上手く風を使って逃げたのだろうか・・それ以上は逃げられないぞ」

クロードに狙いを定め大剣を構えた。

「チャンスは一度・・決める！」

と、クロードは風の力を後方に放ち急降下していったのだあった。

「風の力を使って突っ込んでるの!？」

驚いているルーティ。

「さて、どうなるかな」

何やら何が起こるか楽しみな様子のヴァイグ。

「例えスピードを上げた攻撃とはいえ俺には通じないぜ」

しっかりと落下してくるクロードに狙いを定めるフードの男。

「頼むレイントウス・・・僕に力を・・・」

と、レイントウスのコアの文字が再び火に変わった。

そして、落下するスピードと重力をも味方にして全ての力をレイントウスに込めたクロード。

そして、その攻撃をフードの男に叩きつけた。

「グッ・・・」

さすがにその一撃は重かったのか、後退させられたフードの男。

「予想以上の力だな・・・だが、俺を後退させるほどしか・・・」

「燃え盛れ！レイントウス！！」

と、刃の部分から吹き出してきた炎。

その炎は瞬く間に刃から放たれ、フードの男を包んでいったのであった。

「あいつのフードが・・・」

そう言うルーティ。

「お前・・・」

すぐにクロードから離れるが、フードはすでに炎により灰と化して

いた。

「!？」

クロードはフードが無くなり姿を見せた男に驚いた。

「フードを取られずに勝つつもりだったが・・・姿を見せてしまったからには仕方がないな・・・クロード」

「お前は・・・漆黒の大剣士・・・ナイト」

そう告げたクロード。

「覚えていてくれたか・・・まあ、そんな事はどうでもいいが・・・」

ナイトがそう言うと

「お前またレイントウスを狙って・・・」

ナイトをにらみつけながら言うクロード。

「そうだ・・・と言いたいが今は試合中だ・・・周りに人がいる前で強奪はよくないしな」

「お前は僕が倒す!!」

と、いきなりナイトに向かっていったクロード。

「クロードさん!？」

「何、一体どうしたのよ」

クロードの変化に驚くミリアとルーティ。

「あれはまずいな・・・」

そう呟いたヴァイグ。

「あの時俺にかなわなかったのが悔しかったのか？お前も少しは強くなったみたいだけどな・・・」

クロードは次々と剣を振るうが、ナイトは軽々とかわしていた。

「俺はこの大会に何の興味もない・・・気まぐれで参加してやったにすぎない・・・」

と、大剣でクロードをなぎ払ったナイト。

「だからすぐに終わらせる」

と、ナイトは大剣を地面に突き刺した。

「言ってなかったけどな・・・俺の大剣も宝具には及ばないが特殊な武器だ」

と、ナイトの大剣が大地のエネルギーを吸っていた。

「まずいわよ、クロード!!」

叫ぶルーティ。

「試合だから死なせはしないさ」

そして、エネルギーが最大まで高まると大剣を引き抜くと同時にクロードに向けて一撃を放った。

「剛裂地閃!!」

強烈な一撃が地をえぐれさせながら、クロードに飛んでいった。

「ううつ・・・」

先ほど弾き飛ばされてから、倒れたままだったクロード。

「あのままだと直撃だぜ」

そう言うヴァイグ。

と、そんな時ミアアがいきなりフィールド内に飛び込んでいったのだった。

「ミアア!？」

「闘技場に参加してない私ができること・・・」

ミアアはクロードの前に立つと大きく氷の防御を発動させた。

そして、ナイトの攻撃は氷の防御とぶつかり大きな爆発を起こさせたのであった。

レベル22：闘技場バトル（ヴァイグ編）（1）

「クロード！ミリア！」

爆発によりフィールドは煙に包まれ、その中にいるはずの二人に対して名前を呼ぶルーティ。

「おいおい・・・まずいなこれは・・・」

そう呟くヴァイグ。

「・・・・・・・・」

グレイツの方はじっとフィールドを見つめていた。

しばらくして煙が無くなると、フィールドの端の方でクロードとミリアが倒れていた。

「決着はついたな・・・」

そう言い残しナイトはフィールドから降りていった。

「勝者！ナイト！」

と、急いで二人の元に駆け寄るルーティとヴァイグ。

「ううっ・・・」

「ちょっとしっかりしなさいよ」

何とか起きあがるクロード。

「ミリア・・・」

ミリアが倒れているのに気付き驚くクロード。

「あんたを守るためにフィールドに飛び込んだのよ。結局防ぎきれなかったみたいだけど・・・」

そういうルーティ。

「とりあえず安静にさせて治療した方がいいな・・・治療、頼んだぜ」
ルーティにそう言うヴァイグ。

「ええ、任せときなさい」

自信もって言うルーティ。

「俺は・・・ここまで頑張ってくれたチームメイトの為に・・・勝つてくるからよ」

そう言うヴァイグはクロードを運び、ルーティはミリアをフィールドの外に運んだ。

すでに、相手チームのグレイツはフィールドにあがっていた。

「・・・」

そしてヴァイグはフィールドに跳び上がったのだった。

「今回の大会は盛り上がりましたね」

そう言うグレイツ。

「今回はお前も癖のある奴を仲間にしたものだな」

「それはヴァイグも同じでしょう・・・あの二人の強さ・・・まだ伸び盛りですからね・・・そして、あの少女の心の強さと行動力にも驚かされました」

グレイツはルーティの治療を受けているミリアを見ながら言った。

「まあ、盛り上がりはここからが本番だからな・・・俺がチャンピオンであるお前を倒すってな」

そう告げるグレイツ。

「いつもとは気迫が違うなヴァイグ・・・仲間に刺激されたか？」

「それもあるけどな・・・俺の目標はこのチャンピオンだからな」

そう言うヴァイグ。

「では、そろそろ始めましょうか・・・両者ともよろしいですか」

そう言う審判。

「では、第三試合開始してください」

その言葉と共に、チームの勝利のためにヴァイグとグレイツがぶつかり合うのである。

「いきなりいかせてもらうぜ」

そう言い拳を構えるヴァイグ。

「あの人の拳・・・力が集まってる・・・」

治療しつつ試合を見ていたルーティがそう言った。

「焦らなくても・・・最初はいつも通り小手調べから始めましょう」

と、手のひらを上に向けたグレイツ。

「来やがるか・・・あいつの魔法戦術・・・」

そう言うヴァイグ。

『対戦相手は術主体みたいね』

そう告げたアトワイト。

「だとしたら相手の懐に入ればヴァイグの勝ちじゃない」

そう考えるルーティ。

「先手必勝か」

「では・・・」

と、グレイツの周囲に小さな魔法陣がいくつか出現した。

「うおーっ!!」

と、体内の気の力を込めて拳から気弾を放ったヴァイグ。

「瞬魔弾」

と、魔法陣から小さな魔力弾が飛んできてヴァイグの攻撃とぶつかり合い相殺させた。

「だめか・・・」

だが、グレイツの攻撃は終わりではなく小さな魔力弾はヴァイグに向かっていった。

「まだまだですね」

グレイツはヴァイグの足下に集中して攻撃しヴァイグを後退させた。

「押されてるわね・・・」

そう呟くルーティ。

「近付かせてくれないな・・・グレイツ」

「魔法主体の場合は普通そうですからね」

そう答えるグレイツ。

「さて・・・どう攻略するかな」

グレイツの動きを見ながらそう呟いたヴァイグであった。

レベル22：闘技場バトル　（ヴァイグ編）（2）

「ヴァイグ・・・急がないとどんどん私のペースになっていくよ」

そう告げたグレイツ。

「わかってるさ！」

そう言った直後、拳に気を溜ながら突入したヴァイグ。

「こっちも行くよ・・・」

再び空中にセットした魔法陣から魔力弾を飛ばして迎撃しようとするグレイツ。

「まだまだ！」

と、ヴァイグは気を溜めた拳で魔力弾を弾き飛ばしながら更に突入してきた。

「完全に一直線な攻撃ね」

少し呆れているルーティ。

「ヴァイグのそう言うところは嫌いじゃないけどね・・・でもそろそろ・・・時間だよ」

と、空中に固定していた魔法陣が少し大きくなっていった。

「まずいな・・またこの展開か・・・」

そう呟くヴァイグ。

「何よ・・あんなタイプの術とか魔法見たことないわよ」

そう言うルーティ。

「これがグレイツのやっかいな魔法能力・・・”デイレイ能力”」

「デイレイ・・遅延能力？」

と、ヴァイグが

「あいつの戦法である魔法陣にはその力がかけられていて時間が経つとデイレイが解除され魔法陣が強化される」

戦いながら説明するヴァイグ。

「さすがに何回も戦っているからばれてますね」

そう告げたグレイツ。

「本当にグレイツが恐ろしくなるのはここからだ」

そう告げたヴァイグなのであった。

「ってことは・・」

このあとの展開を考えるルーティ。

「そろそろ・・・私も攻めさせてもらいます」

そう言うのとグレイツは、自分の両手に魔法陣をつけた。

「自分に・・・」

驚くルーティ。

「来たな・・・あれが・・・」

と、突然接近してきたグレイツ。

距離をとろうとするヴァイグに対して、しっかりと動きをとらえついでくるグレイツ。

「あいつって魔法メインでしょ・・・何であんな動きが・・・」

「魔法力のコントロールです・・・」

と、意識を取り戻したミリアがそう言った。

「ミリア、大丈夫なの？」

「平気・・・です・・・」

起きあがるミリア。

「私と同じ魔法を主力としているからわかるんです・・・グレイツさんののは特殊なタイプですけど・・・その力とコントロール力は高レ

ベルです」

そう告げたミリア。

「手だけじゃないな・・・足にも魔法陣を・・・」

ヴァイグがそう言う

「勝つためには私も努力を惜しみませんよ」

そう言いグレイツは右手をグレイツの懐に潜り込ませた。

「喰らうかよっ」

とっさに逃れるヴァイグだが、もう動きはグレイツが上だった。

「炸裂・・・」

と、ヴァイグの懐で起きた小さな爆発。

それにより後ろに弾き飛ばされたヴァイグ。

そしてそれと同時に、グレイツが空中に固定させていた魔法陣が更なるレベルアップを果たしていたのだった。

「今回は粘りましたね・・・しかし、すでに私の魔法陣は最大クラスになりました・・・これで終わりですね」

そう言うのとどめを刺そうとグレイツがヴァイグに接近した。

「今回も・・・負けかよ」

グレイツの攻撃をかわすヴァイグ。

しかし、これはグレイツの作戦だった。

「終わりですよ」

グレイツの後方にある魔法陣から放たれた攻撃。

それは魔力弾と呼べるものではなくなっていた。

それはまさに”魔力砲”であった。

複数の魔力砲で逃げ道をふさがれたヴァイグ。

そして、グレイツが上空へ跳び上がるとヴァイグの正面から魔力砲が接近していたのであった。

「本当に・・・容赦ないな・・・お前は」

そう言ったヴァイグ。

「私はチャンピオンですからね・・・」

そして、魔力砲はヴァイグに直撃しそのまま後方に大きく弾き飛ばされたのであった。

レベル23：バトル終幕後の騒動

攻撃を終え魔法陣を消したグレイツ。

「さすが・・・だな・・・グレイツ・・・効いたぜ」

かなりのダメージを負いながらも立ち上がったヴァイグ。

「本当に今回は強いね、君は」

そう言うグレイツ。

「どうやら限界か・・・俺の身体も・・・だけどな・・・次はわからないぜ」

ヴァイグがそう言う

「そうかもしれないね・・・」

そしてその後、グレイツの勝利が伝えられた。

「負けちゃいましたね」

そう言うミリア。

「つていうかグレイツのあの戦い方・・・反則なみでしょ」

と、ルーティ。

「それでも・・・二人とも僕たちよりも強い」

いつの間にか目を覚ましていたクロードがそう言った。

「クロードさん、怪我とか大丈夫でしたか？」

ミリアが聞くと

「ごめん、迷惑かけちゃって・・・それと・・・」

「はい、ストップ！お礼ならお宝の方がいいわ・・・私的に」

そう言ったルーティ。

そして今回の試合もグレイツのチームの勝利で終了した。

「大丈夫ですか？」

ヴァイグにそう言うクロード。

「心配にはおよばねえよ・・・」

と、ルーティが

「強がり言わなくていいわよ・・・私が治すから」

そう告げた。

「だったら私が治します・・・ルーティさん戦った上に私達も治してくれましたから」

そう言ったミリア。

「なら、お願いするわ」

あっさりひっこんだルーティ。

その頃、フィールドの中ではグレイツ達が集まっていたのであった。現在フィールドでは勝利チームの表彰みたいなのが行われていた。

「今回も中々良い試合でした。それではこちらが今回の賞金と賞品になります」

グレイツは代表としてそれを受け取った。

「さて、約束通り賞品も賞金も二人に渡すよ・・・好きな方を持っていってくれ」

そう告げたグレイツ。

すると、一試合目でルーティと戦ったロンドが商品である少し変わった指輪を手にとった。

「なら、もらっていくぜ」

「・・・・・・」

それを無言で見ていたナイト。

「ナイトは賞金になるけどいいかな？」

グレイツがそう聞くと

「ああ、構わない」

そう答えたナイト。

賞金と賞品の受け渡しも終わり、解散していったグレイツのチーム。

「んゝ・・・」

グレイツ達の方を見ながら何かを考えているルーティ。

「すまないな・・・俺が負けたせいで・・・」

ミリアの治療を受けているヴァイグがそう言った。

「あの指輪・・・どっかで見たことあるのよね・・・」

そう呟いたルーティ。

「ヴァイグさんの手当が終わったら一度宿に戻りましょう。僕達も次の街に向かう準備が必要だし」

そう告げたクロード。

和やかムードが続くクロード達。

しかし、事態は密かに動いていたのであった。

解散し街の外に出ていたロンド。

「上手くこの指輪を手に入れることに成功したな・・・後はこいつを持って帰れば・・・」

だがロンドはふいに足を止めた。

「!？」

そのロンドの前には一緒にチームで戦ったナイトがいたのであった。

「お前は・・・」

ナイトを見るロンド。

「その指輪・・・何処に持って帰るつもりだ？」

そう言ったナイト。

「何故お前がそんなことを聞く？」

そう言うロンド。

「その指輪はあの伝説の七つの宝具の一つ・エレメントリングス・・・
・そうだろ？」

自信たっぷりに言うナイト。

「知ってたのか・・・だから欲しいのか？」

「宝具自体よりお前の正体を知りたいものだ．．．何故宝具を集めるのか．．誰が集めさせているのかな」

そう言いながら剣を抜くナイト。

「止めておいた方が身のためだぜ．．．俺達の組織はお前が思っているほど甘くない．．手を出せばただではすまない」

そう告げたロンド。

「．．．組織か」

そう呟くナイト。

「それより俺としてはお前のことを買ってるんだぜ．．だから俺達の仲間にならないか？ナイト」

そう言い放ったロンドなのであった。

「お前達の仲間にと．．」

そう言うナイト。

「ああ、あんたの実力ならそれなりに上の地位につけるはずだぜ．．
．どうだ？」

そう聞くロンド。

「得体の知れない組織に俺が入るとでも思っているのか？」

そう告げたナイト。

「悪い話じゃないはずだぜ・・・あんたの狙いも宝具なんだろう？」

「何・・・」

「クロードとか言う奴との会話・・・聞いたからな・・・あんたはクロードの持つ宝具を欲しているんだろ？」

ロンドがそう言う

「お前には関係ない話だ・・・」

「残念だな・・・まあ、俺達の計画も少し時間がかかるからな・・・あんたの気が変わるかもしれないしな」

と、ロンドはナイトに小型の機械を渡した。

「何だ？これは」

「俺達が持っている携帯マップさ・・・この世界の大体の大陸がのっている・・・後で使えばわかるが示してある点は俺達の拠点だ・・・俺達の組織は6つの軍があつてな・・・拠点も6つある」

そう説明するロンド。

「何故自分たちの組織の秘密を話す？俺がこの拠点とやらに攻め入ったらどうする？」

ナイトがそう言う

「攻め入った所でどの拠点も落とせやしないさ・・拠点を任されているそれぞれの軍のボスはあるたよりも強いからな・・まあ、あんたがこっちの仲間になるんならここから一番近い俺達の軍の拠点に来るといいさ・・ボスに上手く話しておくからさ」

そう言う

とロンドは足早にその場から去っていったのであった。

レベル24：強くなるための道

場面は戻ってツヴェルクの宿屋。

「お疲れさまミリア」

「ルーティさんもお疲れさまです」

微笑みそう言うミリア。

「にしても驚きだな・・・氷属性の魔法で治癒とは・・・俺もツヴェルクに結構滞在しているが初めてだぜ」

そう言うヴァイグ。

「私の所の家系はみんな氷魔法の使い手でしたから」

そう言ったミリア。

「じゃああのお兄さんも？」

クロードが聞くと頷いたミリア。

「まあ、回復も済んだことだし・・・これからどうするの？クロード」

尋ねるルーティ。

「とりあえずはツヴェルクを出て次の街に向かう予定なんだけど・・・」

」

そう言うクロード。

「やっぱり行くのか」

そう告げたヴァイグ。

「僕にはやらないといけないことがあるから・・・それに・・・」

ナイトの事を思い出すクロード。

「でも、次は何処に向かうんですか？」

ミリアが尋ねると

「地図だと・・・こっちね・・・海に面した街・・・アクアス・・・」

地図をなぞりながら言ったルーティ。

「・・・」

そんな話をするクロード達を無言で見ていたヴァイグ。

そしてヴァイグはある決断をするのであった。

「クロード・・・」

突然クロードの名を呼んだヴァイグ。

「どうしたんですか？ヴァイグさん」

不思議に思いながらそう聞いたクロード。

「無理なら断ったってかまわない・・・だが、許されるなら・・・俺もクロード達の旅に同行したい」

そう告げたヴァイグ。

「!？」

ヴァイグの発言にクロードはもとより、ミリアやルーティも驚いていた。

「でもヴァイグさんは・・・闘技場で・・・」

クロードがそう言うと

「まだまだ修行が足りないみたいだから・・・外に出て自分の力を高めたい・・・そして、この旅が終わったら改めてあいつに挑戦するさ」

そう告げたヴァイグ。

「でも、いつ旅が終わるかわからないし・・・」

「それならそれで構わないさ・・・だから頼む」

真剣な表情でクロードに頼むヴァイグ。

「ルーティさん・・・ミリア・・・」

後ろの二人に聞くクロード。

「別にいいんじゃない？彼の強さは証明済みだし」

そう言うルーティ。

「私もいいですよ。仲間が多いのはいいですから」

そう告げたミリア。

「すまないな・・・これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそヴァイグさん」

そう言ってクロードとヴァイグは握手をかわすのであった。

ヴァイグを仲間に加えることを決めたクロード達。

そして、ヴァイグは出発の準備があるという事で一度クロード達と別れた。

街の入り口で合流することになったので、クロード達は一足先に街の入り口に向かった。

「これから四人での旅ですね」

仲間が増えて嬉しいのか笑顔のミリア。

「とりあえずはアクアスまで向かうんだし・・船で次の大陸まで移動することになると思うから・・資金は大事にね」

そうクロード達に告げるルーティ。

「待たせたな」

少ない荷物を持って登場したヴァイグ。

「もういいんですか？」

クロードが尋ねると

「ああ・・もういいぜ」

そう答えたヴァイグ。

「グレイツさんにご挨拶は・・」

ミリアが聞くと

「別にいいさ・・俺が戻ってきた時に・・強くなった俺を見せられればな」

そう言うヴァイグ。

と、クロード達は何かに気付いた。

「それはいいんだけどさ・・向こうはそうじゃないみたいよ」

そう告げたルーティ。

そして、ヴァイグが振り返るとそこにはグレイツが立っていたのであった。

「グレイツ・・・何故・・・」

「君とはライバルだからね・・・君が強くなるために旅に出るなら僕は見送るよ」

そう言ったグレイツ。

「別にいらないんだけどな・・・」

ヴァイグがそう言う

「でも、強くなるのは僕も同じだ・・・君が戻ってきた時改めて・・・」

「ああ・・・お前に勝ってやるよ」

「楽しみだ」

笑みを見せるグレイツ。

「じゃ、行こうぜ」

そう言うヴァイグ。

「クロード君・・・」

「えっ・・・」

グレイツに呼び止められ振り向くクロード。

「君の剣はまだまだ伸びる余地がある・・・世界は広い・・・世界を回り力をつけたその時は・・・僕と戦ってほしい」

そう告げたグレイツ。

「わかりました・・・でも、最初にヴァイグさんと戦ってあげてくださいね」

クロードがそう言うのとグレイツは笑顔で頷いた。

「おっとそうだ・・・グレイツ・・・俺達が戻ってくるまでチャンピオンでいやがれよ」

ヴァイグにそう言われ

「当然だ・・・君たちと戦うまではこの座を守り続けるよ」

グレイツはそう告げるとヴァイグと握手をした。

「君たちの旅の無事を祈っている」

「ありがとうございます。グレイツさん」

そして、クロード達はグレイツに見送られツヴェルクの街をあとにするのであった。

レベル25：動き始める組織

ツヴェルクの街を出て海に面した街・アクアスに向かうクロード一行。

「そういえばさ・・クロードは海底神殿に行きたいんじゃない？」

そう告げたルーティ。

「レイントゥスを強化できる宝玉が眠るかもしれない場所・・でも、後でいいよ」

そう言ったクロード。

「どう世界中を回るんだろ？なら、近くまで来たらその海底神殿とやらの寄ればいいんだよなクロード」

「はい」

ヴァイグがそう言うとなんか返事したクロード。

「そうよ！」

突然大きな声を出したルーティ。

「ど、どうしたんですか？」

驚きながらそう聞くミリア。

「何ですぐに思い出せなかったんだろ・・・もったいないことした」
なにやら落ち込んでいる様子のルーティ。

「一体何がどうしたんだ？」

ヴァイグも訳を知りたいらしく尋ねた。

「相手チームに持っていかれた賞品よ賞品」

ルーティに言われ思い出してみるクロード達。

「賞品って確か・・・」

クロードがそう言う

「今回はあの指輪だったな」

そう告げたヴァイグ。

「だからその指輪・・・レイントゥスと同じ七つの宝具の一つなのよ！」

そう強く言ったルーティなのであった。

「宝具の一つ!？」

驚くクロード。

「じゃあ、とっても大切なものなんですね」

そう言うミリア。

「それを訳もわからない連中に・・・」

そう呟いたルーティ。

「確かにグレイツも俺と同じで賞品や賞金は受け取らないからな・
・チームメイトのどっかに指輪はわたっただろうな」

そう告げたヴァイグ。

「でも、例え大切なものでも今の僕たちには必要ないですから」

そう言うクロード。

「でも、価値のあるお宝・・・」

結構悔しがっている様子のルーティ。

「一つぐらいいいんじゃないか？宝具は七つあるんだろ？残りの
五つを集めりゃ・・・」

ヴァイグがそう言う

「そうね・・・終わった事は仕方ないわね・・・こうなったら・・・」

今度はやる気を見せ燃えているルーティ。

会話しながら楽しくアクアスへ向かっているクロード一行。

だが、その頃宝具の一つである指輪を持っているロンドはアクアスから少し離れた山の中にいた。

「ようやくここまで戻ってきたな・・・しかし、山の中に拠点があるから戻るのが大変だ」

そう言うロンド。

「だが、七つの宝具の一つ・エレメントリングスを持ち帰ることが出来た・・・これでウルフェン様もお喜びになるな」

そう言いながら山の中を歩いているロンド。

「にしても、あのナイトとか言う奴・・・仲間に来ればかなりよかったんだがな・・・」

と、拠点らしい入り口の前に辿り着いたロンド。

「ようやく帰還か？ロンドよ」

獣系のモンスター達がロンドを出迎えた。

「ウルフェン様は？」

「奥の間だ・・・報告があるなら急げよ」

「わかってるさ」

と、ロンドは急いで奥の間に駆けていくのであった。

そして、奥の間にやってきたロンド。

「ロンドか・・・」

「はい、ウルフェン様」

そう告げたロンド。

「その様子だと作戦は成功したらしいな・・・」

「はい、この通り・・・七つの宝具の一つ・エレメントリングスです」

そう言いウルフェンにエレメントリングスを見せるロンド。

「それか・・・しかし、上手く手に入れてきたものだな」

「少々手違いはありましたが・・・成功しましたからね」

そう告げるロンド。

「それはお前がもっている・・・俺がそんな指輪を持っていたても似合わないからな」

そう告げたウルフェン。

「よろしいのですか？」

「宝具は七つ揃って真の力を発揮するらしいからな・・・必要になっ

た時に出せばいい」

そう言ったウルフェン。

「わかりました・・・では、この宝具は大切に保管しておきます」

「それとは別にもう一つ・・・近くにあったらしいな・・・剣の宝具が」

そう告げたウルフェン。

「はい・・・しかし、今回はこの指輪の取得が優先でしたので・・・それに、持っているのはまだ弱い人間です」

「人間か・・・俺にかかれば問題はないな・・・判った・・・下がっていないぞ」

「はっ」

そして、奥の間から出るロンド。

「とりあえず・・・どこかでこいつの力を試してみたいものだがな・・・」

そう言い、ロンドは拠点の外へと向かうのであった。

その頃、クロード一行はアクアスへ向けて更に進んでいた。

「潮の香りですね」

そう告げるミリア。

「・・・見えてきたんじゃない」

ルーティがそう言うとき少し先に大きな港があるアクアスが見えてきたのであった。

レベル26：アクアス・船乗りの想い（1）

「ここが・・・アクアスカ」

アクアスの入り口に立ちそう告げるクロード。

「無事アクアスにいたんですけどこれからどうするんですか？」

尋ねるミリア。

「まずは・・・宿を見つけて・・・それから次の行き先を決めてそこに向かう船のチケット買えばオッケーよ」

そう言うルーティ。

「宿ならここからも見えるな・・・すぐ近くだぜ」

そう告げたヴァイグ。

「チケットの手配は私に任せなさい。出来る限り値切ってあげるわよ」

そう言うルーティ。

「とりあえず宿に向かいましょう」

と、いうことでアクアスの宿屋に向かうクロード達。

宿に着いたメンバーは、一室にて地図を広げ次の目的地について話

し合っていた。

「どこに向かうにしてもどの大陸に向かうにもこの先の海は広いから時間かかるわね・・・」

そう言うルーティ。

「まあ、ゆったりと船旅を楽しむのもいいんじゃないのか？」

そう告げるヴァイグ。

「行き先はルーティさんにお任せします」

「そうだね・・・」

「・・・まっ、別にいいわよ。じゃ、行ってくるわね」

そう言うルーティは港へと駆け出していったのだった。

「とりあえず俺達はどうする？街でも見て回るか？」

そう聞くヴァイグ。

「ルーティさんには船の方をお願いします・・・僕達は買出しの方をやりましょう」

そう言う訳でクロードたち三人も宿から外に出ていった。

その頃、ルーティはというと街の景色を見ながら港に到着していた。

「さてと・・・」

近くの建物に入り近くの人に声をかけたルーティ。

だがそこで、意外な事実を知るのであった。

「えっ、船さっき出たの!？」

驚いた表情でそう告げるルーティ。

「一足遅かったね・・・ついさっきだったよ・・・」

そう言う港の男。

「じゃあ、次の船はいつ？」

「そうだな・・・すぐには出ないな・・・数日後か・・・」

そう言う男。

「嘘でしょ・・・」

少々困った表情を見せるルーティ。

「もしかして急ぎのようだったのかい？」

「え、ええ・・・」

そう答えるルーティ。

「そうだな・・すぐにでも海を渡りたいなら個人で船を持っている奴に頼むしかないだろうな」

「個人ね・・」

「そこは交渉次第だからな・・まあ、頑張りなよ」

そう言われ一度建物を出たルーティ。

「ここって個人船の出入りも多いみたいね・・って、呑気なこと言っている場合じゃないわ。船がありませんでした・・ってクロード達にいけないわよ」

と、言うことで港の奥へと駆け出していくルーティなのであった。

「港を一応全て見て回ったけど・・この辺りが個人の船を泊める場所みたいね」

そう言うルーティ。

「とはいっても・・・そう簡単に個人の船に乘せてもらえるとは思えないわね・・定期船とかならお金さえあればチケット買って乗れるんだし・・」

そう呟くルーティ。

「おい、お前・・」

と、後ろから声をかけられ振り向くルーティ。

「な、何・・・」

「何じゃないだろ・・・何人の船の前でぶつぶつ言ってるんだ？」

そう言った青年。

「これ・・・あんたの船だったのね・・・まあ、丁度いいわね・・・私はルーティ・・・あんたは？」

「・・・何で名乗る必要が・・・」

「こっちは名乗ったわ・・・で？」

勢いで押していくルーティ。

「ステイ・・・ステイ・ハワード」

そう名乗るステイ。

「・・・折り入って頼みがあるのよ・・・」

「いきなりかよ・・・」

とはいえ相手が女の子であるため、あまり手荒に追い返すことも出来ずステイはルーティの話を聞くことにしたのであった。

ステイの自宅に招かれたルーティ。

「あんた独りで住んでるわけ？にしては広いわね」

そう言うルーティ。

「俺の家じゃないよ・・・俺達のだ・・・俺が今乗ってる船もな」

そう説明するステイ。

「誰かと一緒にやってたわけね・・・で、別の人って・・・」

「今はこの街にはいない・・・遠い場所にいる」

そう言うステイ。

「そう・・・」

「で、一応話を聞いたわけだが・・・お前たちのために船を出す気はない」

そう言い放ったステイ。

「何だよ！私達は・・・」

「何の目的があるかまでは聞かないが・・・俺はもう・・・」

そう言うステイ。

「せっかくここまで来たのに・・・こうなったらミリアに協力してもらって・・・」

そう呟くルーティ。

だが、その発言を聞いたステイが振り返った。

「今なんていった？この街に王族の奴が来ているのか？」

「王族って・ミリアのこと？知ってるの？」

そう聞くルーティ。

「ここは大きな港町だ・時折他の国のお偉いさんたちがやってきたりするからな・そこでそのミリアって言う姫の名前も聞いたことがある」

そう言うステイ。

「でも、それがどうしたのよ・」

「・・・少し興味が出た・・・お前の仲間達に会わせてくれないか？」

そうルーティに告げたステイなのであった。

そう言う話になりルーティはステイと共に宿屋へと向かっていた。

それと同じ頃買い物を終えたクロードたちもまた宿屋に戻ってきていた。

「後はルーティさんが上手くやってくれれば・・・」

そう言うクロード。

「みんな？いる？」

と、そのルーティの声がして振り返るクロード。

「ん？誰だ」

ルーティの後ろにいるステイに気付くヴァイグ。

「なるほど・・・君がミリア姫ですね」

「えっ、どうして私のこと・・・」

いきなりそういわれ驚いているミリア。

「時々この街にも王族の方が来られますから・・・まだ幼かった貴方も一度ここに来ていたんです」

そう言うステイ。

「そうだったんだ・・・」

そう言うクロード。

「ちょっと会ってみたいって言うから連れてきたのよ・・・あつ、この人はステイ。個人で船を持っている人よ」

ステイの事を紹介するルーティ。

「ルーティさん、チケットは買わなかったの？」

「間に合わなかったのよ！で、会ってみてどうなのよ・・・」

ステイに尋ねるルーティ。

「何で王族の姫が彼らと行動しているのかはわからないけど・・・あいつならお前たちを船に乗せただろうからな」

「あいつ？」

「ステイの船乗り仲間みたいなものよ・・・今はこの街にいないんだけどね」

そう説明するルーティ。

「明日の朝・・・俺の船の所に来いよ・・・出発の準備は整えておく・・・言っておくがこれ一度だけだからな・・・俺はあいつと違うからな」

そう言うステイ。

「ありがとうございます、ステイさん」

そんなステイに笑顔でお礼を言うミリアなのであった。

レベル26：アクアス・船乗りの想い（2）

そんな訳でステイは港に戻っていき、クロードたちは明日の準備を始めていた。

「幸先いい旅だな・・・俺にとっては」

そう言うヴァイグ。

「ルーティさんのおかげですよ。ステイさんと出会ったから」

そう言うクロード。

「偶然でしょ・・・たまたま私があの場所に立って色々考えていただけだから・・・」

そう告げるルーティ。

「買出しは私たちで済ませましたからすぐに出発できますよ」

そう言ったミリア。

「あっ、そうだ・・・」

「？」

ルーティが突然そう言ったので不思議そうな表情でルーティを見るクロードたち。

「定期船と違ってステイの個人船だから行き先決めとかないといけないわね・・・」

そう言ったルーティ。

「そう言うことなら明日ステイと合流したときでいいんじゃないのか？ 船乗りならここからの行く先も知ってるだろうし」

「そうですね・・・」

「まあ、確かにそうね・・・じゃあそうしましょ」

と、言うことに決定し何とか準備を終えたクロードたち。

そして、時は過ぎ翌日の朝を迎えるのであった。

「これが・・・ステイさんの船・・・」

直接見てみて驚いているクロード。

「個人船にしては結構立派じゃねえか」

そう言うヴァイグ。

「こっちの準備は出来ているよ・・・行き先等については中で話そうか」

そう告げるステイ。

船に乗り、ステイの案内で船室に入るクロード達。

「ステイ・・・ここから一番近い大陸に向かってもらえる？」

そう言うルーティ。

「どこに向かうのも構わない・・・たった一回の頼みだからな」

そう言うステイ。

「すぐ出発するんですか？」

ミリアが尋ねると頷いたステイ。

「・・・ただ・・・一つだけ言っておくことがある・・・」

「何ですか？」

そう聞くクロード。

「この辺りの海には凶暴なモンスターが住んでいる・・・たまに運の悪い船が沈められた事もある・・・この船も安全なわけじゃないって事だ」

そう言ったステイ。

「モンスターがでて俺達なら問題ないぜ・・・なあ、クロード」

そう言うヴァイグ。

「絶対大丈夫とはいえないけど・・・モンスターが出てこの船は僕

「たちが守ります・・・せつかく船を出してもらったんですから」

そう真剣な表情でステイに言うクロードなのであった。

「それじゃ出発するぜ・・・」

そう言い船を動かすステイ。

「少しワクワクしますね・・・」

そう言うミリア。

「・・・それにしても・・・何でミリア姫が旅をしているのか・・・本当に謎だな・・・」

そう言うステイ。

「私は外の世界を見て回りたいかったから・・・危険なこともあるけど・・・クロードさんたちと一緒にだから・・・」

そう告げるミリア。

「仲間か・・・」

「貴方にも仲間はいるんでしょう？今この街にはいないけど」

そう言うルーティ。

「ああ・・・大切な仲間・・・いや・・・パートナーみたいな存在だったよ・・・彼は・・・」

そう言うステイ。

「パートナーか・・・闘技場の試合じゃ毎回チームメイトを変えていたからあまりよく判らないな・・・」

そう告げるヴァイグ。

「私もクロードたちと出会うまでは一人だったんだけどね・・・」

そう言うルーティ。

「・・・お前たちは幸せだな・・・ずっとそうやって仲間と共に過ごせるのだから・・・」

そう静かに告げたステイ。

「ステイさん・・・」

そんなステイの言葉はクロードだけに届いていたのだった。

しばらくゆったりとした船旅を楽しんでいるクロードたち。

『このままなにも無ければいいけれど・・・』

そう言うルーティの持つ剣・アトワイト。

「まあ、モンスターが出てても今はヴァイグも加わってるし何とかなるでしょ」

そう言うルーティ。

と、その時ステイが何かの異変に気付いた。

「船の速度が・・遅くなっている・・」

「船の速度が？」

舵を取っているステイの側によるクロード。

「・・・この感じ・・・まさか・・・」

そして、次の瞬間船の前に突如として大きなタコのモンスターが海中から姿を現したのだった。

「大きなモンスターです・・・」

驚いているミリア。

「また・・・現れたのか・・・オクトス・・・」

「オクトス・・・って、見ている場合じゃない。みんな！」

クロードは仲間達に声をかけ一足先に表に出て行った。

「ステイさんは舵の方お願いしますね」

そう言い外に出るミリア。

「遅れるんじゃないわよ、ヴァイグ」

「おうよ」

それに続くルーティとヴァイグ。

ステイはただそんなクロード達を見送るしか出来ないのであった。

クロード・ミリアに続き表に出たルーティとヴァイグ。

「結構でかいモンスターだな・・陸にはこんなのいなかったぜ」

そう言うヴァイグ。

「海底とかに潜んで成長していたんでしょ・・それより・・ミリア
！」

「はい！」

ルーティに呼ばれ返事をするミリア。

「連携で行くわよ・・アトワイト！」

『ええ、みんなの力をあわせて・・』

そう言うアトワイト。

「ここは海の水を利用して・・」

水を操る晶術によりオクトスの周辺に大雨を降らせるルーティ。

「凍てつく力よ・・・」

そして、そこにミリアの氷の魔法が放たれ海水の雨は氷の雨となり、更にオクトス自体も凍らせていった。

「二人ともやるじゃねえか」

そう言うヴァイグ。

そして、船室で外の様子を見ていたステイ。

「ダメだ・・・そのやり方じゃ・・・あいつは倒せない・・・」

そう呟くステイ。

「ルーティさん、ミリア！離れて！」

突然そう叫ぶクロード。

と、次の瞬間オクトスは自ら氷を碎き動き始めたのだった。

レベル26：アクアス・船乗りの想い（3）

「凍らせたのに・・・また動き出して・・・」

そう言うルーティ。

「海にいるモンスターだから水や氷の攻撃に対して耐性があるんじゃない・・・」

そう告げるミリア。

「だとすれば・・・俺達の出番だな・・・クロード」

そう言うヴァイグ。

「うん・・・だけど僕の持つレイントウスの中にある属性の一つ【火】はあいつには通じないと思う・・・だから・・・」

と、レイントウスのコアに【風】の文字が浮かび上がった。

「そーいや気になったんだが・・・あいつ足が一本欠けてるぜ・・・」

いきなりそう言ったヴァイグ。

「本当ね・・・斬られて失ったみたいね・・・って、そんな事気にして
いる場合じゃないでしょ」

そう言うルーティ。

「多分前にこいつが襲ってきたときに誰かが追い払ったんだと思う・」

そう考えるクロード。

と、その長い足を伸ばして攻撃してきたオクトス。

「みんなあいつの足に捕まるな！」

そう叫ぶクロード。

伸ばしてきた足をかわすクロード達。

「旋風斬！」

「うおーっ！」

伸ばしてきた足に攻撃を加えるクロードとヴァイグ。

だが、その攻撃は効果的なものではなく大きなダメージは与えられなかった。

「・・・ダメなんだ・・・そいつには弱点となる攻撃を当てない限り大きなダメージは与えられない・・・あの時のように・・・」

外の戦いを見ながらそう呟くステイであった。

「おいおい・・・俺達の攻撃もあまり効いてないみたいだぜ・・・」

そう言うヴァイグ。

「私とミリアの術も大して効果がないし・・・どうやってたおせばいいのよ・・・」

「前にオクトスを追い払った方法がわかれば・・・」

クロードがそう言うが

「でも、方法がわかっててもそれと同じことが私たちに出来るかどうか・・・」

そう言うミリア。

「つて、色々言っても意味がないわ！この船を守るんだから」

そう言うルーティ。

「ヴァイグさん・・・僕たちが頑張らないと・・・後ろの二人に負担をかけるわけにはいきませんから」

「だな・・・俺もチャンピオンに挑み続けたえず修行を続けてきたんだ・・・あんなモンスターごときにやられてる場合じゃないぜ」

そう言うヴァイグ。

そして、外の様子を見ていたステイは船室の更に奥の部屋に入っていた。

「・・・」

無言で奥の部屋の壁を眺めるステイ。

その壁には、二本の太刀が飾られていた。

「こう言うとき・・・お前がいてくれれば・・・また切り抜けられたんだろうな・・・アーク・・・」

壁に飾られている二本の太刀。

一本は緑色のもう一本には黄色の装飾が施されていた。

「・・・だけど俺には・・・」

太刀を眺めながらそう呟くステイなのであった。

（数年前）

「よう！ステイ！今日も頑張っていこうぜ」

そうステイに話しかけてきた一人の青年。

「相変わらず元気だな、アークは」

そう言うステイ。

「お前との船旅も結構長くなるけどここまでやってこれたからな」

そう告げるアーク。

「今までモンスターと何度も戦ってきたけど・・・この太刀のおかげ」

で切り抜けられましたからね」

背中に装備している太刀を見ながら言うステイ。

「そうだな・・・二人で船旅の途中で手に入れたこの太刀・・・ステイの風神の太刀、そして俺の雷神の太刀」

そう言うアーク。

「それじゃ出発しましょうか・・・アークは陸より海のほうが元気みたいですね」

そんな感じで今日もいつもと同じように海へと出て行ったステイとアーク。

今日は天気もよく海が荒れる感じはどこにもなかった。

船旅に慣れている二人にとって何の問題もない旅になるはずだったが、この旅が二人での最後の旅になるとはステイもアークも思っていないのであった。

いつものように気分よく船旅をやっていくステイとアーク。

「にしても・・・どうして風神の太刀を選んだんだ？ステイ」

「えっ・・・」

「船旅を続ける俺達にとってほとんどが水属性のモンスターを相手にする・・・それなら雷属性の雷神の太刀の方が有利なのになさ」

そう言うアーク。

「俺には攻撃的な力は似合わないからさ・・静かな力・・風の方が似合ってる」

そう告げるステイ。

「そうか・・」

そんな感じで船は順調に進んでいた。

だが、そこで大変な事態が起こるのであった。

「船のスピードが落ちている・・」

それに気付いたアークが外を見た。

「この辺りの海・・確かさっきの街で少し話を聞いたことがある・・この辺りの海には他の海にはいない強力なモンスターがいるって・・」

そう告げるステイ。

「・・だが、いくら強力なモンスターといえどもこっちは雷神の太刀がある・・ステイ！」

「わかってる・・アークとのコンビネーションを見せてやろうぜ」

二人はそれぞれ太刀を鞘から抜き表に出た。

それと同時に海中から巨大なタコのモンスター・オクトスが現れたのであった。

レベル26：アクアス・船乗りの想い（4）

「こいつが噂になっている海の魔物・・・」

そう告げるステイ。

「たといえ強力なモンスターだろうと・・・行くぜ！」

雷神の太刀を構えオクトスに向かっていくアーク。

しかし、黙って攻撃を受けるオクトスではなくその長い足を伸ばしてアークに攻撃を仕掛けてきた。

「痺れてみるか？」

雷神の太刀を振るい電撃の余波をオクトスの足に放つアーク。

と、相性の不利を悟ったのか足を引っ込めたオクトス。

「ステイ！一気に畳み掛けるぜ」

「はい！」

風神の太刀を構えアークに続きオクトスに向かっていくステイ。

オクトスの中心を狙っていくアークに対して、ステイは風の力を上手く使い多方向から攻めてくるオクトスの足を食い止めていた。

「よし、この調子で行けばこの海の魔物も撃退できるな」

そう言うアーク。

と、その時ステイの頭上からオクトスの足が襲い掛かってきた。

「風神の太刀！」

風神の太刀から吹き荒れる風が防御の役割をして、弾き飛ばされながらも何とかダメージを受けずにすんだステイ。

だが、その直後アークの死角からオクトスの足がアークに向かって伸びていたのだった。

「アーク！」

叫ぶステイ。

「なにっ・・・」

そして、次の瞬間アークはオクトスの足の一本に捕らえられてしまったのであった。

「アーク！！！」

叫ぶステイ。

「俺を捕まえた所で・・・こっちは・・・」

と、ここで気付いたアーク。

先程捕らえられた時にアークは雷神の太刀を落としてしまっていたのだった。

「クソッ・・・下手やってしまったな・・・」

そう呟くアーク。

「アーク！」

何とか助けに向かおうとするステイ。

だが、風神の太刀の力だけではオクトスの足の攻撃を防ぐだけで助け出すのは困難になっていた。

「ステイ！俺の雷神の太刀を使い！」

そう大きな声で告げたアーク。

「でも・・・俺には・・・この攻撃的な太刀は使いこなせない・・・」

そう言うステイ。

「・・・止めをさせなくてもいい・・・こいつが海上に二度と現れないように強力な一撃を思いっきり与えるんだ」

「でも、雷神の太刀で攻撃したらアークまで雷神の太刀の電撃を・・・」

そう告げるステイ。

「今はそれしかない・・・俺は大丈夫だ！だから・・・この船を守れ！この船は俺達にとって大事な船だろ！」

そう言うアーク。

「船は大事だけど・・・一番大事なのは仲間の命だ」

そう言うステイ。

「・・・このままじゃ俺もお前も・・・この船の命も消える・・・そうなたったら意味がないんだ！頼むステイ！」

そのアークの言葉に悩むステイなのであった。

「グッ・・・急げ！ステイ！」

オクトスの足に締め付けられ苦しみながら叫ぶアーク。

「アーク・・・お前の心・・・これからずっと俺と共にある・・・そうだよな・・・」

「ああ・・・お前がその雷神の太刀を持ち続ける限り俺の心はお前と共にある・・・行け！ステイ！」

アークのその言葉と共に風神の太刀を構え駆け出したステイ。

当然のごとくステイに向けてオクトスの足が伸びてきた。

「風神の太刀！」

風神の太刀に思いを込め、天高く放り投げた。

そして、風神の太刀が船の床に突き刺さると同時に太刀から風が吹き放たれオクトスの足を食い止めた。

その隙に、アークが落とした雷神の太刀を拾いオクトスに向かっていくステイ。

「アーク・・・お前の思いと共にこの一撃を放つ・・・雷崩裂覇」

雷神の太刀から放たれる最大の一撃。

その一撃はオクトスに真っ直ぐ向かい、そのままオクトスに直撃した。

「グウツ・・・これが雷神の太刀の・・・威力か・・・痺れるな・・・」

オクトスと共に雷撃を受けたアーク。

「アーク・・・」

と、先程の雷崩裂覇の攻撃によりアークを捕らえていた足が切れ海へと落下していった。

「アーク！」

「お前は・・・この船と共に・・・生きろ・・・ステイ・・・」

そう言い残し、海へと沈んでいくアーク。

そして、オクトスもまた次の攻撃を受けるのを嫌ってかこの船から離れ海の中へと姿を消していったのであった。

その後、ステイは港に戻り港の者達と共にアークの搜索をやったのだがアークを見つけることは出来なかったのであった。

くそして、現在く

「あれ以来・・・風神の太刀と雷神の太刀はここ・・・船の奥の部屋にずっと置いてある・・・使わないように・・・だけど・・・」

外で戦っているクロード達の事を考えるステイ。

「俺達の船にまた現れたオクトス・・・そして、この船を守るために戦ってくれているクロードたち・・・あの時はアークを犠牲にしてしまった・・・だけど今度は・・・」

と、壁にかかっている風神の太刀と雷神の太刀を手にするステイ。

「アーク・・・お前の魂の宿った雷神の太刀・・・その封印を今解く」

ステイは二つの太刀をクロスさせるように背中に装備した。

その頃、外では・・・。

「うっ・・・」

オクトスの足の一撃を受け弾き飛ばされたクロード。

「クロードさん！」

振り返って助けようとするミリア。

だが、隙を見せたミリアを狙って足を伸ばしてきたオクトス。

「ミリア、逃げなさい！」

ルーティが叫びオクトスの攻撃に気付くミリア。

だが、その時後方から一直線に電撃が一閃飛んできてミリアを狙っていたオクトスの足に命中した。

「えっ・・・」

驚くミリア。

それはルーティやヴァイグも同じだった。

「クロード・・・大丈夫かい」

先程弾き飛ばされたクロードにそう話しかけるステイ。

「ステイさん・・・その背中のと手に持ってるの・・・」

「決断が遅くなってすまなかった・・・だけど今は戦える・・・」

と、右手に雷神の太刀を握った状態でステイは新たに左に風神の太刀を手にとったのであった。

レベル26：アクアス・船乗りの想い(5)

「ステイさんが・・・二本の武器を」

驚いているクロード。

「とりあえずは俺に任せてくれないか・・・クロード・・・この件が終わったら君たちに昔の事を話したい・・・君達は今ここでこの船のために戦ってくれたのだから・・・」

そう言うステイ。

「当たり前でしょ。こんな所で海に沈められるなんてまっぴらだからよ」

そう言うルーティ。

「でも、あのモンスター相手に一人じゃ・・・」

そう告げるミリア。

「大丈夫・・・あいつと戦うのは二度目だから・・・それに今は・・・」

風神の太刀と雷神の太刀を見るステイ。

と、先程のステイの攻撃を受けて本気になったのか全ての足を伸ばして船にいるメンバー全員に攻撃を仕掛けてきたオクトス。

「みんな！下がって！」

ステイの言葉と同時に動いていたヴァイグは、片腕ずつでルーティとミリアを抱えるとクロードがいる後方に移動した。

「つて、いきなり何するのよ！やるなら言ってからにきなさいよね」
少し怒っているルーティ。

「あの時受けたダメージは残っているみたいだな・・・オクトス・・・なら、今度はもう二本・・・お前の足を落としてやる」

と、雷神の太刀を大きく構えるステイ。

それを察したのかオクトスはステイの側面から攻撃をしようと足を動かした。

「無駄だよ・・・」

オクトスの行動を読んでいるかのように、風神の太刀により起きた風でオクトスの足の動きを遅くさせていった。

「とりあえずは・・・強烈な一撃だ・・・」

そして、オクトスは正面から雷神の太刀の電撃をまともに受けたのであった。

「やった・・・」

そう呟くクロード。

「いや、まだだ・・・こいつはそう簡単には倒れない・・・」

と、激しく動き始めるオクトスの足。

「何よあいつ・・・ここからが本気だっていうの？」

そう思うルーティ。

「次でお前を再び海に沈めてやる・・・風神の太刀！」

と、風神の太刀から生み出された風がステイを包み込んでいった。

「今度はなにやるんだ？」

そう告げるヴァイグ。

「私達にも何かお手伝いできないでしょうか・・・」

そう言うミリア。

「少しだけならオクトスの動きを封じられるはずよ・・・ミリアの水属性魔法なら・・・その少しの時間があればステイならあいつを・・・」

そう思うルーティ。

「わかりました・・・やってみます・・・」

自分の前に氷の魔力を集めていくミリア。

「そう言うことなら・・・僕にも出来ることが・・・ある・・・」

そう言いながらレイントウスを構えるクロード。

「さっきのダメージ・・・大丈夫なのか？」

ヴァイグが尋ねると頷くクロード。

「最大の氷属性魔力を一点に集めます・・・」

「うん、それをレイントウスの風の力を推進力にオクトスにぶつける」

そして、ルーティとヴァイグが見守る中クロードとミリアの連携による氷の魔力弾がオクトスに向けて放たれたのであった。

身体の大きなオクトスはこの魔力弾をよけることなく受けてしまった。

その直後、身体中に広がっていく凍結効果。

「やった・・・」

喜ぶミリア。

「でも、それもそんなには持たないわ。ステイ！」

そう言うルーティ。

「援護ありがとう・・・これで確実に・・・」

雷神の太刀をオクトスに向けるステイ。

「二本の太刀を俺が持つようになって・・・たった一つだけ・・・二つの力を一つにして技を生み出した・・・それ以来二つの太刀は奥に封印していたけど・・・」

そう言うステイ。

「ステイさん・・・」

「その技を今・・・」

と、自分の身体の周りを巡っていた風が雷神の太刀へと流れていった。

「これが風と雷の融合技・【疾風迅雷】」

雷神の太刀を思い切り振るうと風と雷の力を含んだ巨大な魔力刃がオクトスに向かって飛んでいった。

完全に凍結しているわけではないが、身動きが取れないオクトスはその魔力刃から逃げる事は出来なかった。

そして、ステイの放った攻撃はオクトスの足を数本斬り飛ばしたのであった。

「オクトスの足が・・・」

「やったな・・・アイツ」

そう言うヴァイグ。

そして、過去の戦い同様にオクトスは戦意を失ったのか身体半分凍ったままで海の底に潜っていたのであった。

レベル27：予定外の事態

クロード達の協力を得て、オクトスを再び追いつ返すことが出来たステイ。

「クロード・・それにみんな・・ありがとう・・この船を守ってくれて」

お礼を言うステイ。

「そんな事ないよ・・それに次の大陸に行くためにはステイの船が必要で乗せてもらってるわけだし」

そう言うクロード。

と、そんな時再び進んでいた船のスピードがゆっくりになっていくことに気付いたステイ。

「どうしたんですか？」

尋ねるミリア。

「ちょっと見てみる・・クロードたちは中で休んでいて欲しい」

そう言うのと先に船の中に戻っていったステイ。

「どうしたんだ？」

不思議に思うヴァイグ。

「何か・あまり良い予感はしないわね・・・」

そう呟くルーティなのであった。

しばらくして、ステイがクロードたちのいる室内に入ってきた。

「ステイさん・・・」

「すまない・・・この船は一度アクアスに戻る」

と、クロードたちに突然そう告げたステイなのであった。

「えっ、アクアスに戻るって・・・」

驚くクロード。

「やっぱり・・・あまりいい予感はしなかったわね・・・」

そう呟くルーティ。

「オクトスに襲われたときにこの船も少しダメージを受けていたらしい・・・次の大陸までもつかどうかわからない・・・一度港に戻ってちゃんと調べてみないと・・・」

そう伝えるステイ。

「確かに途中で沈まれたらかなわないからな・・・どうするんだ？クロード」

尋ねるヴァイグ。

「そうだね・・・ここはアクアスに戻ろう・・・ステイの大事な船が沈んだら大変だし」

そう告げるクロード。

「ありがとうみんな・・・それじゃ進路をアクアスに戻す」

そう決めるとステイは船の進路を変えアクアスへとその進路を向けた。

「船が沈むのも嫌だけど・・・これで少し時間遅れるわね・・・よかったわけ？」

クロードにそう言うルーティ。

「僕なら大丈夫だよ・・・船を直してから出発したほうが順調に先に進めるわけだし・・・」

「そうですね」

笑顔でそう言うミリア。

「ここから先悪いことが起きなければいいけどね・・・」

また何かを予感してそう呟くルーティなのであった。

しばらくして船はアクアスの港に戻った。

クロード達が陸に下りるとステイはすぐに船の状態を念入りに調べ始めた。

「すぐに出発できるといいですね」

そう言うクロード。

「どうも嫌な感じが頭から離れないわよ・・・私は」

そう呟くルーティ。

「仮にすぐに直らなかったとしたら・・・俺達どうするんだ？ただじっとアクアスにいるのも退屈だぜ」

そう言うヴァイグ。

「そうですね・・・どうしましょうか」

そう告げるミリア。

とりあえずクロードたちはアクアスの宿屋にてしばらく休むことにした。

と、それから一時間後・・・宿屋にステイが姿を現した。

「ステイさん・・・」

「すまないクロード・・・思った以上に船の修復に時間がかかりそうなんだ・・・すぐには出発できそうにない」

そう告げたステイ。

「やっぱり・・・」

そう呟くルーティ。

「そうですか・・・でも、僕達そんなに急いでいませんから大丈夫ですよ」

そうステイにいうクロード。

「・・・もし、アクアスにるのが退屈だというなら一つだけ頼まれごとを引き受けてもらえませんか」

そう告げたステイ。

「頼まれごと？」

「正確には調べて欲しいことなんですけど・・・詳しい事はアクアスの奥にある屋敷の主が知っています・・・俺の名前を出せば話してくれるでしょう」

そう言うステイ。

「で、どうするの？クロード」

嫌な感じが的中して不機嫌なルーティ。

「とりあえず行ってみよう・・・困っている人を放っておけないし」

そう告げるクロードなのであった。

そんな訳でクロード達はアクアスの奥にある屋敷へとやってきた。

「とりあえず時間が潰せるなら何でもやろうぜ」

そう意気込むヴァイグ。

「でも、面倒すぎる事はやらないわよ」

そう言うルーティ。

「ごめんください！」

玄関の外からそう声をかけるクロード。

すると、一人の老人が姿を現した。

「何じゃ・・・お前さん達は・・・見た所旅の者のようじゃが・・・」

そう言う老人。

「実はステイさんから・・・」

「ステイの・・・そうか・・・まあ、立ち話もなんじゃ・・・入りなさい」

そう言い老人はクロード達を屋敷内に招いた。

「広いですね・・・」

そう呟くミリア。

「広い屋敷も今はワシ一人しか住んでおらんからの……アクアスは港町であるからみんな外へと出てしまっている」

そう言う老人。

「僕はクロードです……ステイさんから話を聞いて……」

クロードがそう言う

「ワシはこのアクアスをまとめておるジェフという者じゃ……しかし、ステイが認めたという事はそれなりに力を備えているようじゃな……」

「何か困っていることがあるんですよ」

「うむ……実は、このアクアスから少し行った先の街で人が行方不明になる事件が起きている……」

「行方不明……」

驚くクロードたち。

「アクアスは港町ではあるが大きな街ではない……その街に向かわせる戦士もそうはおらんのじゃ……」

ジェフがそう言う

「つまり、ステイが言っていた調べてほしいのってその行方不明の

原因って事ね」

ルーティがそう告げると頷くジェフ。

「どうか、原因だけでも調べてほしい・・・原因がわかれば大きな国の方に協力を要請することも可能じゃ・・・」

「わかりました、とりあえず明日の朝その街に向かいます」

と、ジェフにそう告げたクロードなのであった。

ジェフから話を聞いたクロードたちは、宿屋にて一晩を過ごした。

そして、翌朝・・・。

「とりあえず出発の準備は出来たわね」

そう言うルーティ。

「あの・・・クロードさん、朝食の後すぐいなくなっちゃいましたけど・・・」

ミリアが聞くと

「クロードなら、ステイのいる港に向かったぜ。今日の出発のことを言いに行ったんだろ」

そう告げるヴァイグ。

と、丁度そこにクロードが戻ってきた。

「ゴメン、待たせちゃって」

謝るクロード。

「ステイはどうだった？」

「あまり無茶はしないようにだって・・・あと、船は僕たちが戻ってくるまでには必ず直しておくからだって」

そう告げるクロード。

「しょうがないわね・・・それじゃ行きましょうか」

そんな訳で、何故かルーティがリーダー気味でクロード達はアクアスの先にある街へと向かっていくのであった。

レベル28：深き森と魔獣の軍勢（1）

アクアスを出てしばらく歩くクロードたち。

「にしても・・・一体どう言うことかしらね・・・行方不明になるなんて」

そう言うルーティ。

「でも、ジェフさんとステイさんの頼みだし・・・何とか解決しよう」

そう意気込むクロード。

「あの見えてきた町がそうでしょうか・・・」

ミリアがそう言い指し示した方向に町が見え始めた。

「あれか・・・」

「クロード、あの町なんていう名前なの？」

尋ねるルーティ。

「えっと・・・タブラの町だね」

地図を見ながらそう言うクロード。

そして、タブラの町の入り口に辿り着いたクロードたち。

「何だ・・あまり人の気配がしないな・・人が行方不明になっているからか？」

そう考えるヴァイグ。

「まずは町の人に話を聞いてみよう・・詳しいことがわからないと何も行動できない」

と、言う訳で手分けして町の人から話を聞くことにした四人。

「森の奥？」

とある町の人から話を聞いていたクロード。

「ああ、タブラの町の近くにある森はかなり広くてな・・夜になるととても危険だから立ち入り禁止にしているんだが・・」

「・・それが町の人が行方不明になっているのに関係しているんですか？」

「そうと思えないが・・だれも森には入れないからな・・」

「ありがとうございます」

町の人にお礼を言い次の人目指して駆け出すクロードなのであった。しばらくしてタブラの町の宿屋に集合したクロードたち。

「何か収穫はあったの？」

そう尋ねるルーティ。

「うん、こっちは・・・」

それぞれ集めた情報を教えあうクロードたち。

「みんな森に関する情報ね・・・つまり・・・」

地図を見ながら考えるルーティ。

「行方不明の原因はこの森にあるのでしょうか・・・」

そう告げるミリア。

「その可能性は高いみたいだな・・・とはいえ広すぎるだろ・・・この森は」

地図を見てそう言うヴァイグ。

「でも、森に行くしかない・・・原因がここにあるなら・・・」

「そうね・・・でも、もう一つ情報があるわ・・・私が得た情報がね」

そう言うルーティ。

「そう言えばルーティさんの集めた情報・・・まだ聞いてませんでしたね」

そう言うクロード。

「何か重要なのか？」

尋ねるヴァイグ。

「大体考えてみればそんな危険かもしれない森にこの町の人は近寄らないはずよ・・・で、私が得た情報って言うのが・・・」

「町の外？」

「ええ、町からも森からも少し離れたところ・・・そこでの行方不明情報が一番多いのよ・・・町の外なら誰かにみられる可能性も少ないしね・・・」

そう言うルーティ。

「・・・ルーティさん・・・」

「手っ取り早い方法・・・あんたも一瞬思ったんでしょ・・・クロード」
クロードの顔を見ながらそう告げたルーティなのであった。

「でも、そんな事・・・」

クロードがそう言うと

「別に問題ないわ・・・私がやるから」

そう告げるルーティ。

「一体何の話だ？」

そう尋ねるヴァイグ。

「ルーティさんは・・自分が囿になって敵をおびき寄せるつもりなんです・・そうすれば行方不明になった人達の所に行けるだろうって・・」

そう言うクロード。

「でも、それじゃルーティさんが危険です」

真剣な表情で言うミリア。

「でも、誰かがやらないとダメでしょ・・この中でうまく敵から逃げられる可能性があるのは私でしょ」

そう言うルーティ。

「でも・・」

と、ここで

『お願いクロード・・ここはルーティに・・ルーティには何か考えがあるみたいだから』

そうクロードに告げたアトワイト。

「アトワイト・・」

「決まりね・・それじゃ日が暮れる頃・・作戦を始めるわよ」

「えっ、今日・・・」

クロードが驚いていると

「当たり前でしょ・・・行動は早い方がいいの・・・更に行方不明者が出たらまずいでしょ・・・それじゃ」

と、一人宿屋を出るルーティ。

『ルーティ・・・本当に何か考えがあるの?』

そう聞くアトワイト。

「どうかしらね・・・でも、敵から逃げられる可能性が一番高いのは私だって言うのは・・・本当でしょ? アトワイト・・・後はクロードたちを信じて、なるようになるわよ」

そう告げると日が暮れるまで時間を潰すべく、町を見て回るルーティなのであった。

そして、夕方。

「それじゃクロードたちは隠れてなさいよ」

そう告げるルーティ。

「う、うん・・・」

でも、やはりルーティのことが心配なのか元氣のない返事をするク

ロード。

「心配ないわよ・・私にはアトワイトもあるんだし・・いざとなればでっかい水柱でもあげてやるわよ」

そう言うルーティ。

「気をつけてくださいね」

そう告げるミリア。

そして、ルーティは一人町と森の中間辺りの道へと向かっていった。

「俺達は隠れて様子見だ・・動きがあったらその後についていけばオッケーだな」

そう言うヴァイグ。

「行方不明になってるのはこの辺りよね・・本当に現れるのか・・」

森の方に意識を集中させていたルーティ。

そして、それから十数分が経った。

『ルーティ・・微かだけど魔物の気配がするわ・・』

そう告げたアトワイト。

「そう・・いよいよね・・」

だが、その時ルーティの背後の地面から突如獣型の魔物が飛び出てきたのだった。

「背後!？」

驚くルーティ。

その直後、その獣の爪の攻撃を受けてしまったルーティ。

『ルーティ! 森のほうから気配がするわ』

「さっきの攻撃もかすただけだし・・・この程度の・・・」

そう言っていたルーティだが、途端に足元がふらつき始めた。

「何・・・これ・・・」

膝を突くルーティ。

「効いてきたみたいだな・・・俺の爪の毒に・・・まあ、毒といっても眠らせるぐらいだけどな」

二足歩行している狼の魔物がそう告げた。

「まさか・・・さっきの攻撃は・・・ダメージを与える・・・ためじゃないかって・・・」

そして、森から新たな獣の魔物たちがルーティに近づいていった。

「まずい・・・わね・・・これじゃ・・・」

何とか耐えていたが、そこで意識は途切れその場に倒れてしまうルーティなのであった。

「ルーティさんが・・・」

思わず飛び出そうとしたクロードを止めたヴァイグ。

「ヴァイグさん！」

「今ここで飛び出して敵に気づかれたら作戦の意味がないだろう？」

ヴァイグがそう言うのと

「でも、今の状態じゃルーティさん逃げられない」

そう言うクロード。

「確かにそうです・・・でも、ルーティさんは多分こうなる事も可能性の一つとして考えていたのではないでしょうか」

そう告げるミリア。

「・・・」

「別に俺達だってルーティを見捨てるわけじゃない・・・あいつらに気づかれないように追う・・・」

「うん・・・わかった・・・」

高ぶった気持ちを落ち着かせるクロード。

そして、眠らせたルーティを抱えた魔物たちはそのまま森の中に入っていた。

「よし、行こう」

相手に気づかれぬようにクロードたちも森の中へと突入していくのであった。

レベル28：深き森と魔獣の軍勢（2）

クロードたちが森へ突入した頃・・・。

その森の奥。

「森がざわついているか・・・」

普通の二足歩行している獣モンスターよりも一回り大きな魔物がその奥にいた。

「ウルフエン様？どうなされました」

そう尋ねる魔物。

「楽しめそうだから久しぶりにこの森の拠点に足を運んでみたが・・・早速ためさせてもらおうか・・・人間」

そう言うウルフエン。

「報告いたします」

と、別の魔物が木々の中から飛び出してきた。

「新たな人間を捕らえ・・・」

「わかっている・・・俺の指示通りに行動を開始しろ・・・奴らの力を試す」

「はっ」

そう返事すると森の中に消えていった魔物達。

「さて・・・ここまで辿り着けるかどうか・・・」

そう呟くとその場に座るウルフェンなのであった。

「グッ・・・」

突如森より現れた獣たち。

その獣たちとの戦いが強制的に行われていた。

「気をつけろよ！さすが獣だけあって結構動きもすばやいぜ」

そう言うヴァイグ。

「風の力！」

レイントゥスに宿る風の力を発動させ獣をなぎ払うクロード。

「氷結の力・・・敵を封じて・・・」

と、ミリアが放った水の術が獣たちを氷の中に閉じ込めていった。

「特殊な攻撃ができるお前達は今中々頼もしいな」

そう言うヴァイグ。

「でも、この中じゃヴァイグさんが一番パワーがあるから強いですよ」

「確かにな！」

そう言いながら獣を殴り飛ばすヴァイグ。

「同じ景色の森の中では迷いやすいです・・ルーティさんを見失ったら大変ですよ」

そう言うミリア。

「うん、だから奥へ急ごう・・そこにルーティさんを連れ去った魔物たちもいるはずだから」

そう告げるクロードであった。

獣たちを倒しながら奥を目指すクロードたち。

「ふむ・・順調にここに向かっていくようだな・・」

そう呟くウルフエン。

と、その時

「ウルフエン様！」

ウルフエンの元にやってきた獣達。

その一体の腕には眠っているルーティが抱えられていた。

「その女が今ここに向かっている奴の仲間か・・・」

「はい、いかがいたしましょう・・・」

獣がそう聞くと

「その檻の中に入れておけ・・・それとお前達は下がれ・・・ここからは俺がやる」

そう告げたウルフエン。

「ウルフエン様自らが・・・」

「ああ、それと武器はちゃんと取り上げておけよ・・・目覚めて逃げられてはいけないからな」

「わかりました」

そう返事すると獣達はルーティを抱えて、更に森の奥へと駆けていった。

その後、獣たちの声が森中に響き渡った。

「えっ・・・」

その後の獣たちの行動を見て驚くクロード。

「何だ・・・引いていくぜ・・・こいつら・・・」

そう告げるヴァイグ。

「罨・・・なのかな・・・」

一応警戒するクロード。

「でも、敵がいらないなら奥へ進めます・・・気をつけながら行きましょう」

ミリアの言葉を受けてクロード達は、再び奥へ向けて移動を開始するのであった。

「本当に魔物がいなくなってる・・・」

奥へ進むたびに本来なら敵が増えそうなものだが、あの獣の鳴き声の後からまったく出なくなっていた。

「罨っぽい感じだが・・・どういうことだ？」

不思議に感じるヴァイグ。

と、その時クロードは何かを感じて足を止めた。

「どうしたんですか？」

尋ねるミリア。

「何か・・・いる」

レイントゥスを構えてそう言うクロード。

「俺の気配に気づいて歩みを止めたか・・・」

と、森の中から姿を見せたウルフエン。

「二足歩行の獣の魔物・・・」

そう言うクロード。

「だが、さっきまでの奴とは雰囲気全然違うな」

そう告げるヴァイグ。

「当然だ・・・あいつらを指揮しているのが俺だからな」

そう言ったウルフエン。

「じゃああの街の人達を連れ去っていたのは・・・お前が指示したのか」

そう聞いたクロード。

「間接的にだがな・・・だが、人間・・・今までこの森に乗り込んできた奴は俺の所までたどり着かなかった・・・だからこそ言うておく」

「・・・」

無言で聞くクロードたち。

「これ以上関わればお前達だけじゃない・・・この世界全てが破滅す

るぞ」

突然そう告げたウルフェンなのであった。

レベル28：深き森と魔獣の軍勢（3）

「世界の破滅だと・・・」

そう言うヴァイグ。

「そうだ・・・俺の主の手にかかればな・・・」

「主・・・誰なんだ」

クロードが聞くと

「教える訳にはいかないな・・・だが、俺に勝ったならお前の知りた
いことに答えてやらないこともない」

「・・・わかった・・・」

剣を構えるクロード。

「ミリア、後ろからの援護頼むぜ」

そう言うヴァイグ。

「は、はい」

ウルフエンの見た目に圧倒されながらも、後方に下がりいつでも術
を放てる準備をするミリア。

「他の人間とは違う目だな・・・お前・・・本当に楽しめそうだ・・・お

前達との戦いは!!」

と、突然力を開放するウルフェン。

「来い！」

「ヴァイグさん！」

「おうよ！」

そして、クロードとヴァイグはウルフェンに向かっていくのであった。

「ウォーッ」

思い切りウルフェンに向けて拳を放つヴァイグ。

だが、難なくヴァイグの拳を受け止めたウルフェン。

「中々重い拳だが・・・まだまだだな・・・」

と、片方の腕を振り上げるウルフェン。

「ヴァイグさん！」

少し離れた場所から風の力を含んだ斬撃を放ったクロード。

「!?!」

とっさにヴァイグから離れて攻撃をかわすウルフェン。

「サンキュー、クロード」

「いいコンビネーションだな・・・」

と、ウルフェンは足元から氷の柱が出てこようとしているのに気付
きすぐに着地した場所からも移動した。

「よけられた・・・」

そう呟くミリア。

「後方の術士も中々だな・・・だが、その程度の攻撃では俺を止める
ことは不可能だ・・・獣の長である俺は如何なる障害があろうとも突
き進む」

「クロード・・・結構こいつやばいな・・・ちゃんと身体に攻撃をヒッ
トさせないとダメージは望めないぜ」

そう言うヴァイグ。

「うん・・・でも、攻撃力が強い火のレイントウスの攻撃はこの森を
焼きかねないから使えない・・・何とか三人の力を合わせてあいつを・
」

そう告げウルフェンを見るクロードなのであった。

互いに向き合ったまましばらく時間が過ぎていった。

「何とか私も頑張ってみます」

そう告げるミリア。

「ヴァイグさん・・・少し大変ですけど・・・」

クロードがそう言うと

「問題ないぜ・・・グレイツの奴よりはウルフェンの方が弱そうだしな」

そう告げるヴァイグ。

「こい、人間たちよ」

クロードたちの攻撃を待ち構えるウルフェン。

「よっしゃ！」

気合いと共にウルフェンに向かっていくヴァイグ。

「何だ、直接攻撃か・・・受けてたつ」

と、ウルフェンも真っ直ぐ正面から向かっていった。

「地形を利用するのも戦術なんだぜ」

そう告げるとヴァイグは近くの木に拳を放った。

「なにっ」

驚くウルフェン。

と、ヴァイグは拳で碎き折った木をウルフェンに向けて投げ飛ばした。

「そんな攻撃など・・・」

ウルフェンも自らのパワーで飛んできた木を粉碎した。

「通じないことぐらいわかってるさ・・・だがもうしばらく付き合ってもらうぜ」

辺りの木を拳でなぎ倒し、ウルフェンへ投げつけるヴァイグ。

「無駄だ！」

飛んでくる全ての木を粉碎していくウルフェン。

だが、そんなやり取りの間にクロードとミリアはそれぞれ行動を起こしていたのであった。

「ミリア、頼んだよ」

「はい！クロードさんも気をつけて」

そう言い二手に分かれたクロードとミリア。

「俺と体力勝負でもしようってのか？人間」

ヴァイグにそう告げるウルフェン。

「そう言うことだ・・獣なんかには負けるつもりはないけどな」

少しずつ移動しながら木を砕き投げ飛ばしていくヴァイグ。

（とはいえ・・俺の拳も限界に近いな・・クロード・・ミリア・・急いでくれよ）

そう思っていたヴァイグ。

と、その時何処からともなく炎の斬撃がウルフェンに向けて放たれた。

「いつの間にか仲間がいなくなっていると思ったら・・そんな攻撃か・・」

あっさりと斬撃を砕くウルフェン。

「俺との勝負は終わってないぜ！」

と、木を担いだままウルフェンに接近していったヴァイグ。

「その木ごと切り裂いてくれる！」

ヴァイグの突入に合わせて突入するウルフェン。

と、また何処からか飛んできた火の斬撃が今度はヴァイグの持つ木に直撃した。

「なにっ」

驚くウルフェン。

「俺のパワーと燃え盛る炎をくらいやがれ！」

そして、ヴァイグは炎の灯った木をウルフェンに叩きつけるのであった。

レベル28：深き森と魔獣の軍勢（4）

「グハッ…」

直撃を受けたウルフエンは弾き飛ばされ木々の中を転がっていった。

「クロード！」

「うんっ」

レイントウスを構え飛ばされたウルフエンの元へ急ぐクロード。

「あの一撃…かなり…」

と、ウルフエンは目の前に現れたクロードに気付いた。

「決めろ、クロード！」

そう叫ぶヴァイグ。

そして、倒れているウルフエンに向かって剣を振り下ろしたクロード。

だが、クロードの剣はウルフエンのギリギリの所で止まったのだった。

「クロードさん!？」

クロードの行動に驚くミリア。

と、それをチャンスと見たのか鋭い爪をクロードに向けて振りかざすウルフェン。

「クロードさん！」

助けに入ろうとするミリア。

だが、ウルフェンもまたその攻撃を寸前で止めたのであった。

「…」

「…」

互いに無言で見合うクロードとウルフェン。

「さっきの一撃を受けて俺はまともに動けなかった…それに引き換え…お前まで…やってこられたら勝ち目はないよな…」

そう告げるウルフェン。

「何よ、せっかく格好よくとどめをさしてあげようと思ってたのに」

と、木の上から飛び降りてきたのはルーティだった。

「捕まえておいたはずだったのだから…」

そう言うウルフェン。

「確かにね…まあ、アトワイトが手元になかった時は焦ったけど…」

何とかなったわよ」

そう告げるルーティ。

「…クロードだったな…最後に聞かせろ…何故、攻撃を止めた」

そう聞いてきたウルフェン。

「貴方の戦う意思が感じられなかったから…」

そう答えたクロード。

「俺はお前達の敵だ…いくら戦えなくなっているとはいえ攻撃を止めるべきではないな…そんな甘い考えでは…この先戦い拔けないぞ」

そう言うウルフェン。

「確かにそうかもしれない。でも、僕は…」

クロードがそう言うと突然ウルフェンは笑い始めたのだった。

「本当に面白い男だ…だからこそお前の側には仲間がいるのだろうな…」

と、クロードの顔を見るウルフェン。

「俺を倒した褒美だ…情報を与えてやる」

「情報？」

不思議な表情を見せるクロード。

「その前に重要な事を伝える。俺を倒した事でお前達はこの世界に暗躍する魔王軍に狙われる事となる…確実にな」

「魔王軍…」

そう呟くクロード達。

「そんなのがこの世界で活動しているわけ？」

そう聞くルーティ。

「そうだ…いずれ魔王軍の幹部達も俺の敗北を知り動いてくるだろう…その前にお前達はここを去れ…無事にお前達の旅を成功させないのならば」

そう言うウルフェン。

「クロードさん…」

「ウルフェン…貴方は…」

「俺は放っておけ…長くはない命だ…例えこの傷が癒えようとも負けた俺など魔王軍には用済みだろうからな…さあ、早く行け」

そう告げるウルフェン。

「いきましようクロード。と、その前にウルフェン！行方不明の人たちは何処にいるわけ？」

そう聞くルーティ。

「すまないな…すでに、魔王軍の他のメンバーが別の場所に連れて行った…すでにこの大陸にはいないだろうな…」

そう答えるウルフェン。

「とりあえずここを出ようぜ。煙も上がっているからその他の魔王軍連中に気付かれるのが早まるかもしれないぜ」

「ウルフェン…」

「俺は敵だと言っただろう…さあ、行け！」

そして、クロード達はウルフェンに背を向け森を出るために駆け出していったのだった。

レベル29：再出発！新たな場所へ・・・（1）

ウルフェンを倒したクロード達は、街へと戻り森での出来事の一部始終を話した。

「そうか：行方不明の者達はすでに：」

「すみません：行方不明の原因は何とか解決したんですが：」

そう言うクロード。

「いいんです：しかし、まだ行方不明の人たちが生きている事は何となくわかりました。それに、これ以上行方不明者も出ないでしょうし：とりあえずはよしとしましょう」

そんな訳で、この街の宿屋にて一旦休憩を取るクロード達。

「そろそろあっちに戻らないとね。ステイも待ってるだろうし」

そう告げるルーティ。

「そうだな。船の修理も終わってると思うしな」

そう言うヴァイグ。

「うん：そうだな」

そう決めこの街を出るクロード達。

「クロードさん…やっぱりウルフェンの事が気になっているんですか」

そう聞くミリア。

「うん…敵だけど…最後に色々教えてくれたし…魔物だったけど本当に悪い感じはしなかった」

そう言うクロード。

「私、そんなクロードさんの優しい所がいいと思います」

そう言い笑顔を見せるミリア。

「全く…そんな話してる場合じゃないってのに」

そう告げるルーティ。

「まあ、いいだろ。と、街が見えてきたぜ」

ヴァイグがそう言うのと海に面したステイの待つアクアスに到着したのであった。

「とりあえず僕は港に行つてステイさんに会ってきますから皆は休んでください」

そう言うクロード。

「そう言うことなら俺が行くぜ。クロードは疲れてるだろ」

そう言うヴァイグ。

「だったら私が行くわよ。私は戦ってない…から…」

と、足元がふらつくルーティ。

「ルーティさんは魔物に捕まった時にダメージ受けたりしてるから休んでいた方がいいですよ。それじゃ」

と、そのまま駆けていってしまったクロード。

「クロードさんも疲れているのに…」

そう言うミリア。

「仕方ないでしょ…あー言うのは…とりあえずお言葉に甘えて私達は休みましょ」

そう告げるルーティなのであった。

そして、港へ到着したクロード。

「ステイさん！」

「やあ、クロード。その顔だと上手くいったみたいだな」

そう言い船から下りたステイ。

「ステイさんの船の方は…」

クロードが聞くと笑みを浮かべて頷いたステイ。

「問題ない。すぐにでも出航できるよ」

そう告げたステイ。

そして、この日はステイも共に宿で休む事になった。

「一応私達の仲間だしね、ステイは」

そう言うルーティ。

「それにただの船乗りじゃなかったしな」

そう告げるヴァイグ。

「でも、僕はまだ雷神の太刀を使いこなせていない。あれを使いこなさなきゃこれからの戦いで戦力にはならないよ・・・君達の話聞いた所だね」

そう言うステイ。

「そうですね・・・魔王軍・・・お兄様達は大丈夫でしょうか・・・」

自分の国の事を心配するミリア。

「僕も・・・行方不明のヒルツ兄さんや妹のレオナが・・・」

そう呟くクロード。

「そんな事言っても始まらないでしょ。今日は早く寝て早朝出発よ」と、ルーティが決めたのでクロード達は明日に備えて就寝するのであった。

レベル29：再出発！新たな場所へ・・・（2）

翌朝。

いつものごとく早朝から起きていたクロードは外に出ていた。

「もう少し寝てればいいんじゃないの？クロード」

そう言い姿を見せるルーティ。

「そう言うルーティさんだって…」

「私の場合は別に…何だっていいでしょ」

そう言うルーティ。

「二人とも朝は早いみたいだな」

そう告げるステイ。

「ステイさん、おはようございます」

挨拶するクロード。

「おはよう、僕は先に船の方に行ってるからゆっくり朝食でも食べてから来るといいよ」

そう言うと言ってしまったステイ。

「ゆっくり食べてる訳には行かないんですけど…」

そう呟くルーティ。

その後、起きてきたヴァイグ・ミリアを加えて手早く朝食を終えたクロード達は準備していた荷物を持ってステイの待つ船へと向かった。

「出航の準備はバッチリだよ。さあ、行こうか」

そう告げるステイ。

全員が船に乗り込んだのを確認したステイは、ゆっくりと船を動かしていった。

「全く：ようやく次の場所に迎えるわね」

そう言うルーティ。

「とりあえず次は何処へ向かうんですか？」

そう尋ねるミリア。

「あの時行こうとしていた場所でもいいんじゃないのか？とりあえず魔王軍に見つかる前に大陸に着きたいけどな」

そう言うヴァイグ。

「ステイさん…」

「了解しているよ。あのモンスターも撤退していったし問題なく次の場所までいけるよ」

自信をもってそう言うステイ。

だが、この時ステイはもとよりクロード達も気付いていなかった。

これから起こる異変と、そこから始まっていく戦いの連続を…。

そして…。

レベル29：再出発！新たな場所へ・・・（3）

順調な航海を続けていたクロード達。

「天気もよくていい感じですね」

そう言うミリア。

「無事次の大陸に辿り着ければいいんだけど」

そう告げるクロード。

そんな時、突然ルーティが船の中から外に飛び出してきたのだった。

「ルーティさん？」

「大変な事態になったわ・・・ちゃんと調べてみないとわからないけど」

そう言うルーティ。

「どうしたんですか？」

そう聞くミリア。

「ヴァイグが・・・」

そう言うルーティ。

「ヴァイグさんがどうかしたんですか！」

驚きながらそう言うクロード。

「何かのウイルスに感染してるみたいなの・・・危険だから二人ともヴァイグのいる部屋には入らないで」

「ルーティさんは大丈夫だったんですか？」

「アトワイトの晶術を上手く使ってね・・・とりあえずステイにもこの事伝えてくるから。すぐに近くの陸に向かって街を探さないと・・・」

そう言うルーティ。

「なら、僕たちで行ってくるよ。ルーティさんは部屋に入っても大丈夫なら・・・治癒の術で少しでもヴァイグさんを・・・」

「・・・わかった。それじゃお願いね」

そう言うともた船の中に戻っていったルーティ。

「それじゃミリア」

「はい！」

クロードとミリアは急いでステイのいる場所へと向かった。

「ステイさん！」

船の操作をしているステイの元へ飛び込むクロード。

「クロード、それにミリアも・・・どうしたんだ？」

そう聞くステイ。

「僕達も詳しくはまだわからないんですけど・・・実は・・・」

ルーティから聞いた話を説明するクロード。

「病気か・・・ルーティの治癒系の術で治らないとなるとちゃんと医者に見せて治さないと命に関わるかもしれないな」

そう告げるステイ。

「今居る場所の近くに陸は見えないんですか？」

「えっと・・・」

と、ステイは近くにあった地図を手にとると広げた。

「大体のルートがこうだから・・・今が・・・進路をそれれば海沿いに街がある所がある・・・そこに医者が居るかどうかはわからないけどとりあえず陸に向かったほうがいいからね」

そう言うわけでステイはすぐに船の進路を変え始めた。

「しかし、いくら治癒術を扱えるといってもルーティも感染する可能性があるんだ・・・最速で陸に向かうからルーティもここに来るように伝えてもらえるか？」

「はい！」

ステイに頼まれヴァイグの部屋に向かうクロード。

「ヴァイグさん・・・」

心配そうな表情を見せるミリア。

そして、ステイの元にルーティとクロードがやって来たところでステイは近くの陸へ向けて更に船を進めていくのであった。

レベル29：再出発！新たな場所へ・・・（4）

「ルーティさん・・・ヴァイグさんは…」

クロードがそう聞くと

「とりあえずは落ち着いているけど、いつまた苦しみだすかわからないわ」

そう答えるルーティ。

「色んな所に旅していた僕が直接見てみれば病状がわかるかもしれないけど…今は陸に向かうのが最優先だからね」

そう告げるステイ。

「その街で治せばいいんですけど…」

心配そうな表情でそう言うミリア。

「陸に着いたら僕とクロードでヴァイグを…」

ステイがそう言う

「病気がうつるかもしれないでしょ。私がクロードと一緒にやるから、ステイはミリアと一緒に医者を探して」

「はい、わかりました」

了承するミリア。

「確かに治癒術を使える君と一緒にいたほうが安全か…任せるよ」

そう告げるステイ。

「陸が…陸が見えてきました」

そう言うクロード。

「クロード！ヴァイグの所に急ぐわよ！」

と、駆け出していったルーティ。

「あっ、ルーティさん!？」

慌ててあとを追いかけていくクロード。

「順調に行きそうだったんですけどね…」

そう言うミリア。

「旅はそう言うものだよ…ミリア姫は旅なんかは初めてだと思うけど…何かが解決すれば次の問題が起こる…それを乗り越えていきながら強くなっていくんだ」

そう告げるステイ。

そして、ステイはゆっくりと港へと船を進入させ陸の際に船を着けた。

「ルーティさん、大丈夫ですか？」

「私の心配はいいから、しっかりヴァイグを支えてなさいよ」

そう言い表へ出るクロード達。

「それじゃ私先に行ってますね」

そうステイに告げて、一足先に街の中へ飛び込んでいったミリア。

「本当に行動的なお姫様だな・・・と、僕も行かないと」

ステイもミリアに続き船を降り医者を探しに出た。

その頃、クロード達はヴァイグを宿屋へと連れてきていた。

「とりあえず港の近くに宿屋があって助かったわね・・・クロード！」

「うん、この人に事情を説明して部屋を貸してもらってくる」

そう言い宿屋の中に入っていたクロード。

「グッ、すまないな…みんなに迷惑…」

そう呟くヴァイグ。

「いいから大人しくしてなさい。病気が余計悪くなったら旅どころじゃなくなるわよ」

そう言うルーティ。

そして、同時刻。

ミリアとステイはとある情報を街の人から入手していたのであった。

レベル30：治癒魔法のシオン（1）

「世界でも最高の治癒魔法の使い手…」

そう呟いたミリア。

ステイもその話を聞いて驚いていた。

「しかし：数日前にここを出たんだよ。そう遠くにはまだ行っていないはずだが：数日経っているからな」

そう告げる街の男。

「ステイさん、どうでしょうか」

「あの病気は僕もよく知らない：もしその人がどんな病気でも治癒出来るなら連れてきた方が現実だけど…」

そう考えるステイ。

「どうやら何か事情があるようだな…」

と、街の男に今回の事を話すステイ。

「そう言う事なら宿屋にこの街の医療メンバーを向かわせるぜ。あのお方：シオン様が残していった薬もある。それで少しは何とかできるかもしれない」

「それじゃお願いします」

そう言ったミリア。

「ミリア姫、先に宿屋に戻ってこの事をクロード達に…僕は医療メ
ンバーと共に宿屋に向かう」

「は、はい。わかりました」

ステイの指示を聞いて駆け出していくミリア。

そして、しばらくしてミリアは宿屋に到着した。

「ミリア！」

「クロードさん、実は…」

事情を説明していくミリア。

「シオンね…私はこの辺りの人じゃないから知らないけど」

そう告げるルーティ。

「僕も聞いたことない人だけど…でも、本当にいるなら…」

クロードがそう言うと

「ステイさんはそのシオンさんって言う人を連れてきた方が早いか
もしれないって…」

そう告げるミリア。

「でも、数日前に出たんでしょ？行き先もわからないし会うのは難しいわよ」

そう言うルーティ。

と、その時宿屋に一人の男がやってきた。

「すまないなお嬢さん。さっき思い出した…シオン様の行き先だ」

「…どういう話の展開よ…」

呆れているルーティ。

「それでその人は何処に…」

クロードが聞くと

「一度この街を出た後に戻ってきて船で行きたい所があるって別の大陸に向かった。行き先は…この大陸のこの街だな」

男は持ってきていた地図を広げてその場所を示した。

「海を越えないといけないのか…ルーティさん。ヴァイグさん連れて行くのは危険ですよね」

そう尋ねるクロード。

「そうね…この街の医療メンバーを連れて行くわけにも行かないでしょうし…海の上も危険があるしね…」

そんな話をしていると、宿屋にステイと医療メンバーがやってきたのだった。

「どうしたんだ…入り口付近で集まって…」

そう言うステイ。

「ステイさん…」

先ほどの話をステイに教えるクロード。

「…そう言うことなら僕の船で行こう…だけど…」

「ステイのいいいたい事はわかってるわ。私がヴァイグと一緒に残るわ。それでいいでしょ」

そう告げたルーティ。

「ルーティさん…」

「私だって治癒魔法あるんだし…クロード達がシオンを連れてくるまで何とかしておくわ」

そう言うルーティ。

「それで決まりならすぐに準備をしよう。クロード、ミリア姫」

二人を見るステイ。

そして、ステイ・クロード・ミリアは船のある港の方へ急ぐのであった。

レベル30：治癒魔法のシオン（2）

そして、港へ到着したクロード達三人。

「すぐに出発の準備をするから二人は乗っていてくれ」

そう告げ急いで準備をしていくステイ。

「間に合いますよね：クロードさん」

そう言うミリア。

「うん、絶対にシオンを連れてここに戻ってくるんだ」

そう意気込むクロード。

「よし、準備できた。出発するぞ」

ステイはそう言うのと船をゆっくりと発進させたのであった。

「情報通りならそんなにかからずにその街がある大陸に着く」

そう告げるステイ。

「うん：」

「僕は船にいていつでも戻れるようにしておく。大変だと思うけどクロード、ミリア：」

「大丈夫です、ステイさん。僕達が必ずシオンを連れて船に戻ってきます」

そう言うクロード。

それからしばらくして船は新たな大陸に無事到着した。

「ここから先は君達にとっては知らない所だ…情報を集めながら慎重に…」

そう言うステイ。

「でも、時間がないんだ。出来る限り早く連れてきます」

そして、船から降りるクロードとミリア。

「頼んだよ、二人とも」

ステイの言葉を受け、クロード達は情報を集めるため街中に入っていくのであった。

「とりあえず宿屋とかお店とか人が集まりそうな所に行って情報集めですよね」

そう言うミリア。

「そうだね…上手くこの街にまだいてくれればいいけど…」

そんな訳で、近くの店等から情報を集めながら歩いていくクロード達。

「森？」

「最近みんなが話していることだ。あの森には化け物が住んでいるとな…しかも、何やら呪いの力を持っているらしくてな…だが、シオンって子が来てくれたおかげで…」

その話を聞いたクロードは

「そのシオンは今何処に…」

「さあな…詳しい情報を知りたいなら宿屋に行くといいぜ。あそこにしばらくいたらしいからな…宿屋の主なら知っているだろうぜ」

そんな情報を得たクロード達は、一直線に宿屋へと向かっていった。中に入るとすぐに情報を集めるクロード。

「シオン様か…それなら森へ呪いを解決するために森へ護衛と一緒に向かわれてさっき帰ってきたが…」

「そのシオンさんはどの部屋にいらっしゃるのですか？」

そう聞いたミリア。

「二階の一番奥だが…今は…」

そう言う店主だが、クロード達は話を最後まで聞く前に二階へ向かっていった。

そして、一番奥の扉を開いたクロード。

そこで、クロード達は信じられないものを見る事になるのであった。

レベル30：治癒魔法のシオン(3)

そこにいたのは二人の大人と、その奥にまだ子供の人物がいた。

しかし、その子供の頭にはなぜか獣の耳がついていた。

更に、後方にはしっぽも見えていた。

「えっ・・・」

驚いて立ち止まるクロード。

「何だ、君たちは」

そう言う男の一人。

「私達は・・・」

クロードの後ろにいたミリアは、前に出て自分達の事と状況を説明した。

「そうか・・・シオン様に治療をな・・・だが・・・」

男はシオンを見た。

「一体何があったんですか・・・」

そう聞くクロード。

「・・・呪いだ・・・呪いの元を断とうと出発したのだが・・・逆にシオン様が呪いを受けてしまった」

そう説明する男。

「その呪いって・・・」

「獣に変化する呪い・・・今はまだこの程度だがいずれは完全な獣になる・・・人としての意思を失ってな」

そう告げるもう一人の男。

「・・・何とかする方法はないのですか？」

尋ねるクロード。

「一つだけだ・・・その呪いをかけたヤツを倒す・・・だが、俺達で挑んでもダメだった・・・相手は魔術を巧みに操るからな」

そう言う男。

「ミリア・・・」

「はい、やる事は一つですね」

すでに覚悟を決めていたミリア。

「僕たちでそいつを倒します。僕たちにはシオンの力が必要なんです」

そう告げるクロード。

「・・・君達は旅をしているようだが危険すぎる・・・それに噂ではそいつは魔王軍の幹部の一人だとか」

「クロードさん・・・魔王軍って・・・」

「うん・・・ウルフエンと同じ・・・だとしたらやっぱり行かなくちゃ」

そう告げるクロード。

と、その時男達の後ろにいたシオンが前に出てきたのだった。

「シオン様!？」

すると、シオンは置いてあった紙に文字を記し始めた。

「えっ、自分も行くって・・・」

「シオン様! 呪いを受け言葉も話せなくなり次第に治癒の魔法の効果もなくなってきました・・・その状態でまたあそこに向かえば・・・」

そう言う男達だがシオンの決心は固かった。

「大丈夫です。私達で必ずシオンさんを守りますから」

そう告げるミリア。

そんな中、考え込む男達だったが

「わかった。君達とならもしかしたら上手く行くかもしれない俺達
シオン様の護衛も付き添う・・・共にシオン様を救おう」

そして、男達とクロード・ミリアは握手をかわすのであった。

レベル31：いざ、妖しの森へ

出発の準備を整え街の入り口に集合したクロード達。

「早く解決して戻らないと」

そう言うクロード。

「シオン様。今度敵の手にかかれば完全な獣に変わってしまうかもしれません…ですから無茶はなさいませうよう」

そうシオンに告げる男達。

そして、頷くシオン。

「それではクロード、ミリア…敵の待つ森…【妖しの森】へは俺達が先頭で案内していく」

「はい、お願いします」

「クロードさん、私は…」

ミリアが尋ねると

「ミリアはシオンの後ろに…僕が後ろを守るよ」

そう告げたクロード。

「では、行きましょう」

と、言うことで妖しの森へと出発していったクロード達。

その頃、その森の中にそびえ建つ小さな城の中では…。

「周辺のモンスターたちから情報は常に入り込んでくるが…面白いことになりそうじゃな…ただの獣とはいえ幹部を一人倒したとされるチームの二人がここへと向かっている。さて…迎える準備でもしておこうかの」

そう言うとその人物は城の中から姿を消したのだった。

「素晴らしい魔法ですね…氷の力で敵を封じるとは」

感心している男達。

「いえ、それほどでも…」

照れながらそう言うミリア。

「見えてきましたね。あれが…」

クロードがそう言うのと立ち止まるメンバー達。

「はい、妖しの森…その中に城がありそこに敵がいます…しかし、あの敵がわざわざ自分の拠点に近付かせるとは思いません」

男がそう言うと

「不意をついてくる可能性もあるということですね…ここからは僕

が先頭で行きます」

考えた結果そう答えを出したクロード。

「では、私も先頭に…完全ではありませんが城までの道はわかっていますから」

と、言うことで先頭をクロードと二人いる男のうちの一人が歩くことになった。

「私達で後方とシオンさんを」

そう言うミリア。

そして、クロード達は覚悟を決めて妖しの森の中へと突入していったのであった。

レベル32：対決！魔道の幹部（1）

「この森はワシのテリトリー・・・森全体をワシが管理しておるかな・・・直接手を出せるわけではないが進入して来ればすぐ分かる・・・今のようにな」

と、モニターには森の全体図のようなものが映し出されており五つの点が森を進んでいるのがすぐ分かるようになっていた。

「面白いのが二人・・・あの暴れ獣を倒した奴らの二人・・・そして、ワシの呪いを受けながらもまたやってきたか・・・今度はそのまま獣の姿に変えてやろうかの」

そう言いながら立ち上がるその人物。

「一応あの獣を倒した実力者チームの一員じゃ・・・妙な小細工や部下の魔物を差し向けたところでここまでは確実に辿り着く・・・ワシも無駄な動きはしたくないのでな・・・最初から直接・・・魔王軍幹部の一人であるこのマールブルが相手になってやろうかの」

そう告げるとモニターに地図を映し出したままこの部屋を出るマールブルなのであった。

「おかしい・・・」

突然そう告げたシオンに付き添っている男。

「どういふことですか？」

尋ねるクロード。

「前に来た時は森の中には魔物達が沢山いたはずだけど・・・これまで一匹も出てきていない」

「確かに変ですよ・・・敵の拠点みたいなもののなに」

そう言うミリア。

「・・・」

と、シオンは紙に文字を書いてクロードに見せた。

「敵は自分達を迎え入れるつもりだと思う・・・って・・・」

「じゃあ、魔物が全然出てこないのは・・・敵が・・・わざと」

そう言うミリア。

歩いていると前方に城が見え始めた。

「・・・案内されたみたいに着したな・・・」

と、最初に城の中に入ろうとするシオン。

「待つてシオン・・・シオン達はここで待つていて・・・敵は僕とミリアで倒す」

そう告げたクロード。

「無茶だ！いくら君達でも・・・」

「今の状態のシオンを戦いに参加させるわけにはいかない・・・だから」

「絶対に敵を倒して・・・元に戻してあげますから」

そう言うミリア。

「シオン様・・・」

男達はシオンを見ると、シオンは静かに頷きクロードとミリアに笑顔を見せた。

「絶対に勝って戻ってきます」

そして、クロードとミリアは城の中に突入していったのだった。

レベル32：対決！魔道の幹部（2）

「城の中も敵がない・・・」

『ようこそ、ワシの城に』

「この声は・・・」

「ワシがこのエリアを支配しているマールブルじゃ」

そう告げたマールブル。

「お前がシオンを」

「いかにも・・・お前たちの目的はワシを倒すことじゃろう・・・」

「そうだ！そして、シオンを助ける」

そう言い放つクロード。

「ならば、ワシの元へと案内しよう・・・進むがいい」

と、通路の先に明かりが灯った。

「クロードさん。いつでも魔法が使えるように準備しておきますね」

「うん、行こう」

畏かもしれないと思いつつも、先へと進むクロードとミリア。

そして、前方に大きな扉が見えてきた。

「この奥に大理石が・・・」

意を決して扉を開き中に入るクロード。

「直接みるとやはりまだ子供っぽいのう」

そう告げた大理石。

「何だ、ここは・・・」

大理石がいた部屋は、大きなテーブルにいくつもの料理を乗せた皿が置かれていた。

「戦いの前にどうじゃ？ お前達にとって最後の晩餐になるかもしれないからな」

そう告げた大理石。

「断る！ それに最後の晩餐になるのはお前だ！」

レイントウスを構え刃を大理石に向けるクロード。

「せっかちじゃな。別に料理に毒など仕込んでおらんというのに・・・まあ、よいか」

と、椅子から降り杖を構える大理石。

そして、杖を一振りするとテーブルが料理ごとすべて燃え灰と化した。

「凄い魔法の力ですね・・・」

そう言うミリア。

「では、かかってくるがよい」

「ミリア！」

「はい、援護は任せてください」

ミリアに後方からの援護を任せ、クロードはレイントウスを手にもう一度向かっていくのであった。

レベル32：対決！魔道の幹部（3）

マーブルに対して、レイントゥスを振るっていくクロード。

だが、身軽な動きでマーブルはクロードの攻撃をかわしていた。

「どうしたんじゃ。老いぼれのワシにかわされるようじゃ腕はまだじゃな」

そう告げるマーブル。

「火の力！」

と、レイントゥスの核に火の文字が浮かび上がった。

そして、クロードはレイントゥスに火を纏わせずにマーブルに放った。

だが、その直後マーブルはバリアーのようなものを発動させて防いだ。

「防がれた！」

「驚いたな・・・さすがは宝具の一つか・・・じゃが・・・」

と、突然マーブルの周囲から氷の柱が出現した。

「いい連携じゃが・・・」

マーブルは杖を振るうと、氷の柱はバツサリと全て斬られてしまった。

「えっ、今のは・・・」

驚いているミリア。

「ワシは高位レベルの魔術師じゃよ。様々な属性の術を扱える。今のは風の属性の術だ」

そう説明するマーブル。

（ウルフェンとは違うタイプの幹部・・・術で巧みな動きを見せる）

そう感じていたクロード。

「さあ、次の連携はどうくる？」

「なら、僕も風の力！」

レイントウスの核に風の文字が浮かび上がると、クロードは一気にマーブルに向かっていった。

「ならば！」

マーブルは杖を足下に叩きつけると、床から多数の氷の刃が出現しクロードに襲いかかっていった。

「クロードさん！」

「頼む、ミリア！」

と、クロードがジャンプしたと同時に足下に氷の柱が出現した。

そして、それを足場にマーブルの攻撃をかわすクロード。

「風の刃を受けてみる！」

剣に風を纏わせ振るおうとしたクロード。

だが、次の瞬間鋭い一撃がクロードに命中していたのだった。

「クロードさん！」

攻撃を受けたものの、上手く着地したクロード。

「今は・・・」

クロードは自分の身体をみて、防具の一部に黒く焦げた跡があるのに気付いた。

「雷じゃよ・・・杖の先から放たせてもらったよ。速すぎて見えなかったか？」

自信たっぷりにそう言い放つマーブルなのであった。

レベル33：シオンの戦い（1）

クロードとミリアが城の中で戦っている頃、外でその帰りを待っていたシオンとその付き人の男達。

「やはり心配ですね。いくら強いと言ってもまだ二人は・・・」

そう言う男の一人。

と、シオンは懷から小さな紙を取り出した。

「シオン様？」

シオンの持つ紙をのぞき込む男。

と、シオンは素早くその紙を付き人の二人の男に張り付けた。

「シ、シオン様・・・」

驚いている男達。

そして、その直後二人の男はその場に倒れたのだった。

じっと二人の男を見るシオン。

と、謝るかのように二人に一礼をするとさらに複数の紙を取り出すとこの城の裏の方へと移動していった。

「・・・」

と、とある場所で立ち止まったシオン。

そこにあるのは城の壁ばかりであった。

しかしシオンは、持っていた一枚の紙をその壁に貼り付けた。

そして、紙に描かれた魔法陣が淡く光り出すと突然その壁の一部が扉のように開いていったのだった。

そして、シオンは誰に気付かれることなく城の中に入ってしまったのだった。

「雷の魔法・・・あんなに攻撃スピードが速いなんて」

そう言うクロード。

「先ほどの風の力を使ってスピードを増した攻撃はなかなかじゃが、それでもワシの雷の魔法の方が速い・・・後ろの少女のサポート効果を考えてもワシの勝利は変わらないようじゃのう」

そう告げるマールブル。

「それでも俺は・・・お前を倒さなきゃいけないんだ・・・全ての力を使いきったって・・・」

そう言うクロード。

「クロードさん・・・」

そんなクロードを見ているミリア。

「全力で来たところで無駄じゃがな・・・しかし、ワシも暇じゃないからの・・・次で決めようか」

杖を構えるとその先に雷の魔法の力を集中させていくマール。

そしてそんな中、静かにシオンは城の中を移動して色んな所に魔法陣が描かれた紙を貼り付けていくのであった。

レベル33：シオンの戦い(2)

「クロードさん！下がってください。私の力で大きな氷の壁を作って魔法を受け止めます」

そう告げるミリア。

「・・・わかった。お願い、ミリア」

少し何かを思いながら、クロードは後方へ下がった。

そして、マーブルが攻撃する前に素早く魔法を詠唱すると二人の前に巨大な氷の壁が作り上げられた。

「ほう・・・氷の魔法使い・・・その歳で凄いの・・・しかし、まだ長期戦出来るまでにはなっておらん」

「ミリア！」

クロードがミリアをみると、ミリアは疲れたような表情を見せ、額に汗を浮かばせていた。

「大丈夫・・・です。相手も大技を使ってきますからすぐには大きな攻撃は出来ないはず。クロードさんは相手の攻撃を氷の壁が受け止めた直後に向かっていってください」

そう伝えるミリア。

「わかった」

ミリアを信じ、攻撃することに集中するクロード。

「よほどその防御に自信があるようじゃな。ならば、その防御を自信ごと粉碎してやろう」

と、杖からほとばしる雷電。

そして、放たれるマーブルの魔法。

その魔法はミリアが出現させた氷の壁に正面からぶつかり、爆発を起こさせた。

「クロード・・・さん！」

「うんっ！」

レイントウスを握りしめ、飛び出していくクロード。

そして、爆煙が消えていく中突撃していったクロードは想定外のものを見てしまった。

「何で・・・」

クロードがみたのは、未だ雷電をほとばしらせている杖を持つマーブルの姿だった。

「戦いとは力だけで勝敗が決まるわけではないぞ・・・先ほど氷の壁に放ったのは杖を持たぬ腕から放った炎の魔法・・・杖を使っておらん分威力は劣るが・・・ワシが助かったのは少女の魔力が不安

定なせいかその氷の内部が透き通っていなかったことじゃな」

そう告げるマール。

「・・・」

全力で向かっていたクロードは、その足を止めることが出来なかった。

「全力の魔力を込めたワシの雷の魔法・・・対して想定外のことに動揺し、対応が遅れた青年の防御・・・どちらが勝つかは誰が見ても明らかじゃな」

そして、杖の先端をクロードに向けるマール。

氷の壁が消え、爆煙も完全になくなりミリアにも今起きている状況が理解できていた。

「クロードさん！」

叫ぶミリア。

そして、マールの雷の魔法が放たれようとしたとき、突如上から魔法陣が描かれた紙が多数降ってきたのであった。

レベル33：シオンの戦い(3)

「!?!」

クロード達は突如降ってきたその紙に、驚き動きを止めていた。

だが、その中でマーブルだけが様子のおかしい動きを見せていた。

「これは……どうということじゃ」

自身に起きている状況に困惑しているマーブル。

「クロードさん……マーブルの様子が……」

それに気付きクロードに声をかけるミリア。

「それよりもこの紙は……この模様は魔法陣……」

紙の一枚を手に取り、眺めているクロード。

と、小さな足音をたてながらクロード達の後方にシオンが姿を見せたのだった。

「シオン!?! どうしてここに」

驚いているクロード。

「……」

シオンは無言でマールの方を指し示した。

「この紙をばらまいたのは・・・クロードさん！」

「ミリア？」

「これはシオンさんが作ってくれたチャンスなんです。さっきまで発動しようとしていたマールの魔法がいつの間にか消えています」
そう告げるミリア。

「そう言われればマールの杖に集められていた雷の魔法が・・・」

「奴は治癒術士の・・・治癒だけじゃなくこのような術を・・・」

シオンを睨みつけるマール。

そんな中、マールがシオンをみている間にクロードはこのチャンスを活かすべく行動を開始していた。

「・・・っ!？」

レイントウスに風の力を宿し、自身の動きも素早くさせマールへと近づくクロード。

「貴様・・・」

「この一撃はお前の邪悪なる力を切り裂く！」

そして、クロードがマールの横を通り過ぎた瞬間、見えない風の

刃の一撃がマールを貫いたのであった。

「ぐうつ・・・」

攻撃を受け膝を突くマール。

「クロードさん！」

笑みを見せるミリア。

「甘い奴じゃな・・・ワシの身体を炎の力で粉碎すれば確実に勝てる」と言うのに・・・」

そう告げるマール。

「僕はむやみに命を奪いたくはない。それが例え敵であっても・・・だけど体内へのダメージでまともには戦えないはずだ。シオンへの呪いを解いてくれ」

そう言うクロード。

「そうじゃのう・・・今回はワシにとってもいい教訓になった。治癒術士・シオン、そしてクロードの名は次に会う時まで覚えておこう。本体のワシが会う時までな」

と、突然そんな事を告げたマールなのであった。

レベル34：切り離されたもの

「本体のマーブルだって!？」

驚いているクロード。

「ワシを倒して喜んでおったようじゃが今のこのワシはコピーじゃ・
・もちろん本体のワシよりも低い力しか持たないがの」

そう言うマーブル。

「それじゃシオンさんの呪いは・・・本体を倒さないといけないんじゃない」

そう思ってしまうミリア。

「その事に関しては運がいいな。呪いはコピーのワシがかけた。ワシが消えればお前の呪いも解けるじやろう・・・治癒術士よ」

そう言いシオンを見るマーブル。

「でも、これでとりあえずの目的は達成できたんだ。急いで・・・」

振り返り仲間達の表情を見るクロード。

「しかしの、コピーとはいえワシにはワシの意地がある・・・念のために準備しておいて正解じゃったかの」

と、マーブルは両手に力を込めて大地に放った。

「えっ……」

マーブルの行動に気付くクロード達。

すると、大きな魔法陣がクロード達三人の大地に描かれたのだった。

「これは……」

「転移魔法陣……それがどういうものかわかるじやろうクロード」

そう告げたマーブル。

「転移魔法陣って……離れた場所に物質を飛ばすかなり高度な陣系の魔法……」

そう呟くミリア。

「本来ならお前達三人ともバラバラに飛ばしてやりたい所じゃが力が足りぬ。だが、これでお前達の帰りを待つ仲間との繋がりや断つ事が出来る。どこに飛ぶかはワシにもわからぬが、本体のワシがいるエリアに落ちたときはすぐに消しにいくぞ……」

そう言うマーブル。

「クロードさん、魔法陣を破壊すれば……」

そう言うミリア。

「やろうとしてるけど……レイントウスから力が感じられない……」

・ミリアの魔法は・・・」

クロードに言われて魔法を使ってみようとするミリアであったが、氷の一粒も出る気配はなかった。

「余計なことが出来ないように陣内では力を使えないようにしてある・・・ワシは魔王軍の幹部じゃ。甘く見るでないぞ」

「・・・マール・・・」

マールを睨みつけるクロード。

「では、すぐにでも会えることを期待しておるぞ」

マールがそう告げると、クロード達は魔法陣と共にこの場からいなくなってしまうのだった。

そしてまたマールのコピーも、力つきその身体は煙のように消えてなくなっていたのだった。

レベル35：未知なる場での出会い（1）

「ん・・・」

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

ふと目を覚ましたクロード。

「ここは・・・」

ゆっくり起きあがり、辺りを見渡していくクロード。

と、近くにミリアとシオンが倒れているのを見て駆け寄るクロード。

「ミリア！シオン！」

「っ・・・あれ、クロードさん」

意識を取り戻し身体を起こすミリア。

「ミリア身体は大丈夫？」

「マーブルとの戦いの影響で少し身体がだるいですけど」

そう言うミリア。

「そうだシオンは・・・」

「私なら大丈夫です」

そう告げたシオン。

「そうかよかった・・・って、私？それにその声・・・」

何やら驚いているクロード。

「やっぱり私の事男の子だって思ってたみたいですね。私結構髪短いですし、呪いで話す事も出来ませんでしたから」

そう言うシオン。

「私も男の子だって思っていました」

ミリアもクロードと同じ考えだったようだ。

「改めて自己紹介をしておくね。私はシオン。治癒の力で世界中の人を助けるために旅をしていました」

そう言うシオン。

「そうだシオン、僕達は君に治してほしい人がいるんだ」

そう告げるクロード。

「それで私を・・・詳しい話を聞かせてもらえますか？」

そんな訳でシオンに話をしていくクロード。

「そうですか・・・でもある程度は何とかかなりそうですね。あそこ

には色んな葉などを置いてきたので上手くいけば回復できているでしょう……」

「それなら……あそこにはルーティさんもいるから」

とりあえずは安心するクロード。

「でもここって一体何処なんでしょうか」

そう告げたミリア。

「そうですね……まずは私達の状況を確認しましょう……あの坂道の先……この山の頂上ようですから、そこから周りを見渡せるかもしれません」

そう提案してきたシオン。

「よし、それじゃ……」

この辺りの事を知る為に坂の頂上へ向かうクロード達。

「うわぁ……」

思わずそんな声を上げたのはミリアだった。

なぜなら坂を登りきった先には、辺り一面にたくさんの花が咲いていたのだった。

「……不思議ですね」

そう告げたシオン。

「この花が？」

「はい。全てを知っているわけではありませんが、今この辺りの気候から察して咲くはずのない花も見られます・・・それに私も知らない花もある・・・もしかしたら私達はかなり遠くの場所に飛ばされたのかもしれない」

そう言った解釈をするシオン。

「もっと奥に行ってみよう。何かまたみつけれれるかも」

そんな訳で花の咲いている中を歩いていく三人。

と、その時

「何だ、俺達のとっておきの場所に先客がいるな」

そう言って男女三人の子供達が姿を現したのだった。

レベル35：未知なる場での出会い（2）

「君達は・・・」

そんな子供達にそう言うクロード。

「そう言うお前達こそ誰だよ。ここは俺達にとって大切な場所なんだぞ」

そう言う少年。

「いいんじゃないか？アスベル。君が見せたがっていたもの・・・ここに來て僕にもわかったよ」

「リチャード・・・」

アスベルが少々考えていると

「・・・」

じつとクロード達を見ていた少女。

「どうした？ソフィ」

「何でもない・・・」

そう答えるソフィ。

「ごめんなさい、私達もここが君達にとって大切な場所とは知らず

に来たから」

そう言うシオン。

「まあ、仕方ないか。せつかくだし秘密の場所を共有するのも悪くないかな」

そう告げるアスベル。

「こんな僕でもわかるよ。あの人は悪い人じゃないって」

リチャードがそう言うのと、ソフィが無言でクロード達に近付いた。

「私はソフィ、アスベルにつけてもらった名前……貴方達は？」

そう聞いてきたソフィ。

「僕はクロード、そして……こっちがミリアでこっちがシオン」

クロードに紹介されて頭を下げるミリアとシオン。

「ソフィが自己紹介したなら俺達もやらないとな……俺はアスベル」

「僕はリチャードだ。今は訳あってアスベルの屋敷に滞在している」

そう言うアスベルとリチャード。

「でも、ここって素敵な場所ですね。こんなにたくさん花があるなんて」

そう言うミリア。

「俺が見つけたんだ。と、そうだ・・・せっかく知り合ったんだし、ヒューバートとシェリアにも紹介するか」

そう考えるアスベル。

「どうしようか・・・ここが何処かわかればいいけど」

そう言うクロード。

「ここは成り行きに任せてみましょう・・・動くのはそれからでも・・・」

シオンがそう言った時

「ダメではないですか、こんな所まで出歩いては・・・」

そう言って姿を見せた一人の青年。

「ビラス、迎えに来てくれたのか？」

そう言うリチャード。

「そうですね・・・ですが私には貴方を冥土へお迎えすることしか出来ませんが」

「!？」

ビアスの言葉に驚くりチャード。

「一体何の話なんですか？それともまた稽古を・・・」

と、不用意に近付いたアスベルを弾き飛ばすビアス。

「アスベル！」

駆け寄るソフィ。

「アスベル、ビアスは僕の命を狙ってここにきた・・・お前もその一人だったんだな・・・ビアス」

そう言うリチャード。

「そうですよ・・・貴方には死んでいただいた方が都合が良い方がいますからね・・・」

と、話の最中にナイフを投げてきたビアス。

「危ない！」

とっさに飛び出したミリアは、魔法を使わずにその身体でリチャードを守った。

そしてナイフは、ミリアの腕をかすめて地面に刺さった。

「あいつ、なんて事を」

そう言うアスベル。

「余計な事はしないでください。欲しいのは彼の命・・・それ以外は・・・」

と、ビアスの言葉など聞くことなく飛び出していったクロードは、手加減無しで剣を振り下ろしたのだった。

レベル35：未知なる場での出会い（3）

「誰ですか？ 君は」

と、ビアスはクロードの攻撃を受け止めると弾き飛ばした。

「シオン、ミリアの怪我は・・・」

「ひどい傷じゃないけど治療は早い方がいいよ」

そう言うシオン。

「シオン、みんなを連れてここから離れてくれ。あいつは僕が止める」

そう言うクロード。

「俺も戦うぜ。リチャードは友達だからな」

そう言いながら剣を手にするアスベル。

「私も・・・」

と、ソフィも戦線に参加してきた。

「だめだ。ビアスの実力はあの時見せたのとは違う」

そう言うリチャード。

「俺達に任せとけよりチャード」

アスベルがそう言う

「大丈夫だから、シオンはあっちの大きな木の方でミリアの治療を・
・・」

そう告げるクロード。

「任せてクロード」

ミリアは怪我を負いながらも、リチャードをかばっていた。

「子供が加勢とは・・・しかし、これは稽古ではありませんよ。邪魔をするのでしたら・・・」

剣を向けそう言うビース。

「アスベル、ソフィ。二人は援護を頼む。あいつは強い・・・」

「わかってるけどリチャードに剣を向けたあいつは許さねえ」

怒りを見せるアスベル。

「風の力！」

風の力をまとい、ビースに向かうクロード。

「珍しい武器ですね。手土産にいただいておりますか」

と、ぶつかり合うクロードとビース。

「この！」

横から切りかかっていくアスベル。

「まるで子供の喧嘩ですね」

と、biasはクロードを蹴り飛ばすとそのまま剣でアスベルの剣を受け止めそのまま吹っ飛ばした。

「やはり子供……」

そして、同じように向かってくるソフィも軽くあしらっていくbias。

「アスベル、ソフィ！」

「君が頑張らないと子供達に傷が付いてしまいますよ」

その言葉にのせられたのか、感情のままに切りかかるクロード。

「あんな言葉一つで冷静さを失う……君もその子供と同じ……」

biasがそう言うと

「同じじゃないさ……それに……アスベルもソフィも足手まといだとか思っていない」

「氷の束縛……あの人の動きを」

と、大地から鞭のように出現した氷がビアスの身体を絡め取っていた。

「氷属性の・・・っ・・・」

ビアスは術を放ったミリアに気付いた。

「シオンさんのおかげで傷は治りましたから・・・あとは・・・」

「クロードさんに気を取られていたとはいえ、ビアスの動きを封じるなんて」

驚いているリチャード。

「この程度の氷など・・・」

自らの力で氷の束縛を砕こうとするビアス。

だがその間にアスベルとソフィは、攻撃態勢に入っていた。

「ぐうっ・・・」

動けない故にその攻撃をまともに受けるビアス。

そしてクロードは、少し距離を取り剣を握りしめていた。

「この私が・・・」

「火の力・・・これで終わりだ」

ビ^グアスに対して放たれた炎をまとった斬撃。

その攻撃により、氷の束縛は碎かれ、ビ^グアスはそのまま倒れるのであった。

レベル35：未知なる場での出会い（4）

「やった！」

喜ぶアスベル。

「さすがですクロードさん」

そう言うシオン。

「よし、一段落したしラントに戻ろうぜ・・・リチャードも・・・」

そう告げたアスベル。

だがその時アスベルは、まだかすかに動いているbiasに気付いた。

「こうなれば・・・貴方も道連れにして・・・差し上げますよ」

と、倒れた姿勢のまま隠し持っていたナイフを最後の力を振り絞り放ったbias。

「リチャード！！！」

危険を知らせるため叫んだアスベル。

「まだ、そんな力が」

biasの行動に驚くクロード。

「!!」

すぐさまミリアが氷の魔法を使い、ビアスの動きを封じたがすでに手遅れだった。

リチャードへ真っ直ぐ向かっていくナイフ。

「・・・っ!」

恐怖を感じながらも、自身で判断しナイフをかわしたりリチャード。

「よし、上手いぞリチャード」

そう言うアスベル。

「ダメ・・・危険」

と、そう呟いたソフィ。

何とかナイフをかわしたりリチャードであったが、その足下はふらつきその身体は崖の方へ傾いていた。

「リチャード!!」

崖へ落ちようとしていたリチャードの元へ駆け出し、落下寸前の所でリチャードの手を取ったアスベルとソフィ。

「大丈夫かりチャード・・・すぐに引っ張り上げてやるからな」

そう言うアスベル。

「クロードさん、私達も」

「うん」

そして、クロードとミリアもリチャード救出に向かった。

しかし、子供の力には限度があった。

次第に重さに引っ張られていくアスベルとソフィ。

「アスベル！ソフィ！リチャード！」

駆け寄りながら手を伸ばすクロード。

だが、クロード達がアスベル達の身体を掴むより早くアスベル達は崖下へと落下してしまったのだった。

「アスベル君達が・・・」

そう言うミリア。

「ぐっ・・・」

あと少しで助けられなかった自分を責めるクロード。

「シオンさん・・・どうしてさっき手伝ってくれなかったんですか？」

そう聞くミリア。

「情けない話だけど私には助けられるほどの腕力はないんだ。それ
にもしもの事があつたら私が治癒するしかないから・・・」

そう答えたシオン。

「とにかく下に降りれる場所を探す。アスベル達を助けないと」

そんな訳で、クロード達は崖下へ向かうための道を探し始めた。

そして・・・。

レベル35：未知なる場での出会い（5）

崖下へと落ちていったアスベル・ソフィ・リチャードはというと・・。

少々いざこざな事がありながらも、上に戻るために細道を登ってき
ていた。

「こんな所でモンスターに襲われたらまた落ちる・・・よな」

そう言うアスベル。

「大丈夫、私が上手く倒す」

そう告げたソフィ。

「男が女の子に守られるのはな・・・」

何やら複雑な心境のアスベル。

「二人とも静かに・・・」

と、一番後ろを歩いていたリチャードがそう言った。

「どうしたんだリチャード。疲れたのか？」

そう聞くアスベル。

「モンスターの鳴き声が聞こえた気がして」

そう呟くりチャード。

と、次の瞬間出番を待っていたかのように草陰から二体のモンスターが飛び出してきたのだった。

「おいおい・・・こんな狭い場所で・・・それも二体・・・いくらソフィでも」

そう言うアスベル。

「戦う・・・」

そう呟くと拳を構えるソフィ。

その頃、崖上のクロード達は下で起きているアスベル達の戦闘を目撃していた。

「アスベル達を助けに・・・」

と、急ごうとするクロードを止めるシオン。

「下の狭い通路に飛び込むのは危険です。下手をすれば今度は貴方が落ちるかもしれないんです」

そう言うシオン。

「でももう少しでこっちに上がってこれる状況で・・・」

そう言うクロードを横で見ながら、ミリアがある決意をした。

「私がやります。私の魔法なら・・・」

「ミリア・・・貴方の魔法は・・・」

シオンが何かを言おうとしたが

「わかってます。壁から氷の柱を出現させて、モンスターを突き落とす。でも、狙いがずればアスベル君達を巻き込んでしまうかもしれません。でも、何とか出来るのは私しかないから」

そう言い崖下をのぞき込むミリア。

「待ってミリア・・・どうやら私達の出番はないみたいだよ」

そう告げたシオン。

「えっ」

驚いた表情を見せるミリア。

改めて崖下を見てみると、アスベル達三人が協力してモンスターと戦っていた。

「大丈夫かりチャード」

「僕なら大丈夫。それより・・・」

そして、何とか三人の力だけでモンスターを撃退することに成功していた。

「力を合わせれば何とかなるものだな」

そう言うアスベル。

「アスベル、あの大きな木の根を利用すれば上に戻れそうだ」

そう告げるリチャード。

「アスベル！聞こえるか」

と、その木の所からクロードの声が聞こえた。

「クロードさん」

と、手を差し伸べるクロード。

そして、登ってきたアスベルの手を掴み引き上げるクロード。

「ありがとうクロードさん。次はソフィ」

ソフィに手を出すアスベル。

そしてソフィを引き上げた後、アスベルはリチャードに手を伸ばした。

「ほらリチャード」

「う、うん」

手を伸ばしリチャードも無事に上に戻ることが出来た。

「三人ともじっとしていて・・・簡単に治癒魔法をかけるから」

そう言うときアスベル達に治癒魔法を発動させたシオン。

「暖かい・・・感じ」

そう呟くソフィ。

「でも無事でよかった。僕がもっと早く助けに・・・」

そう言うクロード。

「そんな事ないって。それに俺達は力を合わせた事で戻れたんだ。これって友情の力だよな」

「友情・・・」

アスベルの言葉にそう呟くリチャード。

「ああ、俺達って友達だろ」

「アスベル・・・リチャードとも・・・私も友達？」

そう聞いてきたソフィ。

「当たり前だろ」

ソフィにそう言うアスベル。

「友達・・・」

「そうだな・・・良いこと思いついたぜ。この木を使って友情の誓いをやろう」

そう提案したアスベル。

「アスベル君達、何をするんでしょうか」

アスベル達を見守っているミリアがそう言った。

「友情の誓いって・・・」

リチャードが聞くと

「街の言い伝えさ。木に名前を彫ってその前で手を合わせた誓いをするのかなうって」

そう説明するアスベル。

そして木に名前を彫っていくアスベルとリチャード。

「ほら、ソフィも」

「書き方がわからない」

そう呟くソフィ。

「じゃあ一緒に書こう」

そんな訳で一緒にソフィの名を掘るアスベル。

「よし・・・と、そうだクロードさん達も」

「えっ、僕達」

驚くクロード。

「そうだね。僕達を助けてくれた・・・」

そう言うリチャード。

「クロード達も・・・友達」

そう呟くソフィ。

「やりましょうクロードさん」

と、木に向かうミリア。

そして、クロード達も木に名前を彫っていった。

「それじゃみんな手を・・・」

アスベルの言葉に手を出すメンバー。

「例えこの先何があっても」

「僕達は友達でいよう」

「友達で・・・」

そう言うアスベル・リチャード・ソフィ。

「ずっとずっと友達で・・・か」

そう告げるクロード。

しばらく手を合わせていたアスベル達。

「よし、これで俺達はずっと友達だ」

そう言うアスベル。

と、その時

「アスベル様！いらっしやいませんか！」

「リチャード様！」

そんな声が後方から聞こえてきたのであった。

レベル35：未知なる場での出会い（6）

そんなこんな事があり、場面はラントの街。

「それじゃ頼むよフレデリック」

そう言うアスベル。

「かしこまりました、アスベル様。しかし、驚きでございますな」

そう告げるフレデリック。

「俺も一人前になったら・・・」

と、何かを考えているアスベル。

「兄さん・・・あんまり危ないことは・・・」

「そうよ・・・何ともなかったからよかったけど」

そう言う男の子と女の子。

二人はヒューバートとシェリアといい、すでにクロード達との自己紹介は終わっていた。

「父さんだって怒ってたし・・・」

弱々しく言うヒューバート。

「しばらくは家から出るなだってさ・・・まあ、リチャードに良いもの見せれたしな」

そう言うアスベル。

「でも、本当によかったのか？僕達までおじゃまして」

そう告げるクロード。

「大丈夫。フレデリックが上手くやってくれたから」

そう答えるアスベル。

「はい、それにクロード様ミリア様シオン様はアスベル様とリチャード様をお助けいただいた事もありますから。遠慮することはございません」

そう話すフレデリック。

「アスベル・・・」

と、その時ドアの外からリチャードの声が聞こえてきた。

「リチャード？開いてるから入ってこいよ」

アスベルに言われ部屋に入るリチャード。

「どうしたんだ？何か元気がないみたいだけど」

そう告げるクロード。

「急なことなんだけど、王都へ戻ることになったんだ。父上の状態が悪くなったらしい。それにビアスのこともあるからと・・・」

そう説明するリチャード。

「リチャードの・・・」

「それとアスベルの・・・」

リチャードがそう言った時

「そこから先は私から話そうか」

そう言いながら部屋に入ってきたアスベルの父・アストン。

「先程殿下が話されたとおりだ。そして私も王都へ共に向かう。あとヒューバート」

「何？父さん」

不思議そうな表情を見せるヒューバート。

「お前は私と一緒に来い、いいな」

そう言い放つアストン。

「僕を王都へ・・・」

驚いているヒューバート。

「父さん、俺は・・・」

そう言うアスベルだが

「言ったはずだ・・・お前は家でじっとしていろ」

「何だよ・・・ヒューバートばかり」

機嫌が悪くなるアスベル。

「ごめん・・・」

謝るヒューバート。

「行ってこいよヒューバート。俺のことは気にするな」

そう言うアスベル。

「わかった。それじゃお土産買ってくるね」

笑みを見せながらそう言うヒューバート。

「では殿下・・・支度を終えた後庭の方へ・・・」

「わかりました」

リチャードがそう返事すると、部屋を出ていったアストン。

「急なことですまないみんな・・・」

「気にしなくていいよ。そうだろアスベル」

クロードがそう言う

「当たり前だろ」

そう言い放つアスベル。

そして、しばらくの後みんなは庭に集まっていた。

「クロードさん達はいつまでラントに？」

「僕達も出来る限り早く出ると思う。やらなきゃいけない事があるから」

そう言うクロード。

「そう・・・それとアスベル。すぐには無理かもしれないけどきつとまたラントに来るよ」

「そうだな・・・その時はまた色々案内してやるぜ」

そう告げるアスベル。

「もしアスベル達が王都に来る機会があれば今度は僕が案内するよ」

「ああ、必ず行くよ」

そう返事をするアスベル。

「誤解をしないでほしい。これは君に預けるだけだから」

そう言いながらはめていた指輪をアスベルに渡した。

「城の衛兵にこの指輪を見せたら僕に話が来るようにしておくよ」

「そう言うことなら・・・預かっておくよりチャード」

リチャードから指輪を受け取るアスベル。

「・・・そろそろ出発みたいだ・・・アスベル」

そう言うリチャード。

「ああ、またな」

と、リチャードは付き添いの男達と一緒に庭をあとにした。

「それでは私達も出発するぞ」

そう告げるアストン。

「そうだヒューバート、これもっていけよ」

と、アスベルはヒューバートにお守りを手渡した。

「兄さん・・・」

「行くぞヒューバート」

「う、うん」

「行ってらっしゃいませ。アストン様、ヒューバート様」

そう告げるフレデリック。

そしてアストンとヒューバートも出発していったのであった。

レベル36：別れと約束

屋敷の一室に集まっていたクロード達三人。

「とりあえず一段落はしたみたいですが・・・」

そう言ったシオン。

「このラントの街がある大陸が僕達がマールと戦っていた場所からどれくらい離れているのか・・・」

そう言うクロード。

「それに私達の戦いがこののかなラントを巻き込んでしまうかしれませんか」

そう告げるミリア。

「とりあえずあのフレリックって人に話を聞いてみよう。何か分かるかも・・・」

クロードがそう言った時、突然近くで大きな物音がした。

「今は・・・」

「隣の部屋からみたいだ。行ってみよう」

そんな訳で急いで部屋を出るクロード達。

クロード達が部屋を出ると、隣の部屋の前にソフィが立っていた。

「ソフィ？」

そう呟くクロード。

「これは開いたっていうか壊したんだけどな」

そう言いながら隣の部屋から出てきたアスベル。

「クロード達も来た・・・」

そう言うソフィ。

「クロードさん・・・そうだクロードさん達も王都に行きませんか？」

そう聞いてきたアスベル。

「誘ってくれるのは嬉しいけど、僕達も行かなきゃいけないから」

そう言うクロード。

「そっか・・・」

ちよつとがっかりした様子のアスベル。

「帰り道・・・」

そう呟いたソフィ。

「どうした？ソフィ」

「リチャードの所にいく前に・・・」

そう告げるソフィ。

「どうしたんでしょうか・・・」

不思議に思うミリア。

「王都の方は急ぎって訳でもないしな・・・」

そう言うアスベル。

「大丈夫・・・クロード達・・・帰れると思う」

と、そんな事を言うソフィ。

「帰れるって・・・」

ソフィの言葉に少々驚いているクロード。

「彼女からは不思議な感じがします・・・ここは彼女を信じてみてはどうでしょうか？クロードさん」

そう考え意見を出すシオン。

「うん・・・」

「こっち・・・」

と、歩き出すソフィ。

「ソフィ、玄関のドアは壊さずにな・・・」

そう伝えるアスベル。

そして一行は、王都へいく道とは違う道を歩いていた。

「なあソフィ。何処へ行くつもりなんだ？」

そう尋ねるアスベル。

「お花が・・・いっぱい」

「あの裏山に？帰り道とかあるのか」

「感じるから・・・」

それだけ告げると、スタスタと先を歩いていくソフィ。

「・・・」

ソフィを信じ、ソフィの後ろを歩いていくアスベル達。

「何か女の子の後ろを歩く男の子とか格好悪い気がする」

そう呟くアスベル。

「アスベルはもっと強くなりたいんだよね」

そう聞くクロード。

「はい、クロードさんも強くて格好良くて・・・俺将来騎士になりたいんです」

「目標に向けて怠らずに頑張れば、きっとその目標は達成出来ますよ」

そうアスベルに伝えるシオン。

そんな話をしている間に、一行は裏山にある花畑に到着した。

「クロードさん、あれって・・・」

驚いた表情を見せるミリア。

クロード達が見た光景とは、花畑の真ん中に淡く光っている魔法陣なのであった。

「あの時とかにはなかったのに」

そう言うアスベル。

「確かに・・・普通なら気付くはずだけど」

そう言うシオン。

「クロード達来た時にこの力は消えてた・・・それと多分・・・」

自分自身に手を当てるソフィ。

「この魔法陣ってマールブルが・・・」

ミリアがそう言う

「恐らく・・・」

そう告げたクロード。

「少し前から感じてた・・・でも力弱くなってる・・・近い内に消える」

「迷っている時間はないみたいね・・・クロードさん！」

クロードに意見を求めるシオン。

「うん、行こう」

迷うことなく決断したクロード。

「・・・私達は先に行きましょう、ミリアさん」

と、ミリアの手を引っ張り魔法陣に乗るシオン。

「あの、シオンさん」

「クロードさんに少しだけ時間をあげたいので」

ミリアにだけ聞こえるように言うシオン。

そして、魔法陣の上にいたミリアとシオンはその場から消えてしまった。

「アスベル・・・お別れだな・・・また会えるかわからないけど」

そう言うクロード。

「クロードさん、俺絶対に強くなる。それでいつかわからないけど一人前になったらクロードさんと一緒に少しでも旅がしたいです」

そう言い放つアスベル。

「その時にはアスベルは騎士になっているよな・・・次に会う時が楽しみだな・・・約束だなアスベル」

そしてその後、二人は握手を交わした。

「あの樹に誓ったように・・・クロードさん達ともずっと友達で仲間」

「ああ・・・じゃあなアスベル・・・ソフィ」

そう告げると魔法陣に乗るクロード。

そしてクロードもまた、この場から消えていった。

「力も・・・消えていく・・・」

ソフィがそう言った直後、魔法陣の光が消え陣自体も消滅したのだ
った。

「よし！気持ちを切り替えてリチャードのいる王都へ急ごうぜ」

アスベルの言葉に頷くソフィ。

だが、クロード達もアスベル達も知らなかった。

これから起きる出来事を・・・。

そして、起こる悲劇を・・・。

しかし今は、それぞれの目的の為に進んでいく二組なのであった。

レベル37：はざまにある街（1）

「……っ……ここは……」

しばらく目を閉じていたクロードであったが、目を開き辺りを見渡した。

「身体の方は大丈夫ですか？」

そう聞かれて横を見ると、近くにシオンがいた。

「シオン……」

「ん……あっ、クロードさん、シオンさん」

先程まで気を失っていたのか、起きあがるなりそう告げたミリア。

「軽く私が診ますから……じっとしててください」

そう言うとシオンは、クロード・ミリアの腕に触れ治癒の力を発動させた。

「シオン、僕は何処も怪我は……」

そう告げるクロード。

「はい、でも今やってるのは治療ではなくて……診察って感じですよ」

そう言いながらも治癒の力による診察を続けるシオン。

「はい、終わりましたよ」

そう言い二人から手を離すシオン。

「特に異常はないですね。ああいう転移系の術は身体に影響を及ぼしたりするので」

そんな事を語っていくシオン。

「それより、ここはマーブルと戦った場所・・・なのか？」

「違いますね・・・私も色々大陸をまわってきて、ここを知ってます・・・流石に細かい場所はわかりませんが、あの大陸から海をかなり越えた先にある大陸です」

そう説明するシオン。

「よく覚えているんですね・・・シオンさん」

驚いているミリア。

「とにかく歩いてみよう・・・ここは山道みたいだからおりていけば街があると思う」

そう考えるクロード。

「そうですね・・・行きましょう」

シオンも了承して山道をおりていくクロード達。

しばらくすると、視界も開けて前方に街が見えていた。

「街だ」

笑みを見せるクロード。

「あの街・・・」

何かを思い出しているシオン。

「どうしたんですか？」

そんなシオンを見て尋ねるミリア。

「いえ・・・前に立ち寄ったかなって・・・この大陸には来たことはありますが全ての街や施設を巡りきったわけではありませんから」

そう告げるシオン。

そんなこんなでとりあえず街へ入るクロード達。

しかし、他の街と比べて何かおかしいのに気付いた三人。

「静かすぎませんか？」

そう感じたミリア。

「シオン、ここは前には？」

クロードが尋ねると

「来た・・・事はありますけど、こんな雰囲気ではなかったです」

そう答えたシオン。

「宿に行ってみようか・・・休みたいし情報も得られるかもしれない」

そう考え宿へ向かうクロード達。

と、その時建物の陰から剣を持った男が飛び出してきてその剣を振り下ろしてきたのであった。

レベル37：はざまにある街（2）

「!？」

とっさの判断でクロードは、鞘に入れたままのレイントゥスで相手の剣を受け止めた。

「!？」

と、相手も攻撃を受け止められて驚いたのか剣を落としクロード達から距離を取った。

「クロードさん、大丈夫ですか？」

心配するミリア。

「僕は平気だ。それよりも・・・」

クロードは離れたその男を見た。

「く、来るな！人の姿をしてたって魔王軍は魔王軍だ！」

そう叫んだ男。

「少し落ち着いてください。私達は・・・」

話をしようとしてみるシオンであったが

「近付くな！」

と、近くにあった棒を手に取り攻撃してきた男。

「クロードさん、私の魔法で足止めを・・・」

そう言うミリア。

「だめだミリア。相手は普通の人だし事情も聞きたい・・・とりあえずここは・・・」

と、レイントウスを手放したクロード。

「クロードさん、何を」

驚くシオン。

「出て行け！魔王軍！」

思い切りクロードに向けて棒を振り下ろそうとする男。

だがその時、誰かが飛び込んできてその男の頭を杖で叩いたのだった。

「えっ・・・」

いきなりの事で驚いているクロード達。

「何をやっとするか馬鹿者！」

突如現れたのはお婆さんであった。

「キ、キクノさん・・・でも、こいつら魔王・・・」

男がそう言うときクノと呼ばれたお婆さんは、男の頭を更に叩いた。

「全く、若者のくせにちゃんと区別も出来んのか・・・と・・・」

キクノはクロード達の方を向いた。

「すまぬな旅の方・・・街の若者の無礼を代表としてワシが詫びよう」

そう告げ頭を下げるキクノ。

「あの別に僕達は・・・」

「フーノ！何をぼーっとしている！詫びの代わりに客人に茶ぐらい用意せんか！」

「は、はい！！」

フーノの呼ばれた男は、慌てて立ち上がると家の中に飛び込んでいった。

「あそこがワシの家じゃ・・・何もないところなのじゃがくつろいでいってください」

そんな感じでキクノの家に招待されたクロード達。

フーノが出したお茶を飲みながら話をするクロード達ときクノ。

「なるほどな・・・魔王軍と戦っておったのか・・・そんな人達を魔王軍扱いとは・・・」

フーノを睨みつけるキクノ。

「私達は怪我をしたわけではありませんし、フーノさんもこの街を守ろうとして剣を取ったんです・・・あまり責めないであげてください」

そう告げたシオン。

「客人の皆様がそうおっしゃってくださるのですしたらこれ以上はやめておきましょう・・・」

そう言うキクノ。

「キクノさん、この街は魔王軍の攻撃を受けているんですか？」

そう聞いたクロード。

「客人の皆様はこの街を見てどう思われましたかな」

「攻撃を受けてるとしたら結構綺麗というか・・・」

そう告げたミリア。

「・・・攻撃を受けていないのに先程のような過剰に近い魔王軍に対する敵対心・・・脅迫などの類でしょうか」

考え答えを出してみたシオン。

「簡単に言えばそうですね・・・実はこの街は二つの国境にありましてな・・・それぞれの国を支配しようとしている二人の魔王軍幹部に睨まれている状態なのですじゃ」

そんな事実を重い気持ちで語るキクノなのであった。

レベル37：はざまにある街（3）

「魔王軍にしてみればどちらが国をおとしても変わりありませんが、幹部は手柄の問題で譲り合いはないでしょうね」

冷静にそう語るシオン。

「・・・好きなだけこの町にいなさい・・・」

そう告げたキクノ。

「でも僕達は・・・」

クロードがそう言う

「この町は睨み合いが続いている間は無事じゃろうからな・・・それに貴方達は魔王軍の幹部を倒しておるしな・・・町の皆も事情を知ればわかってくれるじゃろう・・・まあ、あんな行動をとるのはフーノぐらいじゃがな」

キクノがそう言うと、小さくなるフーノ。

そんな訳で空き家を借りてそこで一休みするクロード達。

「宿代がういたのは助かりましたけど・・・」

そう告げるシオン。

「この町を助けたいけど・・・せめてルーティさん達と合流出来れ

ば・・・」

そう言うクロード。

「今はこの三人しかいません。それで出来る限りの事をしましょう」

そう提案したシオン。

「でも今は休みましょう。気持ちを落ち着かせてからではないと、何をやるにしても危ないですよクロードさん」

と、そう告げたミリア。

「わかった・・・休みながら色々考えるよ」

それから各々身体を休めていくクロード達。

「クロードさん」

と、クロードに話しかけるシオン。

「どうしたんだ？シオン」

「クロードさんは強い正義の心を持っています・・・この町を二人の幹部の勢力から守りたいと・・・今の私達では難しいことでも・・・なぜクロードさんはそこまで・・・」

そう聞いたシオン。

「七つの宝具の一つ・宝剣レイントゥス・・・それを狙って僕の町

は・・・壊滅したんだ」

そう答えるクロード。

しかし、その表情は険しかった。

「それも魔王軍が・・・」

「多分・・・だから僕は同じ悲しみを誰にも与えたくないんだと思う・・・それで無茶しちゃったらダメなんだろうけど」

と、シオンはクロードの話を聞いて何かを考えていた。

「わかりました。私は貴方について行くことを自分の意思で決めました。ですからクロードさん。私達を導いてください」

しっかりとクロードを見つめていたシオン。

その顔に不安などの気持ちはなかった。

それはクロードを信頼しているからなのであろうか。

「シオン、ミリア・・・行こう」

二人にそう告げると立ち上がるクロード。

そして三人はキクノの家に向かった。

「・・・行かれるのですか」

「はい、ただじつとしていても解決しませんから・・・魔王軍と戦ってきます」

そう言い放つクロード。

「ワシ等に力があれば手を貸せるのじゃがな・・・すまんの」

そう言うキクノ。

「大丈夫です・・・何とかしてみます」

「念のために周囲の警戒はしておいてください。私達が向かわない側の魔王軍が動き出す可能性がありますから」

そう説明するシオン。

「わかりました・・・お氣をつけて・・・もし辛くなったのならいつでも戻って休まれて結構です」

そう言い微笑むキクノ。

「ありがとうございます・・・絶対に魔王軍を倒してきます」

そう意気込み出発していくクロード。

「まったく・・・あのバカ者は・・・無事に戻ればよいがの」

そう呟いたキクノ。

そして、町を出たクロード達の前には何とフーノの姿があったのだ

つ
た。

レベル38：対峙するナイト（1）

「えっ、フーノ」

驚いた表情を見せるクロード。

「なぜ貴方がここに…私達は…」

シオンがそう言うのと

「俺はこの街じゃ一番やれる…だったら俺が行かなきゃどうしようもないだろ」

そう告げるフール。

「ありがたい行為なのはわかりますが、私達が相手にしようとしているのは魔王軍…今の私達三人でさえ何とかなるか分からないのですよ…」

「だったらなおさら人がいるんだろ…道具もいろいろ準備して持ってきた。足手まといにはならねえよ」

そう言い放つフール。

「クロードさん、どうしましょうか」

そう尋ねるミリア。

「…わかった…でも、無茶だけはしないでくれ。キクノさんだって

…」

「わかってるさ。キクノさんにも安心して生活してほしいから…だから、魔王軍を倒すんだ」

「仕方ありませんね。では、行きましょう」

冷静にそう告げるシオン。

「フーノさん達は何か魔王軍の情報をお持ちなんですか？」

そう聞いたミリア。

「いや、俺達は街から外に出ないようにキクノさんに言われていたから…魔王軍の幹部の顔も知らないよ」

そう答えたフール。

「そうか…とりあえず調べながらやるしかないな…まずは拠点を見つけ出して…」

「あまり時間はかけられませんからね…私達がこの周辺にいる事を知れば…マールブルもまだ健在です。一気に攻められたら太刀打ち出来ません」

そう考えるシオン。

だが、そんな時…すでに魔王軍は動き出していたのだった。

「あいつは幹部の中でも一番上なんだろうな…元々ここはそいつの

領地だったんだろ？ ロンド」

「そうだな…ウルフエン様は他の幹部の事はあまり話さなかったけど…そんな事少し言ってたっけか…。でも、お前が新たな幹部として入ってくれて助かったよ…ナイト」

そう告げたロンド。

「俺は俺の目的の為だ…だが、お前もなぜ俺の部下に入った？ 外からやってきた俺なんかのな」

ナイトがそう言う

「お前を魔王軍に入れるようにしたのは俺だしな…ウルフエン様もいなくなった以上、俺はお前についていくって決めたんだ」

そう告げたロンド。

そんな会話をしながら歩いていたナイトとロンド。

そして、それは偶然的に起きてしまうのであった。

「止まれ、ロンド。人の気配だ」

「気配？ この辺りじゃ魔王軍の脅威があるからあまり人は出歩かないって聞いたけどな」

そう言うロンド。

「…なるほど…そういえばマーブルとかいう奴がちよっかいを出し

たと…あいつも言っていたな…その影響でか」

「？」

何やら意味がわかっていない様子のロンド。

そして、緩やかな坂を上ってきていたクロード達。

「えっ…」

先頭を歩いていたクロードは、坂を登り切りその先を見たときそんな言葉を呟っていた。

「クロードさん？」

「ロンド、お前も久しいんじゃないのか？なあ、クロード」

大剣を構えるナイト。

「あいつは…」

「あの人達って…闘技場で…」

そう告げるミリア。

「何やら、あまり良い雰囲気ではないようですね」

そう言うシオン。

「ナイト…何でお前がここに…また、僕のレイントウスを狙って」

「今の状況が変わったのは俺もお前も同じようだからな…改めて自己紹介しておこうか。俺は漆黒の大剣士ナイト…今は魔王軍の幹部の一人だ」

「!?!」

ナイトの言葉に驚くクロード達。

「と、いつでも元々ここを支配していた奴に変わってもらったただけだがな」

「じゃあ、隣のあの人も…」

「忘れてないぜクロード…あと、ミリアだったな。ウルフエン様を亡き者にしたお前達は…」

「ウルフエン…魔王軍の幹部の…」

そう呟くクロード。

「クロード! お前だけでも俺が!」

武器を構え駆け出そうとしていたロンド。

だが、その直後近くの木に強力な衝撃波が激突し爆発を起こした。

「!?!」

全員がその爆発に注目し、それを起こしたのがナイトと分かりナイ

トをじっと見た。

「落ちつけロンド。今は戦うつもりはない…それにいつでもレイントゥスは奪えるからな」

そう言うナイト。

「ナイト…お前…何で魔王軍なんか…」

「魔王軍の目的は七宝具らしいからな…目的が一致したからこそ入ったまでだ」

そう答えるナイト。

「あいつらが魔王軍…あいつらを倒せば街は救われるんだ」

と、武器を構えフルが一人ナイト達に向かって駆け出していったのであった。

レベル38：対峙するナイト（2）

「フル！？」

クロードが止める間もなく、フルはナイト達に斬りかかっていた。

「戦うつもりはないんだろ？どうするんだよ」

そう聞いたロンド。

「俺が相手をするのはクロードだ・・・他の奴等には・・・」

ナイトはそう言うのと大剣を構えた。

「クロードさん！」

叫ぶシオン。

「間に合え・・・レイントウス！」

風の力を発動させ、自身の動きを高めるとナイトに向かっていくクロード。

クロードがやって来ていることに気付いていながらも、攻撃を止めないナイト。

「何だ・・・こんな大きな力・・・」

ナイトの一番近くにいたロンドは、高まっていくナイトの力に驚いていた。

「一撃目はサービスだ。しっかりその瞳に焼き付けろ！」

そして、動き出したのはクロードだけではなかった。

「クロードさん！」

ナイトの攻撃準備完了と同時に、動き出したミリア。

「奥義・烈閃碎牙」

地を走り全てを砕く閃撃が、ナイトの大剣から放たれた。

「!？」

視界に入ったその一撃を見て、クロードもフルも驚いた。

「私が止めます！」

と、大きな氷の壁を出現させたミリア。

「それだけの容量の魔法を発動させるその実力は認めよう・・・だが、相手が悪かったな」

そう告げたナイト。

そして、ナイトの放った攻撃は簡単にミリアの氷の壁を破壊した。

「!?!」

破壊された衝撃で、弾き飛ばされるミリア。

「うっ……」

そして、ナイトに向かっていたクロードとフルもその衝撃波の影響で後退させられていた。

「ミリアの氷の壁が……」

「俺のこの大剣……名を【黒牙】という。宝具の一つであるレントゥスのように多種の能力があるわけではないが、こいつには防御の力を無効化する能力がある」

そう説明したナイト。

「ミリアさんのあの氷の壁も防御の力……だからあんなに簡単に破壊出来たのね」

そう言うシオン。

「ロンド、戻るぞ」

静かにそれだけ告げると、クロード達に背を向けるナイト。

「ナイト……本当の実力……」

「行くぞ……」

何も言わせない感じで、ロンドと共にこの場を去っていくナイト。

そしてクロード達は、それをただ見ていることしか出来なかったのであった。

それからフルを連れ、町へと戻ったクロード達。

「すみません・・・僕達がいながらフルを守りきれずに・・・」

そう言うクロード。

「勝手についていったのはあいつじゃよ。謝ることはありませんよ」

そう告げたキクノ。

と、ここで別室に行っていたシオンがキクノの部屋に入ってきた。

「シオン、フルの方は・・・」

心配そうに聞くクロード。

「怪我などはとくにありません。しかし、精神の方は・・・」

そう告げたシオン。

「ナイトの一撃が原因なんですか？」

尋ねるミリア。

「それしか考えられません。相手の強さを目の当たりにして・・・」

「・・・怪我がないのなら大丈夫じゃ。ゆっくり休めば明日には元気になっておるよ」

そう言うキクノ。

この日は特に何もできないまま、時は過ぎていき・・・。

翌日。

事態は思わぬ方へと動いていくのであった。

レベル39：マールとデスター（1）

いつもより早く目が覚めたクロード。

「ナイト・・・僕はあいつに・・・」

壁に立て掛けてあるレイントゥスを見ながらそう呟いたクロード。

そんな中、魔王軍内で大変なことが起きようとしていることをクロード達は知らないでいた。

こちらはナイトとロンドが拠点としている村。

と言っても、ナイトがここに来る前にすでに滅びた村である。

「こんなところに住まわずとも魔王様に認められたお前さんならもつと良い所に住めたのではないですか」

そう言って物陰からナイト達の前に姿を現したマール。

「お前は・・・」

「新しく幹部になったやつが隣のエリアの担当になったと前担当から聞いたのでな・・・様子を見に来たのじゃよ」

そう告げたマール。

「隙あればこのエリアも獲るつもりか？」

そう聞くナイト。

「どうじゃろうかのう・・・と、後ろのガキは見覚えがあるな。あの単細胞の部下だった男か」

「何だと！」

マーブルの言葉に怒りを見せるロンド。

「マーブル・・・ただの様子見だけじゃないだろう。目的は魔王が集めようとしている七宝具か？」

そう聞いたナイト。

「魔王様に献上していないそうじゃな・・・それに何やら因縁あるあのクロードとやらも宝具の剣を持っておるな・・・」

そう告げたマーブル。

「お前・・・」

何かを秘めているそのマーブルの瞳に、動揺するロンド。

「ここは俺が任されたエリアだ。今すぐここから出ろ」

そう言い放ったナイト。

「ワシに比べれば若僧で新入りじゃろうが。ここはおとなしくして・・・」

マーブルがそこまで言った時、ナイトの大剣がマーブルを貫いていたのだった。

「!？」

「なっ・・・!？」

驚いた表情を見せるロンドとマーブル。

「貴様・・・このワシにこのような・・・だが、この程度でワシは・・・魔王様に報告すれば・・・貴様は・・・」

大剣を抜かれてふらつきながらもそう語るマーブル。

「ならば、ここで・・・」

大剣を構えるナイト。

だが、次の瞬間二人の間に黒い光と共に新たな人物が姿を現したのだった。

「お前は・・・」

「魔王軍内でも最強の幹部って言われている・・・」

「暗黒使いのデスター・・・じゃと・・・」

ナイト・ロンド・マーブルの三人は、いきなり現れたデスターに驚きを隠せなかった。

「取り込み中だったか・・・」

そう呟いたデスター。

「そうじゃデスター・・・こやつは・・・我等魔王軍を裏切り・・・
ワシを・・・」

そう告げるマール。

「では、暗黒使いとして判決を下そう・・・」

そう言う手ひらに漆黒のエネルギーを出現させた。

そのエネルギーは見ていると吸い込まれそうになるくらいの闇そのものであった。

「闇の判決・・・」

その直後、漆黒のエネルギーを受けたのはナイト・・・ではなく、
マールの方であった。

「何故じゃ・・・デスター・・・ワシは・・・」

膝をつきながらそう告げるマール。

「マール・・・お前の思想は魔王軍にとって害にしかない」

そう言い放ったデスター。

「害じゃと・・・ワシはあのクロードとも戦い・・・」

「魔王様はマーブルの裏の目的を知っている。そして、私の判断でお前を消すことも許可が出ている」

そう言うデスター。

「ワシは・・・ワシはまだこんなところで・・・死ぬわけにはいかんのじゃ」

身体全体から魔法力を放出させるマーブル。

「やはりお前は害だ」

デスターが手をかざすと、マーブルの周囲に闇の膜が張り巡らされた。

「これ・・・は・・・」

「闇の力により消滅せよ」

「デスター!!」

マーブルの叫びと共に、闇の膜は収縮していきそのまま消えていった。

それを見届けてから、デスターはナイトの方を向いた。

「どういうつもりだったんだ？」

そう聞いたナイト。

「ナイトの方がマールよりも魔王軍の目的に近付けると言う魔王様の指示だ」

そう答えたデスター。

「・・・七宝具だったな・・・魔王の集めているものは・・・」

「私は一度魔王様の元へ・・・お前は時の流れに身を任せているといい。だが・・・」

デスターがそう言う

「わかっている。こちらにも宝具が一つある以上は余計なことではない」

「お前は魔王様から信頼されているらしいから・・・頼んだぞ」

そう告げると闇に包まれ消えていったデスター。

「まともに会ったのは初めてだったけど・・・強さのレベルが違うよな・・・」

そう告げたロンド。

「ロンド、本当にいいのか？俺よりデスターについていた方が生き残れると思うが」

そう言ったナイト。

「俺とナイトは何か似てるんだよな・・・デスターは確かに凄かったけど、ウルフェン様以外だとナイトしかいなかった・・・」

「後悔だけはするな」

それだけ言うと建て残っている家の中に入ってしまったナイト。

クロード達は何も知らない間に、事態は動いているのであった。

レベル39：マーブルとデスター（2）

こちらはこの世界のとある場所…。

人の気配などはなく、ただ異様な気配だけが辺りにはあった。

「…魔王様…」

そう言っ姿を見せたデスター。

そんなデスターの前には大きな像があり、その瞳は赤く光っていた。

「報告ご苦勞…中々世界は面白い事になっているようだな、デスター」

「はっ、しかしながらマーブルの奴はやはり…」

そう告げるデスター。

「お前としては珍しいな…獲物を仕留めそこなうとは…」

そう言う魔王。

「魔王様…それは…」

「奴は上手く逃げたようだ…私もマーブルの魔力にだけは注目していたからな」

「申し訳ございません。マーブルを探しだし今度は確実に…」

そう言うデスター。

「もうよい。それにマーブルがこれからやろうとしている事…私にとっては良い事かもしれないのでな」

魔王の言葉に顔を上げて像を見るデスター。

「魔王様の完全なる復活には七宝具が必要…なのになぜあのクロードから宝具を奪うようにご命令をなされないのですか？」

「何事にも順序がある…それに、宝具を奪った所で奴等は確実に私の元までやってくる…ならば戦力を無駄に投入するよりは…ということだ」

そう説明する魔王。

「…しかし、マーブルの件は」

「もうすぐ世界の理は碎かれる…マーブルがやろうとしている事…世界の理を壊し、全ての世界を一つとする…この世界はとてつもなく広い…それ故に、勝手に国と国や大陸が壁を作り他の進入を拒んでいたようなものだ…その理がなくなれば全ての国を大陸を…私が支配できる」

「…マーブルの野望を逆に利用すると…」

「マーブルが私と同じように世界を手に入れようとしている事はわかっていた。だからこそ奴を幹部として迎え入れた…まあ、その話はここまですしやう…」

そう言う魔王。

「ナイトはナイトの意思に任せよ。私の欲する世界は面白くなければならない…つまらない世界などいらないからな…」

「あのクロード一行の存在もその世界に必要と…」

デスターがそう聞くと

「無論だ…だからこそ私はここへと招き入れるつもりだ…だが、ここに来るまでに強くなってもらわなければ困る。そうでなければつまらないからな…デスター…お前はクロード達を監視している。可能ならば強くなる手助けをしてもかまわない…最終的に七宝具が私の元になればいいのだからな」

「承知しました…魔王様…魔王様のご希望通りに…」

すると、赤く光っていた像の目から光が消え魔王の声も聞こえなくなった。

「…随分とクロード達がお気に入りなのですな、魔王様…それとマールブルの目的…理が碎かれた世界は国や大陸の問題など関係なく出入りが出来る…だが、それはクロード達にもおそらく影響が…と、人間の事を考えていても仕方がないな…まずは再びクロード達の元に…」

そう言う姿を消したデスター。

同じ頃…上手く逃れていたマールブルはというと…。

「…自身の転移がわずかでも遅れていたら…そのまま消滅していたな…」

あの状況で場所など選んでいる時間などなく、適当に飛んだためここがどこかわからない場所で精神を落ち着かせているマール。

「もはや魔王軍にも居場所はないな…じゃが…別段もう時間稼ぎも必要なくなっておったからな…クロード達を使った実験も成功した…まあ、まだバランスが悪く転移の際にエネルギーの余波が転移のルートを残してしまっていたが…それはよしとしよう…」

マールは杖先で辺りに陣を描き始めた。

「魔王が欲している七宝具を利用し、世界の全てを手に入れようとしていたが…こうなった以上は仕方あるまい。じゃが、デスターにナイトにクロード…この三人にはワシの真の実力を見せつけねば死んでも死にきれんわ」

と、辺りに描いていた陣が完成し魔力を注ぎ込むマール。

「これを使うとしばらくはワシも力を使えぬが、それで魔王軍の追っ手はまけるはずじゃ」

そう考えるマール。

「世界中にある見えぬ理の壁よ…我が魔力によりて破碎せしめん！…！」

そう言うとも魔方阵から魔力が溢れだし、それは空へと解き放たれ世

界を包み込むように広がっていった。

そして、だれも気付かぬ中進んでいくマーブルの計画。

だがそれは、この辺りの大陸にいるごく一部・・・そして、遠くの大陸にいる者達の中にも見えない変化に直感で気付いているものがあった。

そしてこの世界全体で、静かに何かが起きようとしていたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641g/>

デスティニークエスト

2010年10月13日15時00分発行